230.1
M164
2

始

230.1
Mz64-2

東京帝國大學
文科大學教授 文學博士 箕作元八 著

西洋史話

大正
4. 7. 7
内交

東京
東亞堂發兌

序

曩に目黒書肆主人の乞に任せて、舊稿十數篇を集め、之を余が研究の順序に排列して印刷に附し、南亭史說集と題して世に公にせり。而して此の集に收めたるものは、多くは專門の研究に屬し、平易通俗を旨としたる諸篇は、暫く後日に存して筐底に藏することとせり。

然るに其後に至りて成稿せるものと、前に漏らしし諸篇と、積んで數十篇を算するに至る。頃日小舟木村君、東亞堂出版部主任となり、一日余が寓を訪ひ、爲に一書を著さんことを需む。時に余は公務と自己の研究とに忙殺せられ、殆ど執筆の餘暇なきにより、已むを得ざる旨を陳べて之を辭す。會々君彼の舊稿の存することを知り、之を編纂して一部の書と爲さんことを請ふ。余再思すらく、若しそれをしも謝絕せんか、余

が君に對する年來の交誼を如何せむと。依て忙中の少閑を割いて諸稿を纒め、一括して之を君に委す、爾來校正月を重ね、今や漸くこゝに完成を告ぐ。名づけて西洋史話と云ふ。

本書の校正に際して、前後統一、首尾一貫の必要上より、其名稱辭句に多少の修正を加へたることありと雖も、其内容に至りては、毫も變更したる所なし。唯周圍の事情及び學説の全く一變したる一二の場合に於ては、追記を註して以て讀者の參考に供したり。

以上本書の成れる由來を記して、序文に代ふ。

大正四年六月

箕作南亭

凡例

一、本書は西洋歴史上に著れたる史話、史論、傳記、沿革、批評等に就いて、著者が隨時講演し、若しくは筆錄したるものを集成し、以つて教育家の參考及び一般家庭の讀物に供せんとせるものなり。

一、本書内容の排列は、上古より近世に及ぼし、添ふるに時代に關係少き記事を以てせり。即ち之を分ちて五となし、『オリンピヤの競技の話』より『ローマの武士道』に至る六篇を以つて上古史とし、『西洋に於ける封建制度と武士道との起源沿革』より『コンスタンチノープルの陷落』に至るまでをば中古史とし、『コロンブス時代地理探檢に就いて』より『ナポレオン一世の失敗の原因』に至るまでを近古史中に編入し、『セダンの戰』以下『世界戰亂の眞相及び由來』を以つて最近史とす。而して此等に編入すべからざる『歴史家の泰斗ランケ』以下の數編は假に之を雜纂と題して卷末に附せり。

一、讀者は西洋史話てふ題名の下に『トビノウヲ飛行の説』及び『懷舊談』等の如き、全然歴史と沒交渉なる記事の存するに就いて、或は怪訝の念を生ずることあるべけれども、著者に

とりては、胡馬北風に依り越鳥南枝に巣ふの舊情忘れ難きものあり。雞肋を顧みず、姑く採錄して記念とせるなり。讀者冀はくは深く咎むること勿れ。

一、本書中の地名人名の稱呼は史學會外國地名人名稱呼調査委員會の報告に從へり。

一、卷末に拙稿の成れる年月を記し、以て自他の便に供せり。

大正四年六月

著者識

西洋史話　目次

上古史

オリンピヤの競技の話……一

オリンピヤの所在……オリンピヤ祭の起原……祭典に參加するはギリシヤ民族の獨立市に限る……競技の種類……競技の賞與は月桂冠……競技に關する役員……神殿境内の區分……競技勝者の尊ばれた實例……詩人辯者の參加……エリス人怒りて大に祭場に血を流す……ギリシヤ人は金錢に對して比較的冷淡なり……名譽は金錢以上

アテネの英雄フォルミオ……九

海陸の兩强國……アテネ人漸く浮薄になる……スパルタ大にギリシヤ四北方を略せんとす……フォルミオの作戰計畫……スパルタ艦隊圓陣を作る……敵艦隊の周圍を廻る……一齊に集中的に敵陣を突く……スパルタ政府戰敗の眞因を解せず……資本家の商略の爲に戰機を誤る……プラシヅス謀略フォルミオを油斷せしむ……アテネ艦隊敵と平行して進む……スパルタ艦隊不意に攻擊に移る……フォルミオ急に廻轉して敵軍を破る……スパルタ軍遂に大敗す……アテネ勝利の理由……フォルミオの末路

海將としてのハンニバル……一九

ハンニバルの海將としての技倆等に關し從來說く者鮮し……東西兩洋衝突の歷史……ローマ、カルタゴ亦東西洋の衝突……三回のポエニ役……第二役はハンニバルとローマとの戰なり……陸上より進むの困難……マハン大佐の說……兩雄竝び立たず……イスパニヤの財源未だ海陸兩軍を同時に擴張するに足らず……當時兩國海軍勢力の比較……ローマ稍〻カルタゴを侮る……ハンニバル海軍の整備を待つ猶豫を有せず……ハンニバル胸中の成算……ハンニバルの誤算……陸行の爲めに兵數を減ず……ジェノア邊に上陸するの利……ハンニバル國政を整理して復仇を計る……ハンニバルの對ローマ大同盟策……ハンニバル重用せられず……シリヤの陸陣振はず海軍閉塞せらる……ローマ大にハンニバルに備ふ……ローヴス海軍主腦たり……ハンニバル司令官となる……兩軍相近づく……史家ポリビウス……ポリビウスの著書の散逸……史家リヴイウス……史家ネポス……ネポスは時にハンニバルを過賞す……合戰開始前の兩軍の陣形……兩軍偵察の優劣……ハンニバルの作戰計畫……ハンニバル敵軍の行動の自由を破り專ら敵艦突入戰を行はんとす……ハンニバル敵の右翼を壓迫す……同盟艦隊混亂す……ハンニバルの同僚の無能……同盟軍再び振ふ……ハンニバル孤立して危險に陷る……リヴイウスの記事の撞著……彼の海戰戰術は陸戰々術と同精神……彼の陸戰に常に包圍を主とす……カンネー戰の要點……シダ海戰の精神……戰術の沿革……縱陣混戰……橫陣混戰……一角突破戰……包圍戰術……包圍戰の必要條件……泰天合戰は包圍戰と一角突破戰とを兼ぬ……海戰に於ける包圍戰の例……日本海々戰は包圍戰の萠芽なるか

ポンペイ市遺跡と古ローマの風俗……五三

盤梯山破裂の追憶……家屋構造に基く調査の難易……ヴェスヴィウス山……燒野の傳說……ストラボーの記錄……ストラボー時代と現今と山形異る……ヴェスヴィウス山大噴火……殉學者プリニウス……噴火狀況記錄……住民の狼狽……諸市埋沒……其後の噴火……ポンペイ市創建の傳說……ローマ史に顯れたポンペイの好位置……ポンペイの市……演技場に於ける市民とヌケリヤ人との爭……之に關する樂書……ポンペイ埋沒の狀況……ポンペイ遺跡の發見……歐洲一般の驚嘆……發掘事業の不振……發掘事業の曙光……フィオレリの發掘方針……城壁の構造……城門……街衢の車道步道……街衢の狹き理由……噴水器……水道……下水……道路の泥濘……馬車……荷車……家屋壁上の樂書……壁上の廣告文……看板……家の構造……簡單な家の室の配置……稍進みたる家屋の構造……「悲劇詩人」の家……奧向と表向との區別……廊下……表廣間……壁畫……主人室……奧廣間……家族室……貸店……二階家……ポンペイ市民の生活……椅子……臥床……共同臥床……室內裝飾器……燈器……繪畫……畫工執筆の浸畫……嵌石細工……書籍……文房具……蠟引書板……炭と化せる書板……炭に化せられた卷物……溫室法……食物……飲食店……酒類……宴會の醜態……常食の時刻……庖廚……衣服……男子の上衣……男子の下衣……女子の衣服……衣服の洗濯……被物……束髮の種類……髮飾具……履物……浴場……娛樂……演劇……手品、輕業……闘者格闘……墓地……墳墓の構造……埋沒の際遭難せ

るポンペイ市民……石膏を以つて其形を作る……人畜最期の光景見るが如し

大ケーザル……一一七

偉人の定義……ローマの膨脹……内部の腐敗……グラックス兄弟……イタリヤ人皆市民權を獲得す……世界的ローマ維持の困難……ケーザル生誕……青年にして權勢に風せず……海賊の手にありて之を叱責す……平民黨の首領となる……ポンペイウスと結ぶ……借債に苦む……クラッススと結ぶ……閥族勢力を恢復す……三頭政治成る……ガリヤ知事となる……ケーザルの妻は人に疑はる可からず……三頭政治復固定……ケーザルはガリヤ人の巢窟を覆せり……ポンペイウス嫉んで閥族と結託す……ポンペイウス敗北して殺さる……三語の勝報……衆敵皆平ぎ總統となる……ケーザル刺殺さる……最近史家の斷案……地方行政改善……其他諸種の改良……計畫中の大事業……ケーザルの功業は發展的……彼の寛洪……彼の大志……部下を感化す……彼の孝心慈愛……彼の文才……彼の批評

ローマの武士道……一三六

エピルス王ピルス……ローマ人長槍隊と巢の爲めに敗北す……ローマ人の決心……國士タラウザウスの演說……堂々たる答……キネアスの激賞……ファブリキウス封金を返す……巨象に恐れず……又溫言を容れず……ピルスの侍醫密書を送る……兵士勇敢を誇らず盾を失ふを恥づ……命令を守りて灰中に慘死す

中古史

西洋に於ける封建制度と武士道との起源沿革……一四五

封建てふ語の由來……習慣上の原因……親分子分の關係……經濟上の原因……チャールス大帝の地方官……天下混亂より來る封建制度の原因……兵制より來る原因……外寇の騎兵を防ぐの困難……騎兵を養ふ必要……重騎兵養成と小堡砦建築に依り外寇を防ぐ……封建制度の完成……武士の語源……武士道……忠誠敬虔任俠……女子崇拜の由來……禮儀作法……武士階級の成立……武士の初等教育……從士……ヘラルド……武士と爲る儀式……武士に二言なし……主從の義務……演武會……武者修行……武士道文學……武士の罰……武士道の利……武士道の弊……君主權增大封建制度崩壞……兵制の變化……イギリスの弓兵……スウィスのハレバルド隊……フス信徒の車城……傭兵制度……火器の使用……封建の遺風久しく存す……日本に於ける封建制度及び武士道……結論

チャールス大帝……一六四

ローマ的大統一の思潮……ゲルマニヤ的割據思潮……フランクが此融和事業に適せる所以……ローマ法王の地位……ローマ法王とフランクとの結託……法王の窮境……チャールス、イタリヤを平定す……チャールス四方を征伐す……宗教の名を以つて征伐を行ふ……王權強大が融和に便なり……法王チャールスに西ローマ帝冠を加ふ……東西ローマは思想上に區別なし……四

歐人の眼に映ずるチャールス帝の地位……主戰派と文治派……大帝概して文治派の意見を容る
……地方制度……多くの勅令を發す……裁判制度……結論

決鬪の話……一七八

決鬪果して文明の華か……決鬪は二人の對手に限る……決鬪成立の形式……時日場所……介添の内談……メンヅール……メンヅールの服裝……メンヅール會……使用する劍……劍法……切合の光景……時間、休息……決鬪的メンヅール……サーベル・メンヅール……薄弱なる決鬪の理由……對手が紳士たるを要す……重き決鬪……變則の決鬪……フランスの決鬪……決鬪の目的は復讐にあり……傳記的決鬪……ギリシヤ、ローマ人決鬪を爲さず……ゲルマニヤ人の變性……神明裁判……神明裁判の變體……宗教家の寛和手段……武士道……武士の修養……武者修行……武士對平民の決鬪……神明裁判に於ける決鬪……神明裁判の盛期……神明裁判の衰期……神明裁判の大失態……神明裁判禁止の始……現今の決鬪の始……輿論決鬪を稱讃す……名譽裁判……決鬪の全盛時代……リシュリュー決鬪を嚴罰す……決鬪反對の風潮……決鬪漸く行はれず……ナポレオン一世と決鬪……決鬪益々衰ふ……イギリスに於ける決鬪……ドイツに於ける決鬪……法律に禁ずれども實際默許……結論

武士の典型黑太子……二〇七

黑太子の名稱の由來……クレシーに於ける初陣……暗黑王子が元の稱……ポアチエー戰の時代……太子元來の目的は牽制運動なり……俄に大軍至ると聞く……兩軍偵察の不完全……太子軍の危險……タレラン大僧正の調停無效に終る……太子部下を激勵す……戰場の地形……翌日退却の計畫……敵軍に戰鬪を强ひらる……佛軍の陣立……英の弓手能く敵の先鋒隊を擊退す……佛の二陣三陣また挫折す……黑太子持重して追擊せず……佛王總豫備隊を率ゐて進む……太子左右を叱す……逆襲に決す……太子進軍を令す……兩軍の精華衝突す……英の奇兵佛軍を擾亂せしむ……佛王父子親ら奮鬪す……佛王遂に虜となる……太子佛王を探ぬ……太子賓客の禮を以て敵王を迎ふ……オードリーの勇戰……太子の寛大……兩軍の損害……太子敵王を慰む……太子の謙讓禮節……寛大の弊……武士の信義

ジャンヌ・ダルクの性格とその使命……二二四

純潔勇武のオルレヤンの少女……ジャンヌの鄕里……ジャンヌ出世……百年戰役前期……イギリス再度の來寇……チャールス七世の窮境……勤王の孤島バル伯領……活快從順なる村娘……牧師と旅商人との感化……强固なる意志と堅實なる常識……彼女の煩悶……精神の變調……始めて天の聲を聽く……聖ミカエルの姿を見る……兩女聖示現……ジャンヌ處女たることを誓ふ……三聖の示現……漸く慷慨の調を帶ぶ……ジャンヌ蹶起使命を果さんとす……學者の審問に附せらる……ジャンヌ能く難問に答ふ……諸學者等を敬服せしむ……連戰連敗……彼女の天才……眞に武士の模範たり……レンスに戴冠式執行……朝廷因循彼女の策を容れず……終に虜となる……焚刑に處せらる……二十世紀に至りて女聖に崇めらる……結論

コンスタンチノープルの陷落……二四一

トルコに對する今昔の感……コンスタンチノープル創建……市の沿革……東ローマの首都……オスマン・トルコの起……トルコの隆盛……コンスタンチヌス十一世……マホメット二世……初は平和政策……マホメットの遠謀深慮……コンスタンチノープルを取るに決す……先づ海峽に二城を築く……談判破裂……重砲新造……陸海軍勢力……包圍成る……防備の配置……ローマ法王の救援條件……攻防具新舊相半す……攻撃開始……重砲效力少し……初回の大攻撃不成功に終る……陸上より軍艦を運ぶ……城兵敵艦を襲うて勝たず……皇帝開城を拒絶す……城中最後の決心……トルコ軍枚を銜んで進む……城兵奮鬪して屈せず……副將傷く……トルコの一隊侵入す……皇帝戰死……トルコ兵狼藉を極む……マホメット二世入城……梟は宮殿に凱聲を擧ぐ

近古史

コロンブス時代地理探檢に就いて……二五八

中古歐洲の大膽なる航海……中古の想像世界圖……十字軍の結果、地理探檢盛んになる……マルコ・ポーロ……その東方見聞記……記事虚實相半す……盛んに日本の殷富を傳ふ……元寇の記事……大に西人の探檢心を刺戟す……イタリヤ人及びポルトガル人……ヘンリー王子……傳說的ヨハネス王……連りに探檢船を發遣す……ヂニズ・ヂャズの發見……喜望峰迂廻……ヴァスコ・ダ・ガマ遂にインドに達す……ノルマン人の冒險……ノルマン人アメリカを發見す……西航はインドに達するの捷路なりとの說……コロンブスの姓名及び生地……生年月……その生立……コロンブスの集めたる證據……多くは皆想像に過ぎず……ポルトガルの諸學者コロンブスの說を否認す……ジョン王のコロンブスを用ゐざる所以……コロンブスの請求過大……ジョン王コロンブスを詭きしとの傳說……コロンブス乞食となりしとの傳說……英王ヘンリー亦用ゐず……イスパニヤ王及び王后に謁す……イスパニヤの學者またその說を否認す……王は曖昧の間に彼を引留む……コロンブス、イスパニヤを去らんとす……王后遂にコロンブスの請求を容る……アメリカ發見と日本……コロンブス西航中の困難……水夫等の恐怖不平……初めて陸地を認む……コロンブス陸地初認の功を奪ふ……偉人の小過失を隱蔽するの愚……コロンブス固くアジヤ附近に達せりと信ず……コロンブスの歸航……南アメリカに達す……アメリカの名稱の起……マジェランの世界一周……イスパニヤの植民事業……ポルトガルのインド經營……オランダ、イスパニヤに代る……イギリスとオランダとの競爭……フランスとイギリスとの競爭……イギリス遂に第一海國となる……各植民地の獨立……結論

イスパニヤ大艦隊破滅談……二九一

ランケの名言……海權爭奪の略史……世界政策は海を中心とす……世界の運命を決する諸大海戰……アルマダ破滅戰の意味……イスパニヤ人の宗教熱心なる所以……イスパニヤの富國强兵……フィリップ二世の人格……宗教迫害の不利……フィリップ二世の對外策著々成功……レパン

ト一海戰の影響……イスパニヤ隆盛の極……ポルトガルと合同して世界の富を集む……オランダの反……ファルネーゼの南部懷柔……オランダの風伏は時日の問題となる……フランスの宗教的内亂……ギーズ公の陰謀……フィリップ二世とギーズ公ヘンリーとの祕密條約……此目的貫徹の結果……ヘンリー三世誓書を強ひらる……密貿易者兼海賊として英人の海上活動……御伽話の桃太郎は倭寇の標本……ホーキンス父子……ドレークの冒險的世界一週遠征……イスパニヤ、イギリスを惡む……イギリス討伐はイスパニヤの輿論……アルバ公の建議……サンタ・クルース提督の討英計畫案……フィリップ、エリザベスの自滅を期して遠征を延期す……ドレークの遊戯……メジナ・シドニヤ公大艦隊の司令長官に任ぜらる……無敵艦隊の內容……無敵艦隊本名は最幸艦隊……充分宗教的意義を含む……イギリス官民の海洋的精神不完全……イギリス海軍の豪傑揃……海軍當局者の警告……官民始めて覺醒す……當局者の苦心……イギリス海軍の勢力……イギリス軍人の優越……戰鬪開始……英人火船を放つて敵を襲ふ……グラーヴレンの海戰……イギリス軍大勝……無敵艦隊破滅……無敵艦隊失敗の原因……司令長官の無能……戰略を誤れる訓令……得意の突入戰英の砲術の爲めに成功せず……得意の技倆不成功の結果……大艦隊破滅はイスパニヤの元氣を沮喪せしむ……諸國新教徒の奮起……イスパニヤ衰弱の始……大艦隊破滅は世界の運命を決する大事件

オランダの盛衰及びその原因……三二六

オランダ最盛の時代……漁業の隆盛……鹽漬法の發明……漁業に關するイギリス人の慨嘆……造船業、運送業の隆盛……貿易の隆盛……製造業の隆盛……世界商業界の覇たり……農業牧畜林鑛業に適せざる土地……人力能く天惠の缺乏を補ふ……逆境反つて國民の眞性を形成す……早くより自由自治の利を得る……イスパニヤに對して反旗を翻す……眞摯堪忍能く國難を攘ひ海上發展を遂ぐ……オランダ富裕の四原因……教育普及學者美術家輩出……著眼常に遠大……海洋自由論と領海論……自由貿易を日にしながら獨占を勤む……極力他國民の競爭を妨害す……東インドに於いて他國人を壓迫す……時に重き關稅を課するに躊躇せず……オランダ海軍勢力の强大……イギリス海軍の無力……イギリスを壓倒す……スウェーデンを壓倒す……デンマルクを瞞著す……オランダ海上優越の原因……オランダ各州主權を有す……聯合國會の議員は訓令に束縛さるる使臣なり……國家の大方針動搖す……國防に關して各州箇々の利害に拘泥す……營利的國防會社設立論……愚案數々提出さる……オランダの二大弊……眼中唯自黨あるを知る……得意の境遇に立ちて遠謀深慮を忘る……目前の小利に齷齪す……外交術を過信す……絶對平和主義……海軍大縮少……陸軍大縮少……イギリスの起業熱……イギリス初め競爭に失敗す……クロンウェルの海軍刷新……海軍大擴張……航海條例……遂にオランダと開戰す……第二回の戰役……對フランス三國同盟……ルイ十四世オランダ併合の意志……フランス亦經濟上に競爭す……ルイ大いに對オランダ同盟を作る……オランダ殆んど亡滅せんとす……イギリス、オランダの貿易を奪ふ……海上一等國の地位を失ふ……國民の企業心衰ふ……貿易衰微……漁業衰微……工業衰微……外國品滔々として輸入さる……航海、造船業亦衰ふ……資本貸出を主とす……貧富の懸隔甚し……富者の醉生夢死……黃金萬能の弊……國威振はず遂にフラ

ンスの屬國となる

オランダ海軍の名將デ・ロイテル……三六三

偉大なる人物……オランダとイギリスとの競爭……三回の戰役……ロイテルの出身……活潑大膽の小兒……其沈著を表明する幼時の逸話……其初陣……一生二度の負傷……劣勢を以つて敵艦隊を破る……泰然として海賊と問答す……奇策を以つて海賊を退く……家庭の樂みを棄てゝ國難に赴く……ポートランド沖海戰に敵將と戰ふ……イギリスの挑戰……四日繼續の激戰……ロイテル、テームス河口を砲擊して敵の贈を奪ふ……第三回戰役……テクセル海戰……マハン大佐の激賞……對等の技倆ある敵を破る……ロイテル英王の招待を辭す……部下に對する彼の慈愛……頑剛のトロンプ亦彼を善父と稱す……部下を教育感化す……政府復び彼を起たしむ……自ら死を辭せず國旗を辱むるを恐る……當事者彼に强請す……奇蹟的勝利……重傷を被る……死に瀕して尙ほ國家と部下とを念ず……己の痛苦を忍びて士卒の負傷を憂ふ……妻子に遇ふを欲せず……敵王遺骸に禮を竭さしむ

ヴェルサイユ市テニス場の誓……三八〇

ルイ十四世の建てたる宮殿……異常の大工事……ルイの本意は王の威嚴を飾るにあり……壯麗なる大宮殿の傍に粗造なる小建築……ルイ十六世改革の企圖……階級的弊害……三部會招集……三部會の舊組織……組織改革の勅令……ネッケル採決の法を選定せず……ミラボーの論評……三部會開會……三部會故意に成立せず……貴族部會倶部共同成立に應ぜず……三部の妥協成らず……三部決然國民議會と稱す……政府一時會場を閉づ……三部議員等テニス場に集る……有名なる宣誓……當時の議員一人も皆君主政廢止を主張せず……貴は主としてネッケルにあり……王決斷なし……議員等空想に走り事を誤る……結論

佛國大革命時代の虐殺の話……三九三

王政の思想……ヴォルテールの說……モンテスキューの說……ルソーの說……君主主義はフランス人の輿論……共和的精神の浸染……イギリス、アメリカの實例……ルイ十四世恨まる……ルイ十五世の享樂主義……外交失敗……朝廷の腐敗……マリー・アントアネットの不謹愼……王室の威嚴失墜……ルイ十六世の優柔不斷……王外國の力を借らんとす……暴民王宮に亂入す……人民王の內通を疑ふ……プランスウィック公の宣言……王政顚覆……共和政治を布く……新憲法に宣誓せざる僧侶を迫害す……威嚇の爲め在獄者を殺すべしとの說……虐殺は偶發にあらず……實は極めて組織的計畫に基く……虐殺の第一著……マルセーエーズ……アッベー前にて二十二人を殺す……カルメリートにて百二十人を殺す……アッベー內の百七十人を殺す……被虐殺者の總數……チーリーの慘殺……マソープレーの慘殺……ランバル公夫人の慘殺……ソンプリューイ孃血を飲んで父を救ふ……凡て威嚇が目的なり……當時パリーの繁華……祕密探偵……斷頭機の邊には常に見物の婦女あり……斷頭機の模型……首拔菓子……斷頭の遊戲

實行的社會共產主義の祖ババフ……四一一

貧富懸隔の常套……社會共產主義……プラトーの社會主義……中古僧侶の社會主義……トーマスモーアの理想島……第十八世紀の社會の不平等……ルソーの平等論……ルソーは財產共有論者にあらず……マブリーの平等論……マブリーの國家論は國家社會主義に異らず……大革命の初め勞働者は反つて壓抑せらる……勞働社會の不平……ロベスピエール、マラーの說……實行的社會黨起る……パパフ出身……過激黨にすら憚らる……パパフの社會共產主義の梗概……パパフの說の淵源……現狀破壞を主張す……ルソーは理想的、パパフは實行的……其の主義の批評……パパフ益毒舌を振ふ……ナポレオン政府を激勵す……ナポレオンとパパフとの意見の對照……パパフ連りに祕密運動を爲す……パパフの造らんとせる理想の新社會……要するに乾燥無味の原始的農民社會なり……極めて祕密を守る……本意を告げずして人民を瞞著す……時恰かも不平多し……一警部巧に內情を探偵す……政府顚覆實行手段方法……パパフ以下捕縛さる……巨魁等の處刑……其後の社會主義……リープクネヒトの社會主義の未來論……ベラミーの社會主義小說……富人は貧民の不平慰藉を努むべし

ナポレオン一世の失敗の原因……四三六

ナポレオンは大勢を洞察して計畫を爲す……彼の天才も時勢の變遷に依りて誤算を生ず……イタリヤ役に成功せる戰略はワーテルロー役に成功せず……彼は人才を拔擢し其出身を問はず……自己を過信して他の助言を用ゐず……股肱の策士等彼を棄つ……ロシヤ遠征に諸將の忠言を斥く……對英世界政策……文明主義萬能を信じて他國を蹂躪するを恐れず……遂に各國民の愛國心勃發により倒る……英人の國民性を解せず……海軍不振が失敗の大原因……不健康より來る失敗

最近史

セダンの戰……四四五

ナポレオン三世の人物……國民的理想實現を助けて覇業を成す……反つてフランス人の感情を害す……其政策投機的となる……イスパニヤ王位問題……エムスに於ける佛國大使とプロシヤ王……ビスマルク開戰を希望す……王の電報を修飾す……フランスの主戰論勝を制す……遂に開戰……フランス當初の作戰計畫……フランス軍の準備の不完全……ドイツ軍軍備の整然……フランス軍戰略變更……佛軍先づ敵國を侵す……ドイツ軍敵を擊退し國境を越ゆ……パゼーヌの軍メッツに包圍さる……ドイツ軍の大部パリーに向ふ……佛の參謀會議はパリー退却に決す……パリカが伯パゼーヌ救援を主張す……皇帝これに從ふ……パゼーヌの突出策の影響……ナポレオン軍の不備……敵の行動を詳にせず……ドイツ騎兵意外の情報を獲得す……新聞檢閱の粗漏佛國に禍す……ドイツ騎兵敵と衝突してその所在を知る……パリカが伯の電報……ボーモンの遭遇戰……セダンに入るに決す……皇帝徒步市中に入る……モルトケ敵の包圍を策す……セダンの地形……敵我が罠內に入る……ナポレオンの性質と疾病とより來れる不利……ミューズ河橋爆發を果さず……パゼーヌ村の一進一退……ドイツの大元帥及び三傑……パゼーヌ村民の敵愾心……サクソニヤ兵ラ・モンセル占領……マクマオン負傷す……マクマオン司令權をゲユクローに讓る……ウィンペン强請、司令長官となる……新司令官無謀の戰術……ドイツ軍南

方の丘占領……ラ・モンセル亦陷る……パゼーユ遂に敵手に落つ……ドイツ軍四面よりフランス軍を壓迫す……ウィンペン東方を突擊して北方守を失ふ……フランス軍刻々非運に陷る……フランス騎兵の勇敢なる突擊不成功に終る……最後の突擊亦失敗……ナポレオン自ら死地に立つ……終に白旗を樹てしむ……ウィリヤム一世王の歡喜……ナポレオン三世の書狀……ドイツ側寛大なる條件を肯んぜず……ナポレオンの意氣沮喪……兩君主の會見……フランス軍の損害……戰役の終局

南阿戰爭の英雄……四七八

クロンイエの出身……ブールの軍制……彼の批評……田園より起つ……ケープ植民地英領となる……ブール人英人を怨んで移住を爲す……兩共和國の獨立を認む……ケープ植民地政府の兩共和國併合……ブールの大一揆……クロンイエの功名……プレトリヤ協商……南阿に於ける帝國主義……ブールの作戰計畫……イギリスの作戰計畫……實業家の聲に動かされたる戰略……メシューエン輕しく進む……クロンイエの前衛カッフェルン丘を守る……ブールの戰術……ベルモントの合戰……英軍の損害多し……グラスパンの合戰……英軍炎暑に苦む……モッデル河戰場地形……クロンイエ敵の夜襲を擊退す……英軍遂に敗北す……他諸地方の英軍亦敗る……ロバーツ將軍英司令長官となる……戰略一變……クロンイエ軍の全滅を目的とす……南進はブールの最良策……ブールの紀律亂る……クロンイエ敵を侮る……ブール軍退却を始む……クロンイエ退却の道を誤る……其理由……英軍敵の退路を扼す……クロンイエ敵に包圍せらる……救援及ばず……クロンイエ突出を肯ぜず……日光通信……ブール軍窮す……ロバーツ休戰を許さず……死屍腐爛臭氣空に滿つ……遂に降を請ふ……兩雄會見……クロンイエ「諾」と呻く……クリューゲルの歎聲……クロンイエ敗れて萬事休す……終結

○明治天皇と世界の大勢……五〇八

コッスートの天皇に對する讃歎……創業と守成との功を兼ねさせらる……天佑は陛下の御英資と臣民の努力に依り其利を與ふ……御一世の五期……開國及び尊攘論沸騰期……ナポレオン三世得意時代……維新の風雲逼迫……イタリヤ王國建設……北ドイツ同盟組織……ナポレオン三世投機政策期……ナポレオン三世幕府を援けて朝廷に抗せしめんとす……ナポレオン三世の失意は日本の利……舊物破壞、中央集權時期……フランスの帝政顚覆後の不安狀態……政局整理及び勢力均衡恢復の努力……各國日本に甚しく干涉する餘裕なし……文明的設備漸く緒に就く……各國の植民熱アフリカに向ふ……イギリスの困難……極度の壓迫未だ極東に及ぼす……我國羽翼成りて雄飛の時期となる……ロシヤを破りて列强に伍す……アメリカ合衆國の活動……日本今昔の感……世界の大勢一變……明治天皇の御事業は世界的……關係年表

史上の實例と我邦未來の發展……五二八

日本膨脹の必要……理想に馳せて實際を忘るべからず……併合の結果を收むる困難……結果な容易に收め得る場合……劣等文明の土民に對する例……未開人教育の方針……オランダ領印度

及びエジプトの例……スパルタの例……ポーランド、アイルランドの例……屬民の人口極めて少き場合……琉球の例……屬民に歴史ある例……朝鮮の例……大理想の有無……支那の例……同教國の例……ローマの例……膨脹は日本を中心とせざるべからず……マケドニヤ、ドイツの例……秀吉の理想……秀吉の覺書……鹿苑日錄中の記事……玄以法印の書狀……我反つて屬國となる……利權を先にし侵略を後にすべし……ローマは侵略を急がず……帝政の末ローマは地方に過ぎず……イギリスは大陸に成功せず……アメリカ合衆國の成功……東洋に於けるイギリスの困難……海洋的膨脹を先にせよ……大陸發展に伴ふ負擔……海陸軍同時擴張は富裕なるオランダを苦しましむ……イギリスとドイツの幸不幸……イギリス今や陸軍の缺陷を感ず……海軍の必要……大陸政策より來る苦痛……成る可く果實の成熟を待つ……土人と戰爭の困難……實力を養成しつゝ發展するを要す

世界戰亂の眞相及び由來……五四六

事件の歴史的研究の要……近因……遠因……根本的利害衝突は唯武力に依つて解決せらる……威嚇より戰爭を惹起す……イタリヤの頼み難きことは豫期せらる……ベルギー中立蹂躙は豫定の行動……英の反對亦豫期せらる……トルコ同盟の利害既定……防東攻西の戰略……ドイツの遂算の點……ナポレオン一世墜落後のヨーロッパ……ナポレオン三世の盛衰……ビスマルクの帝國統一固定政策……フランス共和政治援助及び威嚇政策……フランス植民政策奬勵……對オーストリヤ方針……對ロシヤ方針……三帝協商……オーストリヤ發展援助……ロシヤの感情を害するを恐る……イギリスに對する政策……ビスマルクとウイリヤム二世との政策の相違……イギリス發展の徑路……ドイツ、イギリスに取つて代らんとす……人口增殖の影響……ドイツ商工業の大發展……植民熱大いに起る……ウイリヤム帝の植民政策……海軍擴張……トランスヴァール祝電事件……太平洋に於ける發展……バグダッド鐵道……英と露佛とを離間す……露佛軍艦キール運河開通式に臨む……ロシヤ極東策の行詰……ファショダ事件……亢龍的ドイツ外交……英國の覺醒……日英同盟……佛と英、以との接近……モロッコ事件……アガヂル問題……フランスの不利なる國情……イギリスの不利なる國情……ドイツ、英佛の弱點に乘ず……英佛國民警醒せらる……イタリヤとフランスとの親善……イタリヤとオーストリヤとの反對……日露戰爭中の英佛の關係……日露親善……近東に於ける露と獨墺との反對……二州併合問題と露墺……バルカン戰爭……大戰亂破裂……ウイリヤム二世帝の外交振……手段露骨より來れる不利……ドイツ開戰を欲せり……開戰の好時機と誤信す……計畫齟齬す……各國の必要なる覺悟……最後の結果は豫言すべからず……關係年表

雜纂

歴史家の泰斗ランケ……五八一

波瀾少き學者の傳記……境遇と性格……生立……時代の影響を被ること少し……學歴……傘を以つて唾を防ぐ……良中學教師……終生後進を愛顧す……實錄は小説以上……歴史處女作……異數の拔擢……歴史新研究法……曲學阿世の徒と誤解さる……名著續出……冷靜公平なる態度

……長壽と順境……千古不磨の大作……了解に修養を要す……爵位彼に依つて光あり……門下の逸足多し……ランケ派を生す……獨得の史眼……歴史は科學と藝術とを兼ねたりとす……希有の天才

ランケ氏に對する批評に就いて……五九二

神祕を重んずることの辨……歴史的經濟學の發展は彼に負ふ所多し……ランプレヒトも必ずしも極端ならず……實物研究を無視せるにあらず……箇人と多衆と共に之を重んず……ナポレオンに關する彼の史論……空前絶後の大史家たり……藝術家としてのランケ……ランケを了解する者はランケに近き頭腦を要す

ナポレオン抹殺論……五九八

ナポレオンは無是公烏有先生の類なり……ペレー氏の眞意?……ナポレオンは太陽の擬人……從來のナポレオン傳說梗概……ナポレオンの語源……眞のアポロンの義……ボナパルトの語源……其生地よりする立證……母名よりする立證……同胞に關する立證……妻子に關する立證……革命は大蛇の抽象……その將軍に關する立證……南勝北敗は回歸線の間を動く象……東起西亡は日出日沒の象……要するに十九世紀の神話のみ

フランス革命時代並にナポレオン一世時代の同國貨幣に就きて……六〇六

革命の原因……革命經過の梗概……ルイ十六世の貨幣……君主主義より民主主義に移る思潮の變遷……頭等統領ボナパルトの貨幣……ナポレオン一世の貨幣……貨幣面に顯はれたる主義表裏相異る……宗教に對する感情……古錢學は須く科學的なるべし

フランス大革命時代飾血……六一二

ルイ十六世斷頭の光景

汽車に關する話……六一三

散髮師店頭の看板……フロックコートの背後のボタン……初期の人力車の型……最初の列車は旅行馬車の型……今尙ほ列車に舊型の追憶を見る

ギリシヤ上古の畫に就きて……六一七

ヴァース上の畫……粗なりと雖も一種の妙あり

トビノウヲ飛行の說……六一八

トビノウヲ飛行に關する從來の諸說……余自身の觀察……二種の飛行魚……飛行の距離と速度……方向の轉替……飛行中上下す……鰭面水面に傾斜を示すことあり

懷舊談……六二四

新學の落武者のみ……動物學に於ける余の經歷……當時の動物教室……教室の所在……獨一人に婿九人……同窓の人々……ノンキなる家族的教室……解剖殘りの動物を食す……食後の惡戯……修學旅行

目次終

西洋史話

文學博士　箕作元八著

オリンピヤの競技の話

オリンピヤの所在

今回開かるゝオリンピック競技には、日本からも初めて選手を出すといふ事であるが、此競技會の名の起原は、いふまでもなく古のギリシヤに行はれたオリンピヤの競技に基くのである。で茲にギリシヤ史上――寧ろ世界史上に有名なるオリンピヤ祭及び其競技についてお話をして昔を偲んで見るのも、強ち興味の無い事ではあるまい。

一體オリンピヤといふ所は、何處にあるかといふに、ギリシヤの南の方のペロポネスス半島、卽ち今のモレヤの西部にあるのであるが、其位置を委しくいへば、モレヤ半島の西海岸にザキンツス、卽ち今のザンテといふ島がある。其島と對ひ合ふ所にエピタリオンといふ河がある。其北の方はピサチス、南の方はプリベリヤで、其にエリス州の中にある。オリンピヤは、其ピ

サチスの南の方にあるので、卽ちエピタリオン河の中流のあたりに當るのである。

オリンピヤ祭の起原

此オリンピヤといふ所は、ギリシヤ最上の神であるゼウスを祭つた所で、つまりゼウスの神領である。ギリシヤの傳說や歷史には、ゼウスに關した事が甚だ多いが、何時頃から、此處に祭るやうになつたのか、其れは明らかでない。然しギリシヤ全體として之を祭るやうになつたのは、傳說によれば、紀元前八百八十年であるといはれて居る。エリスの偉人エフィツスといふものが、スパルタの憲法を作つたといはるゝ彼の有名なリクルグスと相談をして、之をギリシヤの一般祭典となし、其處で競技を行ふの風習を作つたのである。然しそれが盛んになつたのは、紀元前七百七十七年頃であつて、此年の祭を以て、第一回のオリンピヤ祭紀元としたのである。それから四年毎に大祭をしたのであるが、ギリシヤの年代をあらはすに、屢々第何回オリンピヤ祭の時といふ風にいふから、此オリンピヤ祭紀元たる紀元前七百七十六年は、大いに記憶すべき年である。卽ち第五回オリンピヤ祭といへば、其後二十年に當り、第十回といへば、四十年後に當るから、直ぐに年を繰ることが出來るのである。

此祭に關係することの出來るのはギリシヤ民族丈けであつて、若しギリシヤ民族であれば、遠方の植民地に居つても、地中海の端に居つても、或は黑海の邊りに居つても、此祭に參加することが出來る。但し夫は自由獨立の町でなければならぬ。だから此祭は、一方に於て、ギリシヤ民族聯合の中心となり、一方に於て自主獨立の氣象を奬勵することになつた。彼のテーベの英雄エパミノンダスが、ペロポネスス半島に征め入つて、スパルタの勢力を挫き、メッセニヤ州をスパルタから獨立させた。メッセニヤも、昔は此祭に選手を出して居つたが、スパルタに隷屬した以來、之を出し得なくなつたのである。然るにエパミノンダスが之を獨立させた爲めに、再び此祭典に參加するの權利を得、第百三回のオリンピヤに選手を出したのである、卽ち紀元前三百六十八年の中夏であつた。其時メッセニヤから小兒競爭の選手として出た、ダミスクスといふ少年が、勝者となつて、メッセニヤの非常なる名譽となつたといふ事がある。かういふ事が歷史に傳へらるゝのを見ても、いかに此競技に勝つのが名譽とせられて居つたかゞ分る。

祭典に參加するはギリシヤ民族の獨立市に限る

競技の種類

此祭は、五日間續く。競技の種類はペンタチロンと名づけて主もなるものが五つある。卽ち飛越、槍投、競走、角力、それから今一つはヂスコスといふ金の平圓板を拋げることである。此五つの中にもいろ〳〵種類がある。例へば、競走の中にも、長距離競走もあれば、短距離競走もある。角力にも、投げ捨てから、抑へ込み、又拳闘もある。其他競馬もあれば、競車もある。車は勿論二輪車であつて、二頭立と四頭立とある。外にもいろ〳〵の競技があるが、前に

競技の賞與は月桂冠

いつた五つが主なるものである。そして其勝つたものには、月桂樹の冠を與へる。其月桂樹は兩親共生きて居る子供が金の庖丁で枝を截つたものでなくてはいけない。其月桂樹で作つた冠をゼウスの神前に供へて置いて、勝つたものを神前に連れて來て與へるから、ギリシヤ人が之を名譽とするのが非常のものだ。神前に於ても、勿論特別の御馳走に預るが、銘々の國へ歸つても、いろ〳〵饗される。アテネでは特別の賓客として、其市の優勝者を御馳走をするし、スパルタでは、御馳走をせぬ代り、王の護衛兵とする。其外、どの市でも、皆それ〴〵名譽の表彰法がある。そして競技者には、勿論大人もあれば、子供もある。

競技に關する役員

此祭を主宰するのはエリス市であつて、エリス市の家柄のものから數人委員となつて、何日にいよ〳〵祭を開くとか、どういふ競技をやるとかいふ事を各國に通知したり何かする。此等の委員はヘラノデケと名づける。卽ちギリシヤ人の審判官といふ意味である。其下に警察官のやうなものがあつて、祭の秩序を保つ、各國からは使臣が行く。使臣には、其市に於ける一番位も高く家柄もよい人がなる。此祭の重んぜられて居つた事が、こゝにも亦窺はれる。

神殿境内の區分

オリンピヤの境内は、三つに分れて居る。第一はアルチスというて、卽ち神殿其物のある處、それから競技の行はるゝ廣い場所と、神官だの祭典の委員だの各國使臣の宿舍などのある所、

この三つである。いよ〳〵競技が終ると、最後の祭をして、各國からの捧物を供へ、勝者を饗應する。

競技に勝つたものが如何に尊敬されるか、といふ一例をお話すれば、ローヅス人の中でヂヤゴリデー家といふのがあつて、不思議にも其家から、多數の政治家や將軍を出してゐるのみならず、又此オリンピヤの競技に勝つ人を出して居る。其中でもドリオウスといふ人が殊に勝れた人で、三度續けてオリンピヤの勝利を得た。ローヅスは、初め殆んどアテネの從屬國であつたが、ドリオウスは其獨立を計つて、アテネに背くことに力を盡した。自ら船を仕立てゝ海戰をやつた。處がたうとう負けて擒になつた。アテネは、無論反逆者として之を殺す筈であつたが、オリンピヤの競技に勝つた者を殺すのは惜しいといふので、民會の投票で、無條件でドリオウスを放免した。此競技の勝利者はそれ程尊敬されて居つたのである。

詩人辯者の參加

又此祭典の時には、詩人、辯舌家なども出て、銘々得意のものをやる。時によると此祭典でやつた演說は、一國の輿論となることがある。スパルタの極盛んな時に、アテネの辯士が大膽に之を攻擊して、輿論を喚起したことがある。又詩人は、此祭の時に自作を讀み上げて、忽ち大名を博するといふ事もある。ヘロドツスは、彼の有名な歷史の一節を、此祭に讀み上げたこ

エリス人怒りて大に祭場に血を流す

とがある。そして此等の勝れたるものには賞牌を與ふる。だから此祭典は、一面ギリシャ民族の結合となり、一面自主獨立の氣象を奬勵するのみならず、又ギリシャ文明の光彩を發揚するの機會をも作つたのである。

此祭の主宰者はエリスであることをいつたが、唯一度其權利を外に奪はれた事がある。それは何時かといふと、アルカヂヤ州が、一時エパミノンダスによつて聯邦となり、エリスを侵して、遂にオリンピヤを占領した。そこでエリスを罷めて、ピザといふ小さな町を此祭の主宰者としたことがある。それは第百四回のオリンピヤ祭の事であるから、即ち紀元前三百六十四年の事である。此時祭の招待狀をピザからも出し、又エリスからも出した。處がエリスは非常に憤激して、アルカヂヤを征めた。恰度祭の最中に、エリス人がドン〳〵征め入つた。エリス人は元來勇敢な人種ではないのであるが、此時の權幕は恐ろしいもので、非常な勢で征め入つた。然し中に入ると、神殿のあたりが混雜し、殊に路が細いものだから充分戰ふことが出來ずに擊退された。之れは、ゼウス神の境内で血を流して神聖を瀆した大事件として、ギリシャ人の非常に遺憾とした所の事件である。其外アルカヂヤ人が神殿の金を借りたといふ事も分り、旁々不都合だといふので、此第百四回の祭を取消し、エリスは、舊によりて祭の主宰者となる事にな

ギリシヤ人は金錢に對して比較的冷淡なり

つた。

此祭の一番盛んであつたのは、紀元前六世紀頃からペロポネスス戰爭の終り頃まで〻あるからして、先づ五六世紀頃といつてよいのである。その後も久しく續けられたが、ギリシャに內亂があつたり、終にはローマに滅ぼされたから、從つて祭もなくなつて了つたのである。

先にいひ忘れたが、祭をする日は定まつて居る。即ち夏至の次の滿月の日に行ふことになつて居つた。又勝つたものは、其名前と自分の正當の父の名前とを神前で讀み上げられて、記錄に載せらるゝことになつて居つた。一體ギリシャ人は餘り金錢を重んじない國民であつて、金錢によつてどうする斯うするといふ事がなかつた。それは、一つは當時は近代ほど生活が困難でなかつたといふことがあるかも知れぬし、又學問文學をやる人でも、外に生計を支ふる職業を持つて居つた爲めもあらうが、大體の國民性が金錢に對しては、極淡い考を持つて居つたやうである。學者でも文人でも、皆各職業を持つて居た。例をいへば、彼の大哲學者ソクラテスやプラトーも、又醫聖といはるゝヒポクラテスも、皆學問文藝以外、商業などに關係して居て、學問美術を以つて生計を營むのではなかつた。だから弟子から月謝も取らずに、敎へて居つたのである。又詩文悲劇でも、其爲めに得るものは名譽であつて、金錢ではなかつた。今の文士の

名譽は金錢以上

やうに、金の爲めに書くなどといふ事は決して無かつた。嘗てペルシヤ王がギリシヤに征め入つた時、才學ある優勝者を、金錢を以て賞せずして、月桂冠を以て表彰する國民、金錢よりも名譽を尊ぶ國民は、侮ることが出來ない、というたといふ事がある。

此オリンピヤの競技が、二十世紀になつてから再興され、今度のやうに、日本からも選手を出すやうになつたのであるが、昔のオリンピヤ競技は、前に話したやうなもので、今のは丸でヘレネスの意味が失はれて居るのであるから、唯名目丈けを藉りたもので、其性質が全然違つて居るといふ事は、多言するまでもあるまい。

海陸の兩強國

アテネの英雄フォルミオ

世界の歴史上に特筆大書されて居る大海戰の中に、太古のアクチウムの海戰、近古のレバント海戰、最近のトラファルガルの海戰、猶下つては日本海々戰等いづれも有名なものであるが、此等は規模が大きく、結果が大きかつたために、よく一般の人々に知られて居る。然し猶此等の外にも幾多の海戰があり、戰術史上から云つても又一般的にも頗る興味あるものがある。リウム岬の海戰なども其一つである。

スパルタとアテネ

地圖を見ると、ギリシヤの北方に、コリント灣と云ふ處がある。其東端はコリント地峽に限られ、西はリウム岬とアンチリウム岬と相對して居る海峽によつて、地中海に通じて居る。

ギリシヤは、紀元前第五世紀の頃には、幾多の小國に分れて居て、其中でアテネは海上に、スパルタは陸上に最強國として並び立ち、諸國の間に各覇權を競つて居た。此兩國の間には、

ペロポネスス戰爭と云ふ二十八年餘に亙る永い戰爭が續いたが、其際、他の小國は、大抵アテネかスパルタか、何らか一方に從屬することとなつた。

アテネ人漸く浮薄になる

アテネには、ペリクレスと云ふ智勇兼備の政治家が現はれ、人民の信任を得て、國威大に振つたが、其中にアテネ人は次第に輕薄に流れ、ペリクレスは遂に退けられて、彼は紀元前四百二十九年失意のうちに此世を去つた。是よりアテネには偉い人物が缺乏して、段々國勢が衰へた。

スパルタ大にギリシヤ西北方を略せんとす

ペリクレスの死んだ翌年、卽ち紀元前四百二十八年に、スパルタはギリシヤの西北方に向つて、侵略を企て、同盟諸國から船艦を集め、四十七隻を以て艦隊を作り、クネムスといふ將軍を其司令長官に任じて、陸軍を乘せて數多の運送船を掩護して、コリント灣の北方に向はしめた。

アテネと同盟を結んで居たナウパクツス市（後のレパントー）市民は、大に恐れて、援助をアテネに求めた。アテネは之に對し、取合はずに居る譯にはゆかんので、軍艦を送つたが、當時アテネは商業上の關係から、彼方此方方々に手を出して居たので、勢力を集注することが出來ず、二十隻の軍艦しか送ることが出來なかつた。之はアテネに取つては一の恥辱であつた。と云ふのは、當時アテネは資本家等の勝手な利益のために支配せられ、對外的政略が、一貫されなかつたことを證明するからである。

フォルミオの作戰計畫

リウム岬第一回の海戰

スパルタ艦隊圓陣を作る

アテネはフォルミオといふ人を司令長官として、敵に當らしめたが、彼は自ら劣勢の艦隊を率ゐて居るに關らず、廣い處で戰はうとした。之はアテネ人が艦を操縱ふことに長じてゐるので、廣い場所で縱橫に敵を攻め惱まさうと思つたからである。

然るにスパルタは、味方の艦隊が優勢であるから、敵はコリント灣內に引込んでゐることと信じて出て來ると、フォルミオがリウム岬外の幅約十海里もある廣い水道の北側に、橫陣を布いて俟つてゐたので、スパルタ方はアテネ艦隊の意外なる大膽に驚き、先づその意氣に呑まれて、戰ふ事を好まなかつた。現今の戰術から云へば、斯る場合には小數の軍艦で運送船を援護し、その他の總ての軍艦を以て、敵艦隊に當るのが普通であるが、スパルタの司令官クネムスは、中央に運送船を置き、大艦五隻で其周圍を圍み、猶其外を四十隻の軍艦で圍んで、舳を悉く外側に向けて圓形をつくつたので、恰度 橙 の切斷面見たやうなものが出來た。（第二圖參照）之はスパルタ人が、陸戰の時に有利である圓陣を、海上に應用したのである。

敵艦隊の周圍を廻る

一齊に集中的に敵陣を突く

此時フォルミオは、自ら率ゐる全艦隊に向つて、『各艦は、總て旗艦の後に隨從し、命令を受ける事なくして攻擊に移るべからず』といふ命令を出した。折しも吹きつのる東北風を負うて、無二無三に進んだ。さうして敵艦に近づいたかと思ふと、クル〳〵〳〵恰度鳶が大空に圈を畫くやうに、敵艦の周圍を廻り初め、而してその圈を次第々々に縮めて迫つて行くので（第二圖參照）、かねてアテネ人が艦の操縱に長じて居る事を知つてゐる、スパルタの軍勢は、敵艦が如何な行動を執るのかと恐氣立ち、段々退却をし初めたので、各艦の間隔が接近して、爲めに互に櫂を折り、艦と艦とが打つ突かつて、全艦隊喧噪を極めました。フォルミオは、豫て風の最も強く起り來る時期を知つて居るので、其時を見計らつて、風上に出で、一令の下に各艦の左舷の方へ九十度に廻轉し、一齊に非常な勢を以て、集中的に敵陣の中央へ突進した。彼は此大膽な行動に依つて、先づ敵の旗艦を沈め、次いで數艦を擊破したので、スパルタの艦船は、右往左往に逃げ初め、散々の體になつたが、フォルミオは息をもつかず之を追ひかけ、味方は一隻をも失なはずして、遂に十二隻の敵艦を捕獲しました。かくて此戰は物の見事にアテネ方の勝に歸したのである。

スパルタ政府敗戰の眞因を解せず

第一圖

リウム岬第二回の海戰

スパルタは、クネムスが敵に倍する優勢の艦隊を持ちながら、斯く見苦しき敗をとつたのは、彼の作戰が惡るかつた結果ではなく、唯將士の勇氣の足らぬ罪として、彼を詰責して、再び出征せしめた。然し此度は、戰術に長じたプラシヅスを副司令官として、彼に隨はしめた。キレーネ港に歸つたスパルタの同盟艦隊

資本家の商略の爲に戰機を誤る

は、敗殘の船艦を修繕し、猶それに新な軍艦を加へて七十七隻となし、再ひ戰はんとした。

一方アテネ方のフォルミオは、十二隻の軍艦を捕獲はしたものの、之は殆と皆廢艦で、役に立つのは依然元の二十隻のみであるので、フォルミオは、速りに本國に援助を求めた。アテネは、其要求が正當である事を認めたが、それにも關らず應援の艦隊二十隻を、直に戰場に赴かせずして、一資本家の或商略上よりの請求に依り、途中クレータ島のキドニヤ市を攻めてから、フォルミオの軍を援けに行くやうに命じたので、其艦隊が到達した時には、リウム岬第二回の海戰は既に終りを告げた後であつた。故にフォルミオは、此戰に於ては二十隻の他何も無いのである。スパルタの軍は、殆ど其四倍の七十七隻を有してゐる。然し自信力と攻擊精神とに富むフォルミオは、此時も狹き水道に入らず、悠々として第一回海戰の時と同じ位置に留つた。（第三圖參照）

プラシヅス謀略フォルミオを油斷せしむ

スパルタ方でも、此度は將才ある副司令官プラシヅスを有して居るので、其畫策したる處は第一回よりも遙かに見るべきものがあつた。卽ち軍艦を南方の對岸なるパトレーの海岸に引上げ、敵を油斷せしめた。フォルミオも之を見て、敵は急に戰ふの意なしと思つた。スパルタの軍は暫く待つて、敵の油斷する頃を見計ひ、或日未明に急に諸艦を海に浮べ、七十七隻の船艦を四艦隊に分つて、四重の橫陣を作り、（第三圖甲）其先鋒艦隊には速力最大の二十隻を置き、斯くしてリウムの方向に進んだのである。流石のフォルミオも此の際は出し拔かれたが、敵艦がリウム岬の間の水道に入り、ナウパクツス市の方に進むのを見て、之に並行し、コリント灣の方に進行した。然し彼は、矢張り成るべく廣い處で戰ふ積りなので、敵艦隊との距離を、自艦隊と海岸との距離よりも大にして進んだのである。

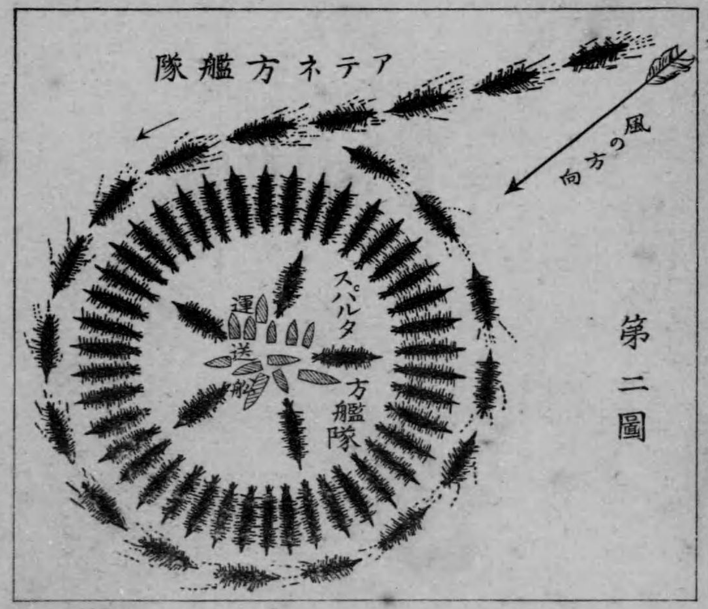
アテネ艦隊敵と平行して進む

『すべて精密に吾が命令に從つて進退せよ。秩序と靜肅とをよく守るべし。』と云ふのが、此時フォルミオの全艦隊に下した命令であつた。

スパルタ艦隊不意に攻擊に移る

プラシヅスは、コリント灣に入るや、豫定の行動をとり、急に左舷の方へ九十度に一齊廻轉をした、倂列橫陣（乙）を作つて、アテネ方の軍艦を海岸に壓迫した。其結果アテネの軍艦九隻（ロ）は、淺瀨に乘り上げ、進退の自由を失つたので、スパルタ軍は之に近づき、水中に飛込み敵を捕獲しようとした。然るにアンチリウム岬の西方の海岸に陣して居つた、ナウパクツスの陸兵は、フォルミオの艦隊が東方に航進する時、之と倂行して海岸を驅足に走り、艦隊と接觸を保つて居たが、今や味方の軍艦が坐礁して、敵の攻擊を受けて居るのを見、淺瀨に飛込んで軍艦に乘込み、アテネの海兵と共に、スパルタ軍と戰つた。（ハ）

フォルミオ方急に廻轉して敵軍を破る



第二圖

フォルミオの率ゐた他の十一隻の艦(ハ)は、ナウパクツス市の方向に、正しき縱陣を造つて退却した。スパルタの先鋒戰隊二十隻は、敵艦九隻を他に任せ、此十一隻を烈しく追ひかけ、たうとう列を亂して敵に迫るやうになつた。(丙)。之がフォルミオの期して居つた處で、敵が充分に近づいた頃、彼は自らの艦隊を急に廻轉し、敵に向つて横陣(ニ)を作ることを命じた。アテネ艦隊中の最も遲れた軍艦、

スパルタ軍遂に大敗す

第三圖

即ち殿艦(ホ)の艦長は、此命令を聞くや否や、急に艦を右舷に廻轉して、眞先に進んで來る敵艦(丁)の船腹を貫き沈沒さした。

此時スパルタの軍艦は列を亂し、離ればなれになつて居たので、先鋒の軍艦が沈められ、フォルミオの艦隊が列を正して正々堂々と逆襲して來たのを見て、驚き慌てゝ、或は淺瀨に乘上げ、或は味方同志相擊つに至つた。フォルミオは之を追擊し、其六隻を捕獲したが、先にアテネ方の坐礁した軍艦を捕獲しようとして居た、他のスパルタの三戰隊も亦混亂し始め、總潰走となつた。フォルミオは尙も追迫めて、更に七隻の敵艦を擊沈して、此戰は復々アテネ方の全勝に歸したのである。

アテネ軍の勝利を得た理由

アテネ勝利の理由

此兩戰に、スパルタ方とアテネ方との勢力を比較して見ると、艦質は雙方とも大小艦質其外大概同じである。然るに第一回の海戰には、スパルタの軍艦は敵に二倍し[illegible]回の時には四倍の軍艦を有つて居たのに關らず、アテネの艦隊に敗けたのは、アテネ方が戰術に於て勝れて居つた事と、將士の意志がよく相通じて居た事と、士氣の盛んであつた事とによるのである。

フォルミオの末路

フォルミオは、斯くリウム岬の海戰に於て大功があつたに關らず、當時アテネは政治の統一を缺いて居つたので、彼は黨派の爭の餘波を受けて、罪なき罪に訴へられ、一萬ドラクマ（凡我が四千圓）の罰金を課せらるゝことになつたのみか、常に淸廉であつた彼は、其罰金を拂ふことが出來ない爲めに、市民權を奪はれた。斯る功勞ある人に此樣辱を與へたのは、アテネ人の大なる國辱であつた。憐むべし、フォルミオは斯る虐遇を受けて忿懣に堪へず、病を發して遂に死んだのである。

ハンニバルの海將としての技倆等に關し從來說く者鮮し

海將としてのハンニバル

ハンニバル（Hannibal）がカルタゴ陸軍の名將であつたことは、誰も知つて居りますが、此人が海戰の方にかけてはどうであつたか、夫に關しては、モムゼン（Mommsen）を初め、可なり立派なローマ史專門家でも、餘り充分に其事を申して居りませぬ。それ故に今日は、此點に付て聊か私の意見を述べまして、さうしてハンニバルの海將としての技倆はどうであつたか、又彼れの海戰の戰術と陸戰戰術と、どう云ふ關係があつたか、又それが人種或は時代の精神と、どう云ふ關係を有つて居るか、と云ふことを御話したいと思ふのであります。それで今日のやうな陽氣な時にお出で下さる御方でございますから、皆熱心で、此時代の歷史のことは一ト通り御存じの方が多いと思ひますが、尙ほ中には餘り御存じない方もあるかも知れませんに依つて、極めて簡單に先つ大體の御話を致します。

東西兩洋の衝突と云ふことは、始終人の言ふことでありまして、東洋と西洋との衝突したことは幾らもあるのであります。是は人種の衝突でもあり——日本人がアメリカ人に嫌はれたり、

東西兩洋衝突の歷史

オーストラリヤ人に嫌はれたりするのは、一面に人種の衝突から起つたのでありませう。人種の衝突の裏面には文明の衝突があつて、雙方長い歷史に基く所の思想の違ひから衝突を起して來る。併し大なる友誼を結ぶ前には、先づ衝突を重ねると云ふことが、いつでもございます。大なる衝突を數々重ねたる後に、始めて融合が出來るのであります。東西兩洋の衝突の歷史は、此點から言つて、大に面白いのでございます。東洋と西洋と衝突致しました最初の大なる衝突は、何であるかと言へば、無論ペルシヤとギリシヤの衝突であります。其次にあつた大なる衝突は、私が今御話致さうと云ふとに關係のある、ローマとカルタゴとの衝突であります。尤もローマとカルタゴとの衝突は、單に地形上から云へば、或は南北の衝突と云ふ方が適當かも知れない。地圖を見ると、イタリヤ半島は、地中海の丁度眞中に、殆んど之を縱斷する樣に、北から南に長靴のやうな形で出て居ります。而してローマは此半島の西側の眞中にある。それから丁度その南の方にアフリカが突出して居る所にカルタゴがあつて、此間にシシリー島があつて、斯くの如くヨーロッパとアフリカが此所で相接近して、地中海を狹めて殆んど等分に分つて居ります。されば、カルタゴとローマとは、地中海の南北が接近して居る所に於て、シシリーを挾んで相對して居る譯になつて居ります。故に是は南北の衝突といふ方が、適當のやうであります。

ローマ、カルタゴも亦東西洋の衝突

三回のポエニ役

ますけれども、大きなる意味に於て、ローマ人は西洋文明を代表しますし、カルタゴは東洋文明を代表しますから、是は矢張り東西洋の衝突と見て差支ないのでございます。序に申しますが、西洋史の太古に於きましても、中古に於きましても、地中海が中心であつたのであります。それが近古に至り、アメリカの發見とインドへ行く航路の發見とに依つて、地中海がもはや中心でなくなつた。近世になる程一般の關係が世界的になつて來て、例へば極東の事件が、忽ち極西の方に向つて鋭き反響を起す程になつたのであります。

カルタゴとローマとの爭ひは、ポエニ役(Bellum Poenicum-Punic War)として知られて居ります。而してポエニ役は前後三回ありました。第一ポエニ役は紀元前二百六十四年から二百四十一年まで二十四年間、第二ポエニ役は二百十八年から二百一年まで十七年間、それから第三ポエニ役は紀元前百四十九年から百四十六年まで四年間、斯う云ふことでございます。此中で第二ポエニ役が、卽ちハンニバルの中心人物となつた時代であります。第一ポエニ役は、地中海を誰が支配するかと云ふ問題から衝突をしたのでありまして、此前には寧ろカルタゴの方が海上に勢力があつたのでありましたが、此戰役の結果として、ローマが地中海をすつかり制するやうになつたのであります。第二ポエニ役に、ハンニバルの爲たことは、此ローマの得た位地

第二役はハンニバルとローマとの戰なり

をカルタゴに取返さう、卽ちカルタゴが再び地中海を制するやうになりたいと云ふ恢復の企であつたのであります。此戰役は、ハンニバルが中心人物であつて、殆どハンニバルとローマ人との戰ひのやうであつたのであります。無論カルタゴ人は、彼に同情を表して居つたのであります。殊に彼が戰を起す頃には、カルタゴに於いては、彼の黨派が勢力を得て居つたのであります。けれども、本國には事毎に彼を掣肘せんとする反對黨がありましたから、ハンニバルも始終思ふ通りにはいかなかつたのでありました。それ故に此第二ポエニ戰役はハンニバルと云ふ偉大なる人物と、ローマと云ふ偉大なる國民との爭ひであつたと見れば見られるのであります。現に或史家は此戰役をハンニバル戰役と名けて居ります。

陸上より進

それで、ハンニバルはどう云ふ風に戰をしたかと云ふと、第一ポエニ役の後に、ハンニバルの父であるハミルカル・バルカスがイスパニヤを攻めて、此處で銀山を得て、それを掘つて復仇戰の財源を得た。それから此半島の人卽ちイベリヤ人(Iberians)といふ慓悍な人民を傭兵とすることを得て、復仇戰に用ふ可き兵員が出來た。ハンニバルは、此財源と兵員とを以つて、イタリヤに行つたのでありますから、詰りイスパニヤが策源地になつて居ります。イスパニヤとイタリヤは陸續きでありますから、陸路を行くと云ふことは、ちよつと簡單のやうに見えまむの困難

すけれども、併し此間にはピレネー山、アルプス山などといふ險岨な山脈があり、又エブロ河、ローン河といふ大河あり、それから途中に色々反抗をする人種も居るのであるから、其困難は非常であります。であるから、ハンニバルが陸路を取つて遙々出掛けて行つたことに付きまして、彼のマハン(Mahan)大佐が『海上權力史』(Influence of Sea-Power on History)の序論に於て論じて居るのに、若し海軍力を以つてイタリヤに出かけて行つたならば、ローマを抑へることは容易であつたらう、と言うて居るのであります。それは成るほどさうであつたらう、と思はれるけれども、それの出來ない事情が色々あつたのであります。

マハン大佐の說

ハンニバルは、ローマとカルタゴとは到底兩立し難いと云ふことを自覺して居つたのであります。ローマの方でも機會さへあれば、カルタゴを滅さうと思ふし、カルタゴの方でも復讐しようと云ふ心があります。雙方とも偉大な國民で、同じ樣に地中海を制せんとして居るからには、到底兩雄竝び立つことは出來ません。どちらか滅びて仕舞はなければ、此解決が著かないのであります。

兩雄竝び立たず

ハンニバルの父の時代から、ハンニバル一家は、ローマを滅すのを大目的として居つた。イスパニヤを經營したのは、何の爲であるかと云ふと、ローマを攻める財源と兵隊を拵へる爲で

イスパニヤの財源未だ海陸兩軍を同時に擴張するに足らず

ありました。斯くしてイスパニヤに大なる財源を得たのでありますけれども、併ながら其財源は無限なものではない。以前にはカルタゴがローマよりも遙に富んで居た、殊に商業上に於て最も有力であつたけれども、第一ポエニ役に依て大に打擊を被りまして、殊に其役の後に傭兵の亂がありまして、卽ち夫れは財政困難の爲に傭兵に給料を與へなかつたが爲に、傭兵が大一揆を起して、非常な大亂を生じたのを、ハミルカル・バルカスの力で、やつと鎭定したのであります。從つてカルタゴの國力が甚しく疲弊したのであります。されば、ハミルカル・バルカスがイスパニヤを攻めて、銀山を取つて財源を造つたにしろ、それでは到底以前のカルタゴの富に匹敵することは出來ないのであります。それであるから、ハミルカル・バルカス及び之に繼いだ婿のハスドルバルの如きは、先づ陸軍を造ることに全力を注ぎ、イベリヤ人を訓練して、終に漸く極めて強い陸軍を造ることが出來ました。けれども、ハンニバルの時代まで、未だ海軍を再造する程の餘裕が出來て居らなかつたのであります。

いよ〳〵時局が急轉して、兩國の間に平和が破裂した頃は、陸軍はやつと整備したけれども、海軍の方には手が廻らない時でありました。其時のカルタゴ、ローマの海上勢力を比べて見ますと、ハンニバルが出發する時分に有つて居りました軍艦は、五十九艘しかないのであります。

當時兩國海軍勢力の比較

ローマ稍カルタゴを侮る

大小の船を掻き集めて五十九艘、其中三十七艘だけが本當に使へるのでありまして、あとは船も腐朽し、水兵も足りないと云ふやうな譯で、十分な事が出來ませぬ。之に反して、ローマが當時作戰計畫をした時には、一方に百六十艘の船で、執政官センプロニウス・ロングスの率ゐる一軍を掩護してアフリカに送り、直ちにカルタゴ本國を突かせ、一方には六十艘の艦隊を以て、今一つの執政官コルネリウス・スキピオを送つて、イスパニヤを討たしめる計畫であつたのであります。一百六十艘の一艦隊と六十艘の一艦隊と、雙方合せて二百二十艘も出す位の勢ひであります。であるから、カルタゴは僅か三十七艘の海軍では、海上に於いて到底之に抗抗することの出來ないことは分つて居る。卽ち制海權はローマの手にありますから、ハンニバルが海を越えて行く方が如何に便利であると考へても、それは不可能の事であつたのであります。

それならば、海軍の出來るのを待つて居つたら、どうかと云ふと、さう云ふことは出來ない。何故なれば、ローマに餘裕が出來れば、必ずカルタゴを討つに定つて居ます。ローマ人は決してカルタゴを恕して置くものでない、機會さへあれば之れを滅せんとすることは明らかである。然るに幸にも、當時ローマ人はカルタゴは非常に弱つて居るから、『急がずとも自分の好きな時に討てる、カルタゴは到底自ら手を出すことはあるまい、此方から手を出せば、向ふは唯防禦

ハンニバルは海軍の整備を待つ猶豫を有せず

するだけが一杯だらうから、開戰の期は此方で都合の好い時を選べば宜い』と見くびつて居つたのであります。それ故ローマは、專らイタリヤ北部のガリヤ人、リグリヤ人を平定することや、アドリヤ海東北岸のイリリヤ人を征服することに力を用ゐて居つた。さうしてゆる〳〵カルタゴを滅しても差支ない、と思ふやうな風でありました。

去ればハンニバルは、グズ〳〵して居られませぬ。ローマが忙しい最中に、機先を制して、之を討つて仕舞はなければならぬと云ふのが、ハンニバルの根本の考へであります。されば、ハンニバルは海軍を作るまで待つて居られないのであります。それから、陸上よりすれば、非常に困難であるけれども、亦利益無きにしもあらずで、イタリヤの北に居りますガリヤ人なども、ローマ人が從へたけれども、まだ充分心服して居らぬ。殊に一旦征服して、ローマが彼等の間に植民地を造らうとした。是はローマ人の慣用手段で、植民地を作つて、ローマの權勢を植ゑる。今丁度プロシヤが元のポーランドの土地に人民を移して、段々プロシヤ化して仕舞はうと云ふのと、略同じやうに、ローマの植民地を造つて、之にローマの風を入れて、且つ戰略上ローマの根據地を幾らも造る、斯う云ふ風にして段々強くして行く、全くローマ化して仕舞はうと云ふのが、ローマの慣用手段で、又ローマの強い所以でありました。所が此際新にガリヤ人の間に植民地を造ると云ふことが、ガリヤ人を非常に怒らしめ、ローマも之を征服するに、隨分手古摺つて居つた。

ハンニバルの胸中の成算

ガリヤ人は野蠻で智慧の無いに拘らず、斯の如くローマ人を苦めることが出來る程勇猛であるならば、若しハンニバルが之を味方として、能く指揮し統率して行つたならば、非常に力になるに相違ない。彼等がまだすつかりローマに歸服しない中に、ガリヤ人を煽動して、之を率ゐてローマを討つたら宜からうと云ふのが、ハンニバルの考であつたのであります。去れば、ハンニバルは陸路を取つたからと云うて、彼が海權の必要を覺らなかつたのではない、實に止むを得なかつたからでありましたらう。尙ほ此外、ハンニバルには、ローマの爲めに一旦征伏せられたイタリヤの諸市は、今こそローマの同盟となつて居るが、ハンニバルにして一二回ローマ軍を破つたならば、ローマに背いて自分の方に附いて來るだらう、と云ふ考へもあり。又外交術に依つて、マケドニヤ王國や、ギリシヤの諸市を味方として、ローマを討つことが出來れば、尙ほ都合が好い。さう云ふ風に色々な手段を以てやれば、ローマが屈服するであらうと云ふことを考へたのであります。

ローマがカルタゴを輕蔑して居つたことは事實でありますが、ハンニバルも亦多少ローマ人

ハンニバルの誤算

の性質を誤解して居つた。又ローマ人の同盟に對する扱ひなどを了解しなかつた。ローマ人は同盟に對して或利益を與へてやる、彼等の利益を代表して、之を擴張すると云ふやうな事を敢てした。例へば、屈伏して同盟となつた、イタリヤ南部に於けるギリシヤ人種諸市の爲めに、その商業上の利益を考へて、彼等に都合好き外交を用ひた。さう云ふ點に於て、ローマの保護の下にあることを利益としたから、ローマの同盟が容易くローマに背かないといふ事を、ハンニバルは悟らなかつた。又ローマ人は大敗を重ねても、決して敵に屈しないで、益々力を出して防ぐと云ふやうなことを、ハンニバルは能く了解しなかつた。さう云ふ譯でありますから、彼は陸から遙々と行つたのであります。

此陸路から遙々イタリヤに行つたことが、ハンニバルの爲にどれだけ不利益であつたかと云ふと、彼れが其根據地であるカルタゴ・ノヴァを出發した時には、歩兵九萬、騎兵一萬二千、合せて十萬二千ばかりあつた兵が、イスパニヤのカルタゴの領分の境になつて居りましたエブロ河を渡つて、ピレネー山脈まで行く間に、色々な從はない人種がある、それを抑へて、且つ戰ひ且つ進んだのでありまして、それを一旦從へても、あとに抑への兵を置かなければならぬから、自分の弟のハスドルバルに一萬人を與へて之に當らしめ、又前進を拒んだ爲に解雇したバルを引渡すことを請求しました。それ故に、ハンニバルは到頭本國に居られなくなつて、密に古郷を逃出さなければならぬやうになつたのであります。

ハンニバルの對ローマ大同盟策

ハンニバルは、斯樣な次第で、紀元前百九十五年に國を出まして、シリヤに行つて、シリヤ王アンチオクス（Antiocus）に面會をした。彼は前の戰役の時にも、マケドニヤ、ギリシヤ、シリヤ、エジプトなどと大同盟を作つて、ローマを攻めようとしたのであります。それは失敗に終りましたが、此考は實に大局に眼を注いだ偉大なものでありました。彼は今度もシリヤに行つて——當時カルタゴ、マケドニヤ、ギリシヤなど概ねローマに多少屬國の形であつたが、シリヤのみは、まだローマより全く獨立して居る大國でありますから、シリヤを中心として、マケドニヤ、カルタゴ其他の國を聯ねて、對ローマ大同盟を起さしめ、直ちにイタリヤに上陸しようと云ふ考でありました。彼が初めてアンチオクスに會つて策を獻ずる時にも、イタリヤに上陸して、直ちにローマを突くの計畫を勸めたのであります。然るにアンチオクスは、彼の策を用ひず、加之、彼を疑つて、彼に一軍の獨立司令權を與へないで、幕賓のやうなものにしました。併し參謀長として總て彼の言ふことを肯くのでもなく、他の詰らない朝臣などと一緒にして扱つて居つた。

ハンニバル重用せられず

ハンニバルの誤算

の性質を誤解して居つた。又ローマ人の同盟に對する扱ひなどを了解しなかつた。ローマ人は同盟に對して或利益を與へてやる、彼等の利益を代表して、之を擴張すると云ふやうな事を敢てした。例へば、屈伏して同盟となつた、イタリヤ南部に於けるギリシヤ人種諸市の爲めに、その商業上の利益を考へて、彼等に都合好き外交を用ひた。さう云ふ點に於て、ローマの保護の下にあることを利益としたから、ローマの同盟が容易くローマに背かないといふ事を、ハンニバルは悟らなかつた。又ローマ人は大敗を重ねても、決して敵に屈しないで、益々力を出して防ぐと云ふやうなことを、ハンニバルは能く了解しなかつた。さう云ふ譯でありますから、彼は陸から遙々と行つたのであります。

此陸路から遙々イタリヤに行つたことが、ハンニバルの爲にどれだけ不利益であつたかと云ふと、彼れが其根據地であるカルタゴ・ノヴァを出發した時には、歩兵九萬、騎兵一萬二千、合せて十萬二千ばかりあつた兵が、イスパニヤのカルタゴの領分の境になつて居りましたエブロ河を渡つて、ピレネー山脈まで行く間に、色々な從はない人種がある、それを抑へて、且つ戰ひ且つ進んだのでありまして、それを一旦從へても、あとに抑への兵を置かなければならぬから、自分の弟のハスドルバルに一萬人を與へて之に當らしめ、又前進を拒んだ爲に解雇した

陸行の爲めに兵數を減ず

ジェノア邊に上陸するの利

兵が一萬人ありました。故にピレネー山を越えた時には殘る兵が、歩兵五萬、騎兵九千で、合せて五萬九千しかなかつた。十萬二千のが五萬九千位に減つたのであります。それから段々行つて、途中反對する土人を一々蹴散して進み、アルプス山を越えるのは最も困難であつた。斯くの如くして途中で戰死する者、負傷して死ぬ者、病氣をして死ぬものが續々あつたので、アルプス山を越えてイタリヤに入り、本當にローマ人と戰ふ時に殘つた兵は、僅に歩兵二萬、騎兵六千、合せて二萬六千しかなかつた。十萬二千人を以つて發した兵が、向ふへ行つた時には、二萬六千しかなかつた。若し海から行くことが出來たならば、こんなに減らさずとも濟んだでありませう。

またガリヤ人を味方にする必要があつて、陸路を行つたといふけれども、若し海軍があつたら、直に今のジェノア邊に上陸すれば、此邊のリグリヤ人は、ローマ人を惡んで居たから、必ずハンニバルに從ひ、その隣のガリヤ人とも直に手を握れたのでありませう。併ながら之をハンニバルがしなかつたからと云うて、それはハンニバルの海軍の戰略上の技倆には關係がない、必しもハンニバルに海軍のことが分らなかつたと云ふ譯ではない。彼は海上には絶對に勢力がない、が之を作るまで待つて居れぬ。加之彼は陸行の困難の程度を該算したから、之を決

行したのであります。要するに、彼は第二ポエニ役の間には、海上に自分の手腕を見せることが出來ないで、陸戰ばかりして居つた。陸戰に於てはトレビヤの戰、トラシメヌスの戰、カンネーの戰などは世界的の大戰爭であります。カンネーの合戰に付ては、後に之を彼の海戰と比較して御話をしたいと思ひますから、此處では申しませぬ。

ハンニバル國政を整理して復仇を計る

それで、第二ポエニ役は、到頭カルタゴの失敗に終りました。ハンニバルが非常に苦心をしたに拘らず、遂に失敗に終つて、カルタゴはローマの半屬國の地位になつて仕舞つたのであります。所がハンニバルは、其後自分が執政官になつて、非常に骨を折つて財政を整理しまして、一方には人民から別に新しい稅を徵收しないで、色々改良を行つて、ローマへ十分に償金を拂つて、尙ほ餘裕のあるやうにしたのであります。如何にして夫を行つたかといふと、此時にハンニバルは餘ほど民主主義を容れて、當時門閥が跋扈して腐敗して居るのを、大に行政を廓淸して、種々の弊害を除いたが爲めに、斯樣に巧に財政を整理することを得たのでありました。無論彼れは斯樣にして、成るたけ勢力を恢復して、ローマに對する復讐戰をしようと云ふ目的であつたのであります。然るに彼れの反對黨は、黨の利益ばかり考へて、國家と云ふことを忘れて、色々彼れをローマの方へ讒訴したので、ローマの方からもカルタゴ政府に逼り、ハンニ

パルを引渡すことを請求しました。それ故に、ハンニバルは到頭本國に居られなくなつて、密に古郷を逃出さなければならぬやうになつたのであります。

ハンニバルは、斯樣な次第で、紀元前百九十五年に國を出まして、シリヤに行つて、シリヤ王アンチオクス（Antiocus）に面會をした。彼は前の戰役の時にも、マケドニヤ、ギリシヤ、シリヤ、エジプトなどと大同盟を作つて、ローマを攻めようとしたのであります。それは失敗に終りましたが、此考は實に大局に眼を注いだ偉大なものでありました。彼は今度もシリヤに行つて——當時カルタゴ、マケドニヤ、ギリシヤなど概ねローマに多少屬國の形であつたが、シリヤのみは、まだローマより全く獨立して居る大國でありますから、シリヤを中心として、マケドニヤ、カルタゴ其他の國を聯ねて、對ローマ大同盟を起さしめ、直ちにイタリヤに上陸しようと云ふ考でありました。彼が初めてアンチオクスに會つて策を獻ずる時にも、イタリヤに上陸して、直ちにローマを突くの計畫を勸めたのであります。然るにアンチオクスは、彼の策を用ひず、加之、彼を疑つて、彼に一軍の獨立司令權を與へないで、幕賓のやうなものにしました。併し參謀長として總て彼の言ふことを肯くのでもなく、他の詰らない朝臣などと一緒にして扱つて居つた。

ハンニバルの對ローマ大同盟策

ハンニバル重用せられず

シリヤの陸軍振はず海軍閉塞せらる

さればハンニバルのやうな寶を持ちながら、寶の持腐れで效が無かつたのでありますが、何しろアンチオクスはローマとは餘ほど反目して居つたのでありまして、どうにかしてローマを討たうと云ふ考はあつたけれども、彼はハンニバルの策を用ゐて、彼に軍を託してイタリヤに上陸させることもせず、又自身之を行ふこともしないで、ギリシヤに上陸した。然るにギリシヤ諸市の一部は彼に同盟したが、他の諸市竝にマケドニヤが彼に反對して、思ふ通りに行かなかつた。さうして其海軍は小アジヤのエフェスス(Ephesus)の港に閉ぢ籠められて、動けないやうな有樣となつた。

一體ローマと云ふ國は、陸軍國であつて、海軍は已むを得ざる時でなければ造らない方であります。海と云ふ考はローマ人には餘り無い、第一ポエニ役の時にこそ、カルタゴに對しては、海で破らなければならぬと云ふことを悟つて、一時海軍を擴張して遂に最終の勝利を得たけれども、海の方に對しては兎角明らかな考がなかつたのであります。然し此時には、ギリシヤに陸海軍共に餘計に送らない。却てギリシヤの海軍がローマの指揮の下に盛んに活動したのであります。それでローマが斯くの如くグズ〳〵して居つた今一つの原因は、何であるかと云ふに、ローマは非常にハンニバルを怖れたのであります。丁度ハンニバルが考へたやうにイタリヤに

上陸されることを非常に怖れた。

ローマ大にハンニバルに備ふ

それ故にローマは、アンチオクスがギリシャに上陸した後も、やはり兵も軍艦に十分に送らない。先づ、ハンニバルが第二ポエニ役の時に根據地にしたブルッチウム（Bruttiam）地方に二萬五千の兵を置き、又都府には二萬五千の兵を備へ、イタリヤ北方のガリヤ、其他コルシカ、サルヂニヤ、シシリー等に、各一軍づつを配置し、彼方此方ハンニバルの來さうな所に凡て軍を置き、海軍は、渡つて來さうな所に留めて置いたから、ギリシャには多く送らなかつたのであります。既にしてアンチオクスがイタリヤに來さうも無いことが、十分解つてから、海陸軍を派遣した。然しローマの海軍は、やはり餘り振はなかつた。ギリシャ諸市の海軍、特にローズス（Rhodus）市の海軍——此ローズスの海軍は中々盛んであつて、將卒共に海戰に慣れ、えらい大將なども出て居りますから、ローズスの海軍と他のギリシャ諸市の海軍が主力となつて、ローマの海軍と聯合してエフェスにシリヤの海軍を封鎖したのであります。

ローズス海軍主腦たり

そこでシリヤ王のアンチオクスは、他の新に拵へた艦隊を以て、フェニキヤの方から、エフェスに居る自己の艦隊を救援することを命じました。そこでローズスの方からは、此救ひに來る敵の海軍を破らうと云ふので、之に向つた。ハンニバルは此時に初めて實戰に用ゐられて、

ハンニバル司令官となる

シリヤ艦隊の司令官になつたのであります。然しそれも總司令官ではないので、アポロニウス(Apollonius)と云ふシリヤの貴族で何にも知らない男が、同じく司令官で、海軍も新に拵へたのであるから餘り整備した海軍ではありません。ハンニバルは、さう云ふ部下を率ゐて、又餘り賢明でない同僚と共に事を執らねばならない、甚だ不利益な位地にあつたのであります。然し彼は此時に初めて、海戰に於ける彼の技倆を示す機會を得たのであります。

それで、いよ〳〵フェニキヤを發したハンニバルとアポロニウスの艦隊は、小アジヤの南岸に沿うて、段々西の方に向つて行きます。又一方には、ローヅスのエウダムス(Eudamus)と云ふ大將が聯合艦隊の總司令官になつて、西の方から、同じく小アジヤの南岸を此方へやつて參ります。聯合艦隊——大部はローヅスの海軍——は、バンフィリヤと云ふ地方のエウリメドンと云ふ河へ入つて一時止りました。然るに之より內地の處にあるアスペンヅス(Aspendus)市の人から、敵艦隊はアスペンヅス南方の海岸のシダ(Side)市の方向に來りつゝある、といふことを聞いて、直に夫に對して向ひ、茲に兩軍が衝突して、所謂アスペンヅスの海戰ともシダの海戰とも云ふ合戰が起りました。アスペンヅスは內地の市で、合戰のあつたのは、シダ沖ですから、シダの戰と云ふ方が宜しいと思ひます。

兩軍相近づく

史家ポリビウス

シダ合戰のことに關する史料は、ローマ側の傳ふる所のみであります。カルタゴ人の書いたものでは、何も殘存して居りません。ローマ人の歷史ばかりであるから、どうしても不公平になります。先づポエニ役のことを詳しく書いたのはポリビウス(Polybius)で、彼は元來ギリシヤ人であつて、人質として久しくローマに行つて居り、スキピオ(Scipio)家の世話になつて居りました。當時ローマでは、ギリシヤの學問文藝を尊重する風になつて居り、スキピオ家は特に之を好みましたから、ポリビウスは人質ではあつたけれども、スキピオ家では、彼を客とし師として親切に取扱つた。それでポリ

第一圖
古代小アジヤの圖

ポリビウスの著書の散逸

ピウスも其恩を感じたから、彼のローマ史中、スキピオに關する所は、スキピオ家の傳說を盲信して、褒め過ぎるやうな傾がありますが、其外の事に於ては、大體にポリビウスは最も公平であります、殊にハンニバルに對しては十分同情を有するのみならず、彼は、ハンニバルが南イタリヤに於て石に刻して遺したと云ふ、其ローマ征伐の記事を使つて居ります。それ故に、カンネーの戰の如きは、餘程面白い。殊にポリビウスは戰術眼を有つて居るから、その記事が頗る有益で興味があり、信ずべき所が多いのであります。然るに不幸にしてポリビウスの著書の、散逸して仕舞つたのが少からずあつて、丁度シダの合戰の所が現今は殘つて居りませんのは、眞に遺憾の極みであります。

史家リヴィウス

其次に、一番好い材料は、リヴィウス（Livius）であります。リヴィウスはローマ人であります、から、どうしても自國贔屓でありますが、シダの海戰の如きは、專ら之に據るより外仕方がない。所がリヴィウスの書いたものは、眼光紙背に徹するやうな史眼を以つて見なければいかぬのであります。――私のやうな近眼では迚もいかぬかも知れませんが、併し私は自分では、隨分リヴィウスの文句を熟讀玩味しまして、又地形などを考へ、他の書にある記事をも比較研究して見まして、先づ之で大體の戰の模樣を胸の内に畫いて、餘り間違つては居らぬかと信ずるのであります。夫は卽ち下に擧げるのであります。

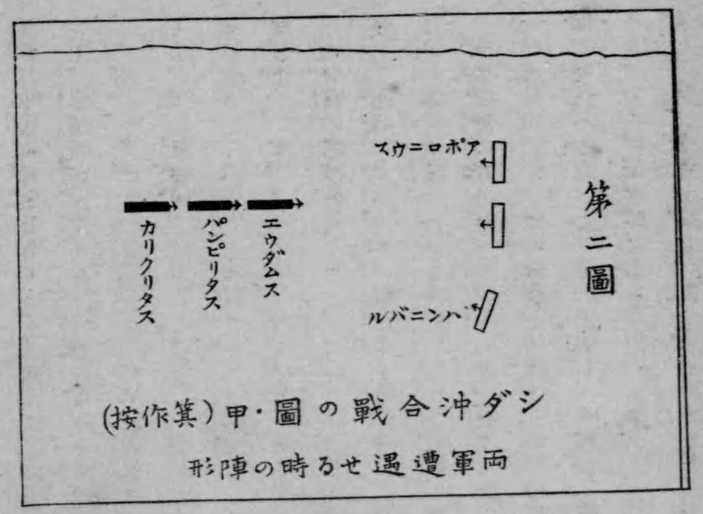
史家ネポス

リヴィウスの記事は、餘り戰術研究に對して大切でないやうな事が多くて、詰らない話が隨分交つてありますから、それを措いて要點を聯ぎ合せて、此戰の眞相を覗ふのであります。

次の史料はコルネリウス・ネポス（Cornelius Nepos）の書いたものです。是は愛國心の強い歷史家でありますから、隨分不公平な事が書いてあります。然し此時はカルタゴが亡びてから大分隔つて居りまして、之を恐れる必要が無いから、割合に寬大にあり得る。ハンニバルはローマが一番手古摺つた對手でありますから、此ハンニバルが偉大な人であるといふ方が、ローマの名譽の爲めに利益である。故にコルネリウス・ネポスは、そのハンニバル傳の一番初めに、『ローマ人は負けたことのない人民であるが、ハンニバルには負けた』と云ふやうに書いて、ハンニバルを褒めて居る。ローマは最後にハンニバルに勝つたのであるから、彼を褒めても差支ないので、つまりハンニバルは特別にえらい人だから、ローマ人は負けたといふて、暗にローマの辯護をするのである。

ネポスがハンニバルを激賞するの極、時に記事の中に褒め過ぎて、馬鹿々々しいことさへある。殊に彼がハンニバルのビチニヤ（Bythinia）の客將となつて、ローマの同盟ペルガムス

ネポスは時にハンニバルを過賞す



シダ沖合戰の圖・甲（箕作按）
兩軍遭遇せる時の陣形

(Pergamus)と海戰をする際に、ハンニバルの智慧を顯す策略などは、餘り馬鹿氣て居つて、會々ネポスが海戰に關する知識の皆無であることを示すのであります。そのハンニバルの策略といふは、丸で兒戲に等しいことが書いてある。之は最眞の最眞倒しともいふものでありますからここには申しません。然し兎も角、ネポスの書もシダの海戰に關して、多少參考となる可きものであります。

それでシダ沖海戰の實況は、大體下の如くであつたと思ひます。尤も此斷案の考證は餘り混雜しますから、一々申上ません。唯こゝには諸君の眼に成る可く明らかに映ずる樣に、圖を作つて御話致します、第二圖は、戰爭の初る前の

合戰開始前の兩軍の陣形

兩軍偵察の優劣

兩軍の陣形の考案であります。ローズス以下の聯合艦隊は單縱陣で三戰隊に分れて進みつゝあつて、總司令官エウダムスが第一戰隊を率ゐ、パンピリダス(Pampylidas)が第二戰隊に將とし、カリクリタス(Calycritas)が第三戰隊を指揮して、引續いた單縱陣を作つて來たのであります。尤も單縱陣といつても、決して今の樣な規律正しいものでないことは勿論であります。それに對して、シリヤ艦隊はどう云ふ風にして來たかといふに、やはり三戰隊に分れて、單橫陣を作つて來た。ハンニバルは左翼を率ゐ、アポロニウス(Apollonius)が右翼に將とし、中陣の司令官の名は分りませんが、いづれ餘り賢明でないシリヤの一將であつたものと見えます。而して此時ハンニバルの戰隊は、遙に海上に伸びて居つたものと見える、此最後の點に就いては追々述べる積でありますが、是れが彼れの海戰戰術を知る鍵であります。（第二圖）

同盟艦隊の司令官エウダムスは、初より敵と戰ふ決心で進んで來たのであるから、前方に輕速な艦を出して、敵の動靜を偵察せしめなければならぬのでありますが、それを怠つた爲めに、斯く突然不用意にして敵に遭遇し、不利益な陣形で戰ふ可く餘儀なくされたのでありませう。

ハンニバルが偵察艦を出したといふ事は、リヴィウスの記事には出て居りませんが、彼が敵に遭遇した時に橫陣を爲し、直に自己の率ゐた左翼戰隊を以つて、敵の右翼を壓せんとしたのに依

つて考へれば、彼は豫め偵察艦を出して、敵の動靜を探つて居たといふことが信じ得られるのであります。況んや彼がイタリヤの陸戰でローマと對抗した時は、周到なる偵察を行ふことが彼の特徵の一でありましたから、海戰に於ても、必ず偵察に重きを置いたものと思はれます。

ハンニバルの作戰計畫

然らば此時ハンニバルの作戰計畫は如何であつたかといふに、前後の彼の行動を精しく調べて、又陸戰に於ける彼の慣用手段と比較して考へて見ますと、私は彼は下の如き戰術を行ふ考であつたと確信します。即ち、敵が未だ展開せざるに先ちて、我左翼を以つて敵の右翼を、その右端より壓迫包圍し、之を混亂せしめて、次第に海岸の方へ壓しつめ、敵の中陣及び左翼と共に、混亂せる團塊となして、之れによりその行動の自由を奪ひ、我が全軍を以つて、恰も風呂敷を推被せた樣に敵を包んで、以て之を全滅して仕舞はういふのであります。之より追々夫れを說明します。

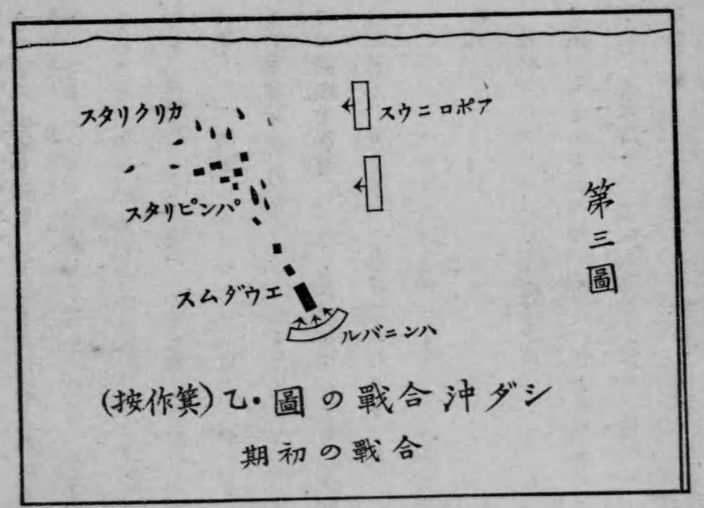
此合戰に於ける兩軍の勢力は、コルネリウス・ネポスに據ると、シリヤの方が劣勢だつたとありますが、私は寧ろリヴィウスの方が、此點は確實だと信じます。リヴィウスに據れば、シリヤ艦隊は三十七艘、同盟艦隊同三十六艘で、略同數でありますが、シリヤの方が一體に艦が大きかつたとあります。そこで、艦が大きければ、從つて其船體も堅牢で、乘組員も多かつたらうから、之はシリヤの方の強みであります。然しながら艦の小い方が操縱が自由である。然るに同盟艦隊の大部分は海事に慣れたローヂス人であるから、彼等は成るたけその艦を自由自在に運動して、舳にある衝角を以つて敵の艦腹を突き、或は自己の船體を以つて敵艦の櫂を折りて運動力を失はしめるのが得意である。故に夫れに適した廣い海面にあることを利とするのであります。一方にシリヤ人の方は、新く急造した海軍であるから、其船の操縱は到底敵に及ばない。然し接近混戰となれば、船體が大きく、人數が多いだけに、敵艦突入戰に利があるのであります。是れも、ハンニバルの戰術に關係して居るのであります。況んや艦隊が混亂せる團塊となれば、此の內側になつた艦は何をすることも出來ず、外側だけの艦が合戰に加り得るのであります。

ハンニバルの敵軍の行動の自由を破り專ら敵艦を突入戰に行はんとす

當時は、各艦の舳に衝角があつて、之が敵艦を沈める利器であつたから、從つて陣形は橫陣を以つて最有利としたのであります。然るにエウダスムは、不用意にして縱陣のまゝ敵に遭遇したのであるから、大に驚いて急に橫陣に展開せんとしたが、何分海岸は近し、ハンニバルの率ゐたシリヤの右翼戰隊が我が右側に廻つて來るので、斯くては一大事と思つたから、自身の戰隊だけでも、進んでハンニバルを喰止めんとした。然し急の事故、味方は狼狽し、エウダム

ハンニバル敵の右翼を壓迫す

同盟艦隊混亂す



第三圖

シダ沖合戰の圖・乙（筭作按）

合戰の初期

スの率ゐた右翼艦隊の諸艦の中でも、命に應じて之に續いた艦は多くなかつた。（第三圖）

ハンニバルは得たり賢しと、忽ちエムダムス以下の諸艦を優勢を以つて包圍し、頗るこれを苦しめた。

同盟艦隊の他の二艦隊は、既に右方に戰爭が始つた爲めに、此方面が塞がり、而して海岸との間に餘地がないから、展開して横陣を作ることが出來なかつた。後陣の如きは、中陣の背後に集るのみで、まるで陣形を成しません。斯くの如くして、同盟艦隊はハンニバルの豫期した混亂狀態に陷つたのでありました。

若しも、此時ハンニバルの同僚の司令官等が、彼れの勇氣と精力の十分の一でもあつたならば

ハンニバルの同僚の無能

同盟軍再び振ふ

ハンニバル孤立して危險に陷る

必ず敵の混亂を利用して、直ちに敵を襲ひ、之を苦め、以つてハンニバルの計畫を完成せしめ得たでありませう。然るに惜しいかな、彼等は遲鈍にして、且つ大膽ならず、空しく好機を逸せしめた。リヴィウスも、同盟艦隊の人々が『暫くして恐慌を脱した』といつて居るから、其前は全く恐慌して、出づる所を知らなかつたとは明らかである。然しながら、敵が彼等の混亂に乘じて、機敏に襲はなかつたので、既にして再び平生の勇氣を恢復して、萬死を賭して、以て此危險を免れんと決したるもの、如く、相競うて勇往邁進し、二三艘づつ、一時に敵の先頭の諸艦を襲擊し、忽ち衝角を用ゐてその數艘を沈沒せしめた。是に於て他のシリヤの諸艦長は辟易し、先を爭つて逃げ初めたので、ローヅス人等は、勢初に百倍して、益々之に肉薄したので、アポロニウスを初めとして、シリヤの中陣、及び右翼の諸艦は散々になつて潰走しました。

此時、ハンニバルは、優勢を以つてエウダムスを包み、息をも吐かせず攻立てゝ、方に之を全滅せんとして居つた。時に、味方の潰走によりて餘裕を得た敵の諸艦が、續々エウダムスの救助に走せ加り、之に依りて主客地を替へて、ハンニバルが反つて敵に包圍されんとした。是に至りて、ハンニバルも、味方に見棄てられ、敵中に孤立したために、もはや勝利の望なきの

みか、自己も危險になつて來たので、止むを得ず退却せねばならぬ悲運に迫つたのであります。

さて、此邊のリヴィウスの記事を見ると、ローヴス人を揚げ、ハンニバルを貶さんと焦りて、連りに舞文曲筆を試みんとして居るが、しかも冷靜に之を熟讀玩味すると、問ふに落ちず、語るに落つる底の趣があります。リヴィウスの記事の梗概を云ふと、ハンニバルが逃出したが、味方は疲れて追ふ力がないから、先づ食事をした。食事終りて後、エウダムスが、帆檣に登つて見ると、敵は散々に潰走して行く。是に於て諸人皆之を追究すべしと叫んだ、然しエウダムスの旗艦は、損所があつたから、彼はバンビリタス及びカリクリタスの二將をして、ハンニバルを追はしめた。然るに二將は、敵が海岸に沿うて走るのを見て、自己の艦を岩に乗上げんことを虞れて、追擊を中止した。と斯う書いてあります。然し初めに敵が逃げるのを見たといひ、空腹は敵も同樣であらうに、それを追擊をもせずして、中食をすると云ひ、中食が濟んでから帆檣に登つて、此所に復も敵が逃げて行くを、初めて發見した樣なことを云ひ、それから、敵を追うて海岸の岩に乘上げる危險があるならば、倉皇として逃げる敵は、尙更坐礁する危險があつたであらう。是等を考へて見ると、ハンニバルは、破れたりと雖も、敵にも多大の損害を與へ、その退却も正々堂々として、敵も容易に之に手を出さなかつたものではあるまいかとも思

リヴィウスの記事の撞著

彼の海戰術は陸戰と同精神

彼の陸戰は常に包圍を主とす

へます。

何しろ、此シダの合戰は、ハンニバルの作戰計畫が巧妙であつたに拘らず、其同僚の無能とローヴス人の勇悍とによりて、遂に敗北に終つたのであります。併しながら、敗北したからというて、之を以て戰術の巧拙を論ず可きではありますまい。我々はシダの合戰を研究する結果、反つてハンニバルは陸戰に於て、古今の名將なるのみならず、彼は海將としても、亦實に希有の戰術家であると云はざるを得ないのであります。而して彼が海戰に用ゐた戰術は、彼の陸戰に用ゐた戰術と其根本に於いて全く同じ精神を表現し、私の次に申します包圍戰術の粹を顯して居るものと認めます。

ハンニバルが、イタリヤでローマの軍と連戰連勝をした時には、常に或形に於いて此包圍戰術を用ゐて居るのであります。トレビヤ(Trebia)戰でも、チキヌス(Ticinus)戰でも、トラシメヌス(Trasimenus)戰でも、皆之を用ゐて居りますが、特に夫れが遺憾なく發揮されて居るのは、カンネー(Cannae)の合戰であります。それで此合戰に關して、其戰術の顯れた所を、極簡單に申述べます。

カンネーの合戰の時には、兩軍共に初は橫陣で、各中陣は步兵で、左右の翼は騎兵であつて

兵數に於ては、ローマ軍はカルタゴ軍の倍でありました。然しその多いのは歩兵にありまして騎兵に至つては、反つて兵數に於ても訓練に於ても、ローマは遙かにカルタゴ軍に及びません。又ローマの歩兵は勇敢であるが、其陣の配列方が固定的であつて、前進には至極適して居たが、前面以外に變化の出來ない性質のものでありました。

之に對して、ハンニバルの訓練したカルタゴの兵は、變化自在でありました。それ故、ハンニバルは、歩兵の大部を前面に置き、一部分を此の前隊より後ろの兩側に止め、敵の中陣が我前面を激しく襲うて來た時に、後の兩側の兵を廻轉して、敵の兩側面に出でしめ、之を横から討たせました。之と同時に、兩翼の騎兵は、これに對する敵の兩翼の騎兵と戰ひ、その優勢と訓練とにより、之を破るのみならず、一部を以つて敵の騎兵を追擊し、他の一部はローマ軍の歩兵の背後に出でて、之れを襲擊しました。是に於て變化の出來ない固定的のローマ軍は、四方から圍まれて段々壓しつめられて、遂には動くことの出來ない塊團となり、外側の兵のみが、四方から襲ひ來るカルタゴ兵に惱まされ、内側にある多數の兵士等は、手も足も動かすことが出來ないから、戰鬪に參加すること能はずして、空しくその戰友が苦戰するのを手を束ねて傍觀して居るばかりで、かゝる狀態は戰鬪にあらずして屠殺と云ふ方が適當であります。斯樣に

カンネー戰の要點

シダ海戰の精神

して、ローマ軍は、カンネーの合戰に、殆んど全滅したのであります。

カンネーの戰は、斯の如くハンニバルの包圍戰術の最完全に行はれたものでありまして、其外の陸戰も、皆二方、或は三方の包圍であります。然るにハンニバルがシダに於いて、初めて海戰を爲すに當つても、やはり其戰術の精神は此包圍を主として居るのであります。即ち、シダの海戰は、敵の一角を包みて、海岸の方へ壓迫して、混亂せる塊團となし、全部を包圍して、之を全滅するのでありました。

昨年十二月の史學會例會に於て、私は『戰術と時勢との關係』(拙著南亭史說集參照)と題して、御話致しました。其の時に御出席の方は御存じで御座りましたらうが、雜誌には未だ出しませんでしたが、ここに復び其内の重要な點だけを申しますと、私は其節申しました、古今東西の合戰が五種に區別され、文明、風潮に伴ふ戰術の變遷を示して居る。即ち

第一　縱陣混戰
第二　横陣混戰
第三　整備せる横陣若くは縱陣
第四　一角突破戰

第五　包圍戰

この第一の縦陣混戰といふのは、最も原始的の戰鬪の方法で、卽ち烏合の衆が敵に向つてドツト掛つて行くので、一番大膽な者、一番自分の力量を信じて居る者、一番足の早い者が、眞先に驅け行き、其他が不規則な縦陣、否細長き團塊を爲して、跡からワイ〳〵躡いて行くのでありまして、眞先にある者が一番に敵に接觸し、跡より附隨して來る者の後押しに助けられて、勢込んで突きかゝるので、多少强き壓迫を敵の集團に加へるのであります。

縦陣混戰

第二の横陣混戰といふのは稍進んだもので、家族制度若しくは、階級制度より、一人の頭が數人を指揮して進み、之が競爭して出るので、單に一人が先になるのでなく數人數十人が前に出て、不規則なる横列の前面を作り、其背後に集團がある。これは前の縦陣混戰よりは、多少攻擊力が增して來る譯であります。

横陣混戰

第三の整備したる横陣若しくは縦陣は、文明が餘程進歩し、軍隊にも規律が出來、軍の編制、配置指揮などが大に進歩して來た後に見る可きもので、一進一退共同動作を重んずるものであります。陸軍では、大體横陣であり、海軍では大砲の發見せらるざる前には、横陣を以て進退し、接近に及びて混戰となり、專ら衝角を以つて敵船體を貫き、或は敵艦に突入して勝敗を決するのである。其後大砲の發明ありて、後は、左右の舷側に大砲を置くより、整備せる縦陣が初つたのであります。さて陸戰の横陣、海戰の横陣若くは縦陣で戰ふことが一般になると、形式が固定して、勝敗の程度が小くなつて、一擧にして敵を全滅するなどいふ決戰が出來ず、戰は長引くのみで、雙方疲弊の爲めに止める樣なことになります。之に於て起るのが、

一角突破戰

第四の一角突破戰で、卽ち敵の一部分に我力を集中して、勝を制するのであります。これは陸戰では、エパミノンダス、アレクサンドル大王、フレデリック大王、ナポレオンなどが用ゐたものであります。海戰の方では、テミストクレスが、サラミスに於て之を用ゐて居る。中古には、ヴェニス、ジェノアの提督で、之を用ゐて居る者がある。近古には、オランダのデ・ロイテル、イギリスのネルソンなどが、これを用ゐて居る。リッサに於けるテゲトッフの戰術もやはり之である。

包圍戰術

第五に最も大切なるが包圍戰術で、これは昔のペルシヤ人が常に之を用ゐ、ハンニバルは最も之に成功して居る。サラセン人などもそれである。近世に至り、モルトケの戰術がそれで、ケーニググレーツの戰はこの集中的包圍戰である。日露戰役の奉天合戰も包圍戰であります。此包圍戰と前の一角突破戰とは、其分界が隨分不明であり、且つ同時に用ゐらるゝことがあ

る。要するに、包圍戰は、敵を二方三方若くは四方より包み、その多數をして逸せしめずして、全滅するのであります。ハンニバルは、カンネーに於て、四方から包圍して全勝を得たのであつて、卽ち包圍戰術の完成した者である。然しこれは畢竟ローマの隊形が固著して、前進の外に變化が出來なかつたからこそ成功したので、若し現今の如き變化自在なる軍隊ならば、四方から包圍するといふことは到底行はれないのであります。唯に四面包圍許りでなく、三面包圍に關しても、ナポレオンは、『劣勢を以つて兩翼優勢の敵の兩翼を挾むことは出來ない』と斷言して居る。近世の孫子ともいふべき、ドイツのクラウゼヴィッツの說も、同一である。要するに包圍戰術の成功には、一方が兵數、機械、軍制、訓練、士氣、謀略の一つ以上に於て、著しく超越して居ることが、必要條件であります。

包圍戰の必要條件

奉天合戰は包圍戰と一角突破戰とを兼ぬ

モルトケはケーニググレーッに於て包圍戰術で成功しました。これは兵數機械の優越が與つて力あるものであります。奉天の合戰には、我軍は兵數砲數に於て劣つて居たるに關らず、兩翼包圍に依りて勝つたのは、士氣訓練の優秀に依つたので、以上何れも謀略宜しきを得た結果である。而して奉天の戰には、野津軍の敵線突破は、是れ卽ち一角突破の戰術で、包圍戰と一角突破戰とは判然たる區域が無いのみならず、同時に兩戰術を用ゐることが出來るといふことを、證明するの實例であります。それで太古中古に於てペルシャ人、フン人、サラセン人、マジャル人、モンゴル人などは、その快速なる騎兵を以つて、變化少き步兵を、包圍戰術に依りて惱して居ることは、カルタゴのハンニバルと同一で、或は此包圍戰術といふものは、東洋人特徵のものではないかとも思はれますが、これは目下研究中故、今は未だ斷言することが出來ません。

海戰に於ける包圍戰の例

海戰に初めて包圍戰術を用ゐようとしたのは、ペルシャ人であります。一方ギリシャ方でも、サラミスの戰に於けるテミストクレスの計畫は、見方に依れば包圍戰とも見られます。然し、その後別に此戰術が見えませんが、上に述べたシダ沖の海戰は、卽ち之であります。これに似たのは、アグリッパが、セクスツス・ポンペイウスを破つたナウロクス（Naurochus）海戰であります。然し要するに、太古、中古、及び近古の初の海戰は、混戰が重であつたから、餘り十分には例に取れませんが、近古の初より、單縱陣形の戰が一般に行はれて、更に變化が無く、從つて全滅的勝敗がありませんでした。然るに、十八世紀の末に至り、形式を打破する精神が起り、陸戰にはナポレオン、海戰にはネルソンに依りて、大に一角突破戰術が發揮されました。夫から以後の海戰はリッサでも、黃海でも、八月十日でも、皆此以外に別に發展をして居りま

日本海々戰は包圍戰の萠芽あるか

せん。やはり戰線に重きを置いて居るのでありますが、獨り日本海々戰になりますと、東鄕提督は艦隊を數戰隊に分つて、相策應して一致の大運動を爲して居りますのが、何んとなく包圍戰術の萠を爲して居る樣に思はれますので、非常に興味を感ずる次第で御座ります。

（大正三年四月一日第十六回史學會大會公開講演會に於て）

ポンペイ市遺跡と古ローマの風俗

左に掲ぐるは余が嘗て哲學館（今の東洋大學）並にソール・オリエンス會に於て爲したる演說の草稿に就き增補布衍せるものなり。

一

盤梯山破裂の追憶

諸君――我が日本には御存知の通り、地震と火山といふ氣味の宜くない名物がありまして、我が國民は度々此二のものの爲めにひどい目に遇ひます。特に先年盤梯山が破裂した時なぞは、村落が地中に埋沒され、人畜多く命を落し、實に其慘狀は今から思出しても、ぞつとする樣でありました。今から千餘年も過ぎて後、偶然其近邊を掘つて、臼とか釜とか云ふ樣な物を見出したなら、嗚呼、此邊が昔盤梯山破裂の時埋められた村落の在つた所かと想像して、明治時代の舊記を調べて見る抔と云ふ事が其頃の學者の中にあるかも知れません。

然し、此等の村落が木造であつたからこそ忽ち燒土となりて、臼とか釜とか石か金屬で製し

家屋構造に基く調査の難易

ヴェスヴィウス山

た物の外殘らないので、取調が頗る六ケ敷なりますが、此等の村落が煉瓦造りか、若くは石造であつたなら、火山の灰、或は石片の爲め埋沒せられた後も、其形が大體元の儘存して居て、若し數千年の後掘出されたならば、其時の人は明治時代の日本の衣食住の有樣に就て、現今生きて居る我々と殆んど同樣に知り得る事が出來て、嘸かし愉快に思ふ事で御座りませう。夫で今日私が諸君に御話致しますのは、我が國と同じく地震と火山が名物である所のイタリヤ國のポムペイ市遺跡の事であります。此ポンペイは盤梯山近傍の村落の如く、火山の噴火に依て埋沒せられ、二千年近くも過ぎて後偶然發見せられ、今尙ほ掘出されつゝあるのであります。

諸君は定めて御存じでありませうが、ポンペイに災を與へたヴェスヴィウス山は、イタリヤ中部の西海岸なるナポリ灣頭（英人は之をネープルス灣と名く）に屹然と聳えて居る山であつて、其高さは噴火毎に少々づつ變じますが、凡そ千二百八十メートル、卽ち富士山の三分の一程で、山の頂上にある噴火口の直徑は之も始終變りますが凡そ七百五十メートルで、麓の方には樹木が繁茂して居ますが、上の方は全く兀山で、之をナポリ市より灣を隔てゝ望見すると、形の好き圓錐形を爲して、頂上より噴出する黑煙は、夜は火の如く紅く、如何にも奇觀であります。

一體ナポリ灣の近傍は灰燒石等至る所に在り、舊噴火口の湖水となり居るものも少からずあ

ナポリ灣附近の圖（第一圖）

ります。夫故ローマ人は、此邊をフレグレイ・カンピ卽ち『燒野』と名け、太古長身の魔物等が大に此所に正神等と戰ひ、最上の正神ユピテルが雷霆を以て魔界の徒輩を滅燼した。夫れで斯樣に燒跡の樣であると言傳へて居りました。古代はヴェスヴィウスも長き間噴火を止めて居ましたが、其噴火の形跡が人の眼にも容易に入つたので、彼の有名なる古代の地理學者ストラボー氏がヴェスヴィウスの事を述ぶる條に、『山ノ周圍ハ良ク耕サレ多クノ人民住居ス、獨、頂上ハ大方平ラカニテ草木ナク、灰色ニテ岩ニハ恰カモ火ニ燒取ラレタル如キ穴隙アリ、之ニ依テ察スルニ、此山ハ昔ハ燃エタルモノニテ、噴火口アリシナランカ、燃料盡キテ自然消エタルモノナルベシ』とあります。

ストラボー時代と現今と山形異る

ヴェスヴィウス山大噴火

ストラボーは西暦紀元前六十年頃生れた人であり、さすが、彼の記錄に依りてヴェスヴィウス山が當時噴火して居なかつたことは勿論、其時の山の形が今と大に異なつて居た事まで分ります。何故なれば現今の山頂は『大方平ラカ』とは申されません。前云うた如く圓錐形であつて、此圓錐の峰の北と東の方を半月形に圍んで居るモンテ・ヂ・ソンマと云ふ屏風の如き部分があつて、中央の峰とアトリオ・デル・カヴァロと名くる深き谷に依て隔てられて居ります。學者の說では此モンテ・ヂ・ソンマが太古の噴火口の周邊の一部であらうと申しますから、ストラボーの時代には、富士の寶永山に當る此中央の峰は未だ出來て居らなかつたものと見えます。

二

偖ヴェスヴィウスは、斯く人の記憶に殘つて居らぬ程昔から噴火を中止して居つて、誰も之が再び噴火しようとは思はなかつた所が、紀元後六十三年二月五日に大地震があつて、近傍のポンペイ、ヘルクラネウム等の諸市が大損害を被り、其翌年にもナポリに大地震があり、地下の火力の再び活潑となるべき前兆を顯しまして、夫より十六年目に當る西暦紀元七十九年八月二十四日チツス帝の世、卽ち我が紀元七百三十九年景行天皇御宇己卯九年、支那の後漢章帝建

初三年、今まで沈靜であつたヴェスヴィウス山が俄かに大噴火し、其近傍のポンペイ、ヘルクラネウム、スタビエー等の諸市を全く地下に埋沒して了ひました。

此時カユス・プリニウス・マヨルと云ふ學者が、此現象を研究せんとする熱心の餘り、危險を冒し現場に至り、終に命を落し、學問の爲名譽の殉死を遂げました。此人の甥にて其養子たりしプリニウス・ミノルが、目擊せる事どもを其友人なる知名の歷史家タキツスに報じた書狀が御座りまして、之を讀めば眼前に當時の有樣が浮出る樣でありますから、少し許り之を意譯します。

其後度々アリシ噴火ハ、初メテ經驗スル人ニハ非常ニ强ク思ハレンガ、我輩ガ今述ベントスル噴火ノ時ニ比スレバ、實ニ論ズルニ足ラズ。此噴火ニ先チテ、巨人ノ如キ常人ヨリ遙カ大ナル者ガ、空中ニ飛行シ、地上ニ徘徊シ、或ハ山上ニ顯レ、或ハ近傍ノ原野市府ニ出沒セリト傳ヘタリ。（按ずるに彼の魔物と燒野とに關する傳說は、此頃にも信ずる人多かつたと見えます）之ニ次イデ甚シキ旱魃ト激烈ナル地震度々アリ。原野ハ沸エ丘岡ハ飛ビ、地下ニ雷霆ノ如キ響アレバ、空中ニモ咆吼ノ如キ音聞エ、海モ亦鳴動シテ止マザリキ。斯クテ俄然諸山一時ニ衝突セルカト思ハル、如キ音シテ、山ノ頂上ヨリ大石投出サレ、次デ恐ロシキ火煙噴出シ、

空氣ハ爲メニ一面ニ暗黑トナリ、太陽ハ隱掩セラレ恰モ日蝕ノ如ク、白晝變ジテ暗夜トナリケレバ、人々恐レ惑ヒ、或ハ巨人煙中ニ顯レタルヲ認メタリト云ヒ、或ハ空中ニ喇叭ノ響アリト想像シ、或ハ世界ハ渾沌ノ有樣ニ返ルト信ジ、或ハ宇宙ハ燃盡スルナラント思ヒ、家中ニアリシ者ハ屋外ニ走出デ、屋外ニアリシ者ハ家中ニ驅入リ、陸ニアリシ者ハ陸ヲ捨テ海上ニ出デ、海上ニアリシ者ハ海ヨリ返リテ上陸セリ、彼等ハ其心顚動狼狽シテ、何ノ所ニ在リテモ唯己ノ居ル所サヘ遠ザカレバ安全ナリト信ゼシナリ。去ル程ニ山ヨリハ量ラレ難キ程ノ塵ガ噴出セラレ、水陸空氣ニ充滿シ、人畜ヲ害シ作物ヲ損ジ魚鳥ヲ殺シ、ヘラクラネウム、ポンペイ、ノ兩市ヲ、市民ガ恰モ劇場ニ集リ居タリシ儘全ク埋沒シタリ。此塵ハ遠ク、アフリカ、シリヤ、エジプト、ニモ達シタルガ、ローマ、ニテハ此塵空中ニ充滿シケレバ、太陽爲メニ其光ヲ失ヒ、市民ハ何ノ爲ニ然ルヤヲ知ラザレバ、非常ニ恐怖シ、萬物混亂シ、太陽消エテ地ニ落チ、地上ヅテ天ニ入ルカト疑ヒタリ、此塵ハ當時彼等ニ害ヲ與ヘザリシモ、其後疫病ヲ生ゼシメタリ云々。

住民の狼狽

諸市埋沒

此噴火の際には岩石の融解せる物卽ちラヴァは出なかつた樣であります。噴出された物は岩の小片、灰及び蒸氣にて、而して之が稍冷ゆるに從つて泥の河の如くなつて、ポンペイ等を埋沒せしめたものと見えます。

ヴェスヴィウス山は、其後五十九回の大噴火が御座りました。此間に或は數百年靜止して居た事もあり、又暫く間斷なく噴出して居た事もあります。西曆四百七十二年の噴火の時は風が有つたので、灰塵がコンスタンチノープルに達し、人民は恐怖して神に安全を祈願したと申します。又千六百三十一年の噴火は餘程猛烈な者で、大石が山より凡そ我が五里程も離れた所迄飛行き、ラヴァは七の熱河となりて流出て、ボスコ、トルレ・デル・アヌンチャタ、トルレ・デル・グレコ、レジナ、ポルチシ等の市を燼滅しました。最近の大噴火は千八百七十一年一月にラヴァの小流を出し初め、千八百七十二年四月二十四日より三十日に渉る大破裂を以て終りました。就中、同年四月二十六日は不意に最も激烈となり、之が爲め近所に出張せる數多の見物人を殺傷し、ラヴァの流はマッサ、サン・セバスチアノ二市を破壞し、十二時間に我が一里九町餘を流れ、又噴火口より投出されたる熱石は千三百メートル(我が四千二百九十尺)の高さに上り、灰は其二倍に及びヴェスヴィウスより凡そ我が六十里も隔てたるコセンザに達したと申す事であります。

其後の噴火

三

ポンペイ市創建の傳説

偖ヴェスヴィウス山の事は此位に止めて置きまして、ポンペイ市の小史を一寸述べて置きませう。ポンペイの創立に付き確かな事は知れません。傳説に依れば、彼の小説的半神半人のヘルクレスが建設したと云ひ、又彼が此所にて戰勝の祝をなしたのが華美(ポンペ)であつたから、ポンペイと名けたとか云ひますが、此等は素より附會極た事で、信ず可き限で御座りません。最も信ずべき説は、ヨスキ族が創建したといふのでせう。其後ギリシヤのカルキス市民クマ(現今クメイトいふ)と云ふ市を建て、之よりバルテノーペ(後にネヤポリスと改む。今のナポリなり)を建て、而してバルテノーペ人がヘルクラネウム及びポンペイを從へました。尤もバルテノーペはエトルスキ人種の植民地だと申す説もありますが、夫れにしても早くよりギリシヤの開化を受け、之をポンペイ等にも移した事は明らかであります。其後紀元前四百四十年頃(或は曰く四百二十五年)サムニテー族がポンペイ及び其近傍の地を切從へました。

ローマ史に顯はれたポンペイ市

ローマの歴史にポムペイの事の見えるのは紀元前三百十年所謂第二サムニテー戰爭の頃で、素此邊はサムニテー領であつたから、ローマの大將コルネリウス艦隊を率ゐ、ポンペイ近きサルヌス河口に上陸し、亂暴を極めたるが、忽ち大に敗北して歸つたと申す事です。紀元前第三世紀の終にサムニテー人は全くローマ人の爲めに屈服せられ、ポンペイ市もローマに屬したれ共、

ポンペイ外壁上の樂書(第二圖)

自治制は許されました。紀元前二百十六年にローマに對する諸市の謀反の有つた時にはポンペイも多分其中に加つたものでありませう。又カルタゴのハンニバルがイタリヤに攻入つた時、此邊の市は多く彼と同盟したが、ポンペイは此際如何せしか、之れ亦明らかでありません。

其後紀元前九十一年此邊の諸市がローマに反いた時は、ポンペイ市は其主謀にて、ローマの名將スラがポンペイを圍んだ事があつた。其後スラは、ポンペイに屯田兵の如きものを置く事に致しました。而してポンペイに近きサルヌス河口(現今サルノ河と稱す)は湊に用ふ可く、市は少しく小高き丘に在りて、背後にはヴェスヴィウヌ山聳え、前にはナポリ灣が横はつて居りますから、商業上に

ポンペイの好位置

も風景上にも實に好位置を占めて居りました。夫で中々繁昌になつて、ローマの富豪の、此所に別莊を築いたのも少からずありまして、就中辯舌家としてギリシヤのデモステネスと併び稱せらるゝ、キケロも此所に一の別莊を構へて居りました。其後ローマ帝政時代となつても、皇帝の此所に行幸すること數〻あつたと申す事です。

演技場に於けるヌケリヤ人と市民との爭

歷史家タキツスに從れば、西暦五十九年ポンペイの演技場にて、市民と近傍ヌケリヤ市人との爭が起り、終に雙方腕力に訴へ、ヌケリヤ人は散々に敗北したので、殘念がりて之をネロ帝に訴へましたから、ネロ帝は裁判して、以後十年間ポンペイに於て凡て演技の事を禁ずる事になりました。

之に關する樂書

此事に關し、現今掘出したるポンペイの外壁に、彫付けた面白き樂書があります、卽ち前に掲げた圖が其寫でありまして、圖中右の方には勇士が甲冑を被つて、左の手に楯、右の手に棲櫚の葉を高く差擧げて階段を降りつゝあります。棲櫚の葉は勝利の標證であります。左方には粗末な人間の形が高い所から、中央に居る兩手を縛られて居る人を、繩で以て梯子に依て引上げて居ります。之丈では未だ何の事やら意味が分り兼ますが、樂書をした人も自ら少しく曖昧だと思うたと見えて、右の隅の方に

Campania Victoria una cum Nuceriuis Peristis

と彫付けてある、之を譯せば、『カンパニヤ人よ(ローマの南に當る地方人民の總稱にて此所にはポンペイ人を指すと知るべし)、汝等はヌケリヤ人と戰勝ちて死せり』と云ふ事で、樂書の本人はポンペイ人にて、其親族或は朋友なぞに彼のヌケリヤ人との爭鬪の時に死したる者抔があつて、暇に乘じてふと思出して彫付けたものでせう。實に彼は當時深き考もなくいたづらしたのが、今や歷史考證の一材料となるは面白いではありませんか。

ポンペイ埋沒の狀況

四

紀元六十三年に大地震があつて、ポンペイが損害を受けた事は前に述べましたが、彼の遺跡に建築中の家が見えますのは、此震災の爲めに潰れた故、新築し掛けたのでありませう。偖彼の七十九年の大噴火の頃は、ポンペイは人口が二萬乃至三萬ある盛なる市でありました。此大災の時は、第一にラピリ(岩石の小片)が降りて、地上二メートル乃至二メートル半許積り、其上に水と混じたる灰が一メートル乃至二メートル程積り、其後度々の噴火にて灰が加り、現今は上面より深さ六メートルに及んで居ります。人民の大半は當時逃去る事を得ましたが逃後れ

ポンペイ遺跡の發見

て市と共に埋沒された者は、凡そ二千人位は有つたらうと申す事であります。

大災の直ぐ後に、舊住民が歸り來て、少し許り財寶抔を掘出した形跡は御座りますが、其後年數を經るに從つて、人々全く其遺跡の所在さへ忘れて了ひました。千五百九十二年技師ドミニコ・フォンタナはサルノ(昔のサルヌス)河よりトルレ・デル・アヌンチャタに地下水道を引きました。此水道がポンペイの中を通つて、或所には家の礎の所に觸れて居りました。然しポンペイの遺跡だといふ事には少しも氣が付かなかつたと見えます。然る所ポンペイと同時に埋沒されたヘルクラネウム市の上にはレジナといふ新しき市が建てられて、千七百十九年此所に井戸を掘つた時、地下二十七メートルの所で舊市の劇場に掘當てたから、其後連りに掘つて見ましたが、彼の七十九年の破裂後度々噴火があつて、ラヴァを其上に流した故、堅くして容易に掘れず、從つて思はしき結果を得ないであつた。千七百四十八年ポンペイの遺跡の邊で、農民が偶然石像及び銅器を發見せるより、此所にもヘルクラネウムの樣な噴火の爲め埋められた舊き市があるだらうと察して、アルキユビエレといふ人が政府の許可を得て、發掘に著手しました。然るにポンペイは小高き所にあつた故、其後の噴火にも、ラヴァは其上に流れなかつたので、發掘が容易で色々な物が出て來て、之がポペンイだと云ふ確かな證據まで顯れました。

歐洲一般の驚嘆

發掘事業の不振

發掘事業の曙光

當時此發見は歐洲諸國民に非常な感動を與へ、ドイツの名詩人シルレルの如き、詩に其感情を述べました。其後も種々の人が發掘しましたが、其頃は利益一方で、金高の貴い物を得ると許り願ふから、順序なぞは少しも御座りません。折角掘出した學術上面白き物でも、市價のない物は捨てたり壞したりして了ひ、家抔が出ても其形を保存する考もなく、細かに構造を調べることもなく、唯道具屋の樣に「掘出し物」を求めて居りました。其上掘出す事が實に遲々として、時としては長い年月全く休んで居た事もありました。夫から千八百五十九年イタリヤ大革命があつて、斯の有名なガリバルヂがナポリ王國を占領して、一時ナポリ總統となつた時、佛國の小説家アレクサンドル・デュマーをナポリ博物館長兼ポンペイ發掘掛長官に致しました。デュマーは小説家としては隨分聞えた人であるが、兎角小説家は學問上の事には役に立たぬ者が少くないです。彼はナポリに來て宏壯なる邸宅に居を占めた丈で、何一つ仕出さず、ポンペイには唯一度行つた切りだから、發掘事業が少しも運びませんでした。然るに千八百六十年にイタリヤが一統しヴィクトル・エマニュエル王の權威至る所に行はるゝ事になり、國家的事業が色色興さるゝと共に、ポンペイの事もイタリヤの體面上此儘にはして置けぬ。そこで考古學者として名を得たるジュセッペ・フィオレリ氏がポンペイ發掘掛長となりまして、こゝに初めて適當な

フィオレリの發掘方針

發掘方法が行はれて來ました。

フィオレリ氏は、初めより充分順序計畫を立てゝ發掘に著手し、其觀察する所を精密に記錄し置くのみならず、可成昔の狀態を其儘に保存せんとし、譬ば一片の瓦と雖も之を捨てず、其下に臺を入れて其位置を保たしめ、又土中に木材の燒けて灰となり居る所があれば、其所に成るべく夫と同樣な大さ及び形の木材を入れ、斯くして家の上層迄も埋沒せる當時の有の儘に恢復して見る樣に心を用ひました。夫れで、日々平均八十人、多き時は一時に數百人の勞働者を使役して、怠らずに發掘しますから、現今は既に市の半分近くは顯れました。フィオレリ氏の考では今の如く進行せば此後凡そ五十年も經ば、全市悉く掘出すことが出來るであらうと申します。補記。――實際は尙ほ遙かに長年月を要する由なり

先年私も此掘出された部分を一見しましたが、實に當時の樣が良く存せられ、其の靜閑な街路を歩行くと、まるで自分が二千年近き昔に生れ返つた樣で、書物抔にてはとても分らぬ、當時の人民の衣食住の有樣が、あり〳〵と眼前に顯れました。實に凄い樣な悲しい樣な愉快な樣な一種何とも云ふことの出來ぬ感覺を起します。夫れで之から其事を少々諸君に御話を致します。

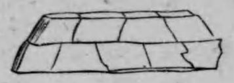
城壁の構造

五

ポンペイ市は小高き丘の上にあるから、埋沒せられた後もラヴァの流が其上に及ばなかつたと云ふ事を、一寸前に申しましたが、此丘其物がやはりラヴァでありまして、彼の紀元七十九年の噴火より尙數百年前の噴火の時流出たのであります。此事は後に關係があるから、此所に述べて置きます。

ポンペイ市の面積は六百六十萬平方メートル餘あつて、東西に長き楕圓形を爲して居り、周圍に城壁があつて、八の城門より出入することが出來る。尤も當時久しく打續いたる太平に此城壁も唯裝飾に過ぎぬ樣になつて、海岸の方なぞは便利の爲め取除けた所があります。城壁の構造は、良く表面を削りたる角石を疊み、漆喰を更に用ひてありません。其角石の表面は多くの舊市の城壁の如く、平行方形でなくして、梯形若くは兩等邊斜方形をなして居ます。（第三圖）。而して大抵は、壁の全部が此角石で出來て居りますが、所々に壁の內外の側丈に此角石を用ひ、其中間の所は不規則なる石塊を多量の漆喰を以て固めたものがあります。之は多分スラが此市を攻めた時

第三圖

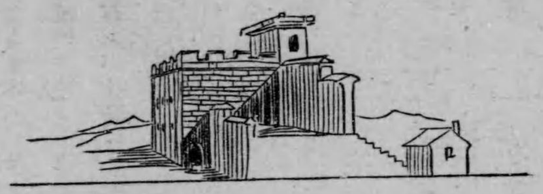


に破損した所を修繕したものと見えます。

城壁の高さは、外面に於て凡そ二丈五尺、内面卽ち市内に向つた側では、之より尙數尺高く此外面と内面との間に窪んだ溝の如き所があり、此所に兵士が隱れて居て、矢を射、投槍を投げて、寄手を防ぐので御座ります。此所へは市の側から階段があつて上れる樣になつて居る。又所々に方形の櫓があつて、遠見をなし或は狹間より敵を狙擊する便に供してあります。(第四圖)。

城門

第四圖

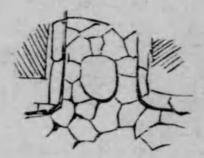


八箇所の城門は各其構造に多少の差異があります。ヘルクラネウム門は(此等の名稱は今人が假りに附けたるものなり以下皆然り)二重門にて、第一門に敵が蹂入つても第二門に於て之を喰止めることが出來る。則ち櫻田御門の樣である。補記。——馬場先門は、今は凱旋道路となつて取拂はれたが、和田倉門は斯る門の一例である　ノーラ門は、城壁の内面の邊まで引込んで居る故、一時に多數の敵が進むことが出來ぬ、且側面の壁上よりして敵を狙擊することが出來る。又所謂海面門は長き洞をなして上る樣になつて居り、洞の左側には石の階段があつて歩行者に便にしてある。凡て門の入口はアーチをなし、アーチの頂上なる基本石に種々の事が彫付けてあります。

街衢の車道歩道

城門を通りて市中に入れば、街衢は可なりに規則正しく布置してあります。而して現今の西洋諸國の街衢に比すれば、其幅は大に狹くて、大通りともいふ可き所でも、歩道車道合せて四間に過ぎず、狹きは二間位であり、而して車道は、一杯に多邊形のラヴァ石を行儀良く布きつめ、隙間或は破損した所は鐵を以て塞いである(第五圖)。歩道は兩側にありて、中央の車道より一寸程高く、角石を積んで作つてある。街衢の四辻の所には、車道の中に大きな飛石が一個若くは數個ありて、一側の歩道より他側の歩道へ渡つて行くことが出來ます。

第五圖



第六圖

街衢の狹き理由

何故ポンペイの街衢は斯く狹いかといふに、此邊は經度こそ我青森邊と同じ位でありますが、其熱いことは東京抔の中々及ぶ所でない。夫故夏季に外出するは隨分困難である、從つて往來を廣くして日陰の少くなるを人が嫌がります。現に首府ローマの如き大厦高樓の並立つ所でも、其街衢が甚だ狹くありまして、紀元六十四年の大火に依り府の大半が燒失した時、ネロ帝が再建に際し、市街

噴水器

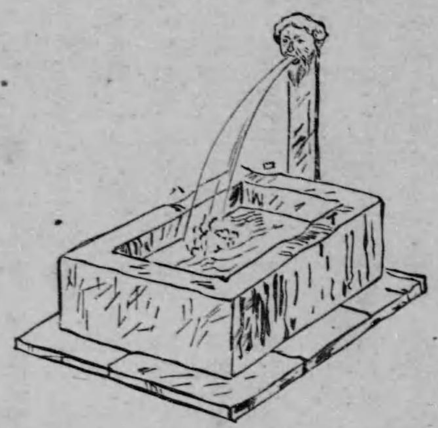
を取擴げさしたるに、當時、之れは大に市民の健康に害ありとて、非難した者が少からんかつたと云ひます。

斯く暑氣强き故行人は數々咽喉が渴く。夫でポンペイには公共の噴水器が至る所に備へてあります。噴水器の普通の形は、四角の石造の水溜の一方に柱があり、柱全體が人間、鬼神抔の形になり、其口若くは手に持つて居る瓶なぞから水が流出るか、或は柱の頂上丈が人畜の頭に成つて居り、夫から水が噴出される。第七圖は噴水器の一で「イ」「ロ」「ハ」の所が大層手摺れて窪んで居る。則ち行人が水を飲む際に、「イ」と「ロ」か或は「ロ」と「ハ」の所に手を當てゝ體を支へながら、頸を延して噴水口に己の口を接する。之が日々何度となく繰返さるゝから終に石でも其所が窪んで來る。淺草の賓頭盧樣の顏が餘り度々撫廻さるゝ爲め、目も鼻も知れぬ樣になり、ローマの聖ペイトルの銅像の足指が多數の善男善女に接吻されて、足指の形が無くなり、光つて居ると同じ事にて、實に此類の事物は小さなつまらぬものの樣だが、良く〳〵思うて見ると、此小事物の中に通常の書物抔に載せてない、幾多の悲喜、愛憎、困難、堪忍、希望、失意の歷史の材料が含まれて居るかと、云ふ事が分りませう。

閑話休題として、ポンペイ市は、前申した如くラヴァの丘の上にあるから、井戸を掘るのが餘程困難である。現に全市に發見された井戸の數は甚だ少い。然るに噴水器は至る所にあつて、市民は水の供給少きに苦んだ樣子が見えないから、之は水道に依て水を引きたるに相違ない。

水道

第七圖



一體ローマ人中には水道工事は中々進んで居て、漆喰にて石を固めた物で宏大なる水道を造りまして、其遺跡が首府ローマ其外に今尙ほ存して居ります。ポンペイ東北のアルチといふ所にも、此水道の遺跡がありますから、多分之からポンペイに引いたのでありませう。但ポンペイ附近には、未だ發見されません。

下水

水道の事をいふ序に下水の事も述べて置きまぜう。下水の事も、ローマ人が中々力を用ひまして、首府ローマ抔の下水は餘程宏大なるもので、市下に大なる川をなして居り、之に多數の支流が流れ込む樣になつて居ます。ポンペイの如き地方の小市にあつては、勿論斯樣な大仕掛なものはないが、街衢の歩道の下に渠がある。所々に車道より水を之に流し込む爲めの空隙が

あり、數本の鐵棒が其空隙に渡して外の物の落込むを防いである。而して此渠が漸々集りて一の大渠となり、海面の方に流れ落ちる樣に出來て居る。ポンペイ市は丘の上にあり、場所に依り餘程勾配があるから、渠の水は隨分良く流通したでせう。然し數多の噴水器があり、又歩道が車道より高く、加ふるに此勾配があるから、大雨の時抔は、車道其物も河の樣になつたでせう。何にしても車道は泥濘が隨分有つたものと思はれる、即ち彼の第五圖第六圖に示す如き飛石が四辻に必要な所以であります。

道路の泥濘

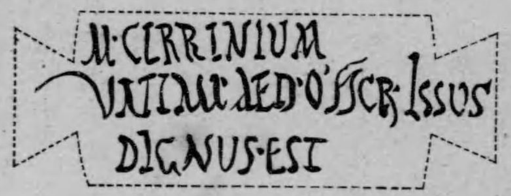
馬車

第八圖

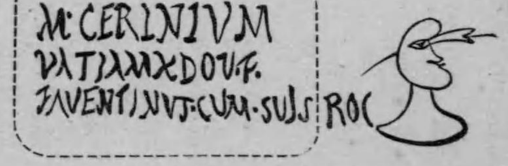
六

斯くの如き飛石は車の通行に妨害にならぬかといふに、當時車は餘り大くなかつた故、兩輪が飛石の間を通れる。而して兩輪の間の距離が小かつたといふことは、車道に輪が喰込んで窪みを生じた跡があるので知れる。此窪の深いのは一寸もある。偖當時人の乘つた馬車は何んなものかといふと、第六圖にある如き至極簡單なもので、人力車の背の方へ馬を附けたといふ風です。御者は車の進行する方に向つて立つて居ますが、主人は馬と背合せをして腰をかけて居るのです、壯士を恐れる日本の議員先生抔はさぞ羨むであらう。尤もパネがないから隨分ガタピシヤ搖られるには相違ない。然し此種の馬車は、ポンペイに於ては餘り用ひられなかつたと思はれます。其理由は、第一、ポンペイは市が小さいから、馬車に乘る必要が少ない。第二、ローマの法律で、ヴェスタ神の巫女若くは最高等官の外は、馬車に駕ることが禁じられて居る。ポンペイの如く地方市には、斯る人は別莊にでも來て居る人の外にない。而して勿論之は少數である。第三、厩の發見されたのが餘り無い。第四、街衢の仕組が重に歩行者の

第九圖



第十圖



荷車

便を計つてある。其故人の駕る馬車は少かつたと思はれます。然し商業上の目的に牛馬に引かせる荷車は相應に用ひられたでありませう。第八圖はポンペイの或居酒屋の壁畫ですが、卽ち斯樣な荷車に皮袋に酒を盛りたるが載せてあります。

家屋壁上の樂書

ポンペイの家屋の壁は、重に赤色の石塊を漆喰で固めたものである。然し隅角部、戸口窓等の邊は、煉瓦或は方石を積んで作ります。又壁も室の方の面は滑かに塗り、之に種々の模樣或は人物山水なぞを畫いてあります。往來の側には色々の樂書が見えます。坪井正五郎君は、ロンドン市街の樂書を多く寫して持つて居られます。又鳥井龍三君は、先頃遼東半島にて土人の樂書を多く寫して歸られました。此等を日本の樂書に比較して見ると中々面白い事があります。私はポンペイに滯在が餘り短かつた爲め、樂書なぞを寫して來る暇がなかつたのは、今更殘念であります。

壁上の廣告文

又唯の樂書の外に、壁の一部を白く塗りて、其上に官吏選擧の候補者推薦の文があります。今其一例を第九圖に示します、文字は M(ARCUM). CERRINIUM. VATIAM AED(ILEM). O(RAT). (VOS). F(ACIATIS). SCR(IBA). ISSUS. DIGNUS. EST. （括弧中の字は原文に は略されたるものなり）と讀めます。其意味は、『書記イッスは、諸君にマルクス・ケリニウス・

看板

第十一圖

第十二圖

ヴァチヤ君を警察掛に選擧せられんことを乞ふ。同君は、其價値ある人なり』といふのであります。此ヴァチヤ先生隨分人望家と見え、夫共運動費を餘計出したか、第十圖に、書記ファヴェンチヌスといふ者が、同じくヴァチヤを推薦する文があります。ファヴェンチヌスは廣告の末に、自分の顏を一筆書にし、耳に筆を挾ましてある。之れ卽ちカオー（花押）といふのでありませう。

此外賣物店の前に土燒の看板が色々有ります。中にも二人にて酒瓶を荷うて居るのは、酒屋の看板でせう（第十一圖）。山羊のあるのは牛乳屋の記章で（第十二圖）、象の畫は旅宿屋の看板にあり、兩人鬪ふを傍より一人見て居る畫のあるは、擊劍師範の家と察せられます。

七

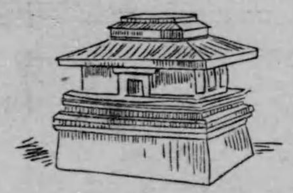
ポンペイの遺跡は、ローマ人の住居の有樣を最も良く知らし

家の構造

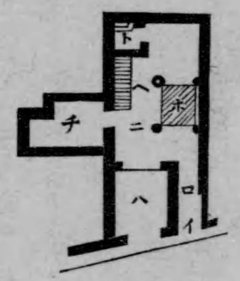
めます。ローマ人の家の構造は、昔イタリヤに威を振ひしエトルスキ種族の家屋の構造から轉じて來て居る。即ち入口より少しく進み入れば、廣きアトリウムと名くる場所があつて、中央の所は屋根がなく、大きな四角なる天窓の樣になり、之へ四方より屋根の勾配が落してある。又天窓の下にイムブルビウムと名くる四角な窪んだ所がありて、雷が落込む樣になつて居る。此アトリウムは、住家の中心にて、家族は此所に集り仕事をなし、又普通の來客と用談をする所であります。而して此アトリウムを圍みて寢室其他があるのです。

第十三圖にあるはポジオ・ガイエロといふ所から掘出したエトルスキ種族の灰入箱でありますが、其蓋が即ち其頃の家の形を顯し、ローマ人の家は此簡單なる形より進化したものであることが分ります。此家の模型に依れば、屋根は日本屋根の如く壁より外に著しく尖出して居る。其頂點の中央に四

第十三圖



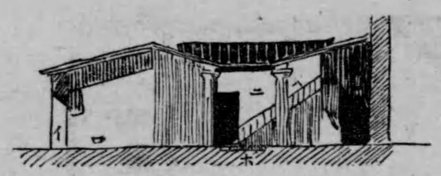
第十四圖



角なる窪があります。是即ち彼のアトリウムに當る所の天窓であります。之を心に入れて置いて、夫から第十四圖第十五圖に示す所のポンペイの最も簡單なる家屋を見ると、大に家の構造に就き悟ることが出來る。

第十四圖は表面にて、第十五圖は其縱斷圖であります。圖中「ハ」は表店で、「イ」なる戸口より「ロ」なる廊下を過ぎて「ニ」なるアトリウムに出る。其右の方の四角は即ちイムブルビウム（ホ）で、此所ではアトリウムが中央になく片隅に寄つて居る故、屋根の勾配も三方丈で、又屋根を支へる柱も四本あるが、其二本は壁に附著して居ます。「ト」は臺所なるべく、其上には二階がありて「ヘ」なる階段を上り行くのです。二階は失せたれ共、通常奴婢寢室であります。又アトリウムの左手にある大室は主人の居間と寢室を兼ねたるもの丶如く、其奥の突出た所が臥床のある所と思はれます。之は小商人の家と見えます。

第十五圖

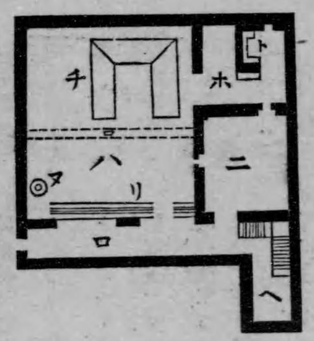


次に之より少し進んだる構造、即ち餘り歳入も多く無かつたらうと思はれる小紳士の家を第十六圖に示します。通常の家と少しく異なりたる所は、彼のアトリウムに當る所、「ハ」が甚だ

廣く、且つ天窓が非常に大きくして中庭の樣になつて居り、「ニ」「ホ」の室からも廊下からも行けるのです。「チ」の所にあるは大きなる臥床にて、此前に食卓を併べて客の饗應を致すのである。夫で人目を防ぐ爲め又日陰を作る爲め點線の所に垣を作り之に植物を絡せた證跡がある。夫からイムプルビウムが無い代りに、雨水は「リ」なる溝に流落ちて、之を「ヌ」なる井戸より酌出す。尤もポンペイには良水の供給が充分でありましたから、此雨水は多分雜用に使うたのでせう。「ニ」は臺所にて、冬は此所に家族集りて食事したのです。「ホ」は主人の室にて、「ト」は神棚のある最も奥間といふべき所です。此外「ヘ」にも一室あり、奴婢の室か物置にでも用ひたのでせう。

稍進みたる家屋の構造

第十六圖



其外に二階があつたことも、階段があるので知れます。

八

之より更に有福なる家に御案内しませう。即ち第十七圖に其圖面、第十八圖に其現情の寫眞を出しました。「悲劇詩人の家」と假稱せられたる住宅であります。此假稱は、壁畫に詩人の畫が書いてあり、又二三の假面の畫がある所から、主人は詩人であつたらうと想像したのです。然し此想像は餘り根據が薄弱である。此家の表の店は貸店らしくない。貸店なれば、母家とは全く隔離してあるべきに、廊下よりも店に入る口があれば、家の主人の自家用の店らしい。夫で此家に寶玉類があつた所から、寶玉屋の店ならんと想像する人もあります。何れにしても主人は、風流なる心懸の人であつたと見え、左程大きくもないが壁畫や床の模樣に意匠を凝らしてあります。

「悲劇詩人」の家

凡て此程度の家は、之を奥向と表向の二部に大別することが出來ます、表向はアトリウムを中心とし、家外の人に接し、又所謂下の者の居る所であります。奥向はアトリウムに似て天窓のある柱を以て圍みたるペリスチリウムといふ場所を中心とし、家族の集る所、或は懇意の人、或は高貴の客に接する所であります。此ペリスチリウムは、其構造名稱共ギリシヤのもので、初めはローマの建築には無かつたのを、後にギリシヤ人に接するに至り、此風を輸入して、之を家の奥向の中心としたものと見えます。

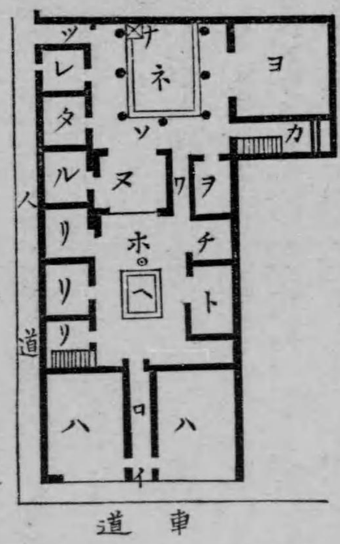
奥向と表向との區別

第十七圖に於て「イ」は戸口、「ロ」は廊下で「ハ」「ハ」は店にて廊下からも行ける樣になりて居

る。廊下は其幅一間長さ五間程にて、一面に大理石を布き、其入口に近き床に、種々の色の石を寄せ合せて、大きな斑色の犬が喰付きさうな姿勢をして居る所が出來て居る。其頸環は赤色にて之に鎖が付けてあり、足の下の所に CAVE CANVM といふ字が顯れて居る。卽ち「犬に注意せよ」といふ意味であります。之を見て先づ主人の洒落好なることが知れます。

廊下を通れば、アトリウム（「ホ」）に出る、其入口には、戸或は幕を引いたでせう。アトリウムの幅は三間二尺同奥行四間四尺、卽ち凡そ三十疊敷位の廣間であります。中央には例に於てイムブルビウム（「ヘ」）があり、之れに雨水が流れ落ち、其底から井戸の中へ流込む。此井戸側は大理石にてイムブルビウムの奥に向ひたる側にあります。

第十七圖



廊下
表廣間

アトリウムの床は一面に白き方形の大理石を碁盤の樣に布き、其目の所に黑き石にて點が嵌めてある。又イムブルビウムの廻りは黑地に白を入れて極めて美麗なる模樣になつて居ります。四方の壁にはギリシヤ神代史の傳說の話を美事に畫いてある。但し此壁畫は之を保存する爲めに、壁ごとそつくり取りて、現今ナポリの博物館に藏してあります。アトリウムの入口の左にある階段は、奴婢の寢室に至るので、「リ」「リ」「リ」「リ」は家族の寢室です。右方の「ト」の室は何に用ひたるや、明言出來ません。其隣の「チ」はアラ（翼）と名け、此家には一ッですが、多くの家にては左右同じ樣な形に二つあるのです。之は神の像及び祖先の像を飾置き、家內の祭事を營む所であります。

壁畫

夫から突當りの「ヌ」なる大室はタブリウムと名け、主人の居室にて、奥向部と表向部の中間にあり、卽ち全家の中心となる所です。主人は、此內にあつて容易に表奥を同時に監督することが出來、又內より戸を閉ぢ或は幕を引く時は、人から其私務を見られることもない。何となれば、此所は神聖にして犯す可からざる所で、家人奴婢が主人の許なくして、妄に入ることを得ぬ場所であります。夫で此室の裝飾は最も立派で、床には寄石で能芝居の座頭らしき者が、役者に面を分配し注意を與へ居る畫が出來て居る。此事は、尙ポンペイ人の娛樂の條に話しませう。此室の壁畫も中々立派ですが、就中詩人が書を讀んで居る圖は此家に「悲劇詩人の家」なる假稱

主人室

第十八圖

奥廣間

を與へたる所以であります。

表より奥に行くには勿論主人室を通拔けては不都合ですから、別に廊下（「ソ」）がある。此廊下を過れば奥向の中心たるペリスチリウム（「ソ」）に出る。主人室は此方に觀音開の戸を備へて居つたと見え、入口の兩側に蝶番の有つた跡、及び下の眞中の所に止棒を差込む穴があります。アトリウムの方には斯樣な跡が無いから、多分幕を以て塞いであつたものでせう。ペリスチリウムの中央に七本のドリヤ式の柱（臺石なく縱に淺き溝あり、上より下へ漸々太くなる圓柱なり）が竝んで、四角なる場所を圍んで居る。此四角なる場所一杯に大きな高き臺「ネ」がある。其側面及び柱の下部は、一樣に赤色に塗つてある。彼の臺の上は小き庭の樣に土が入れてあり、之に色々の草花を植ゑたものと見える。夫れで此植物を小兒抔の觸れぬ爲め柱の間に棒が通して垣の樣に作つてあります。而して此所は植物の外に龜なぞを飼養せりと見え、掘出した時、龜甲が發見されました。又外に數個の土燒の蛙がありましたれど、之は多分屋根の樋の流口に用ひたもので、雨の時は蛙の口から雨水が下の小庭に落ちる樣にしたものと見えます。夫から、左の奥の隅にある柱の傍に、小き宮「ナ」があり、之に神像が安置してある。又其突當りの壁は一面天空の色に塗つてあり、唯其下の方に樹木の頂上が畫かれてある。之は此向ふが何處までも廣く開いて居て、而も此家より低くなつて居る樣に想像させる趣向であります。

ペリスチリウムの周圍にある室は皆家族の用に供せるものにて「ヲ」「タ」は細君、子息、或は娘なぞの居室でありませう。「レ」は窓がありて壁に書物が畫いてあるから、圖書室と假稱せられて居りますが、やはり「ヲ」「タ」の類でありませう。凡て此等の室の入口の戸は觀音開であつた證跡がある。「カ」は臺所にて、其隣の方形の大室「ヨ」は食室らしく、方凡そ三間二尺、卽ち凡そ二十二疊敷位の廣さで、壁も餘程高くペリスチリウムよりも高き所に窓があつたものと見えます。床の寄石畫及び壁畫は何れも美を盡して居ります。

家族室

貸店

九

此外富人の家にて、之より大きく隨分込入りたるもの少からねど、大體の仕組は之に異なりません。唯ペリスチリウムの奥に更に若干室があり、其奥に或は更に庭があるとか、ペリスチリウムが二つあるとか、噴水器や像なぞが多く備へてあるとか、側面一部か或は入口を除き、周圍が凡て貸店になつて居るとか、いふ類の差異があるのであります。但此貸店は、母家とは壁に依り全く離隔されて居ります。して或所には二階もあつたことは階段に依つて分ります。此住家の一部若くは一階を店に貸渡すことは、現今のイタリヤ諸市に於ても實際行はれて居る習慣で、堂々たる貴族の家の一階を仕切りて、多くの貸店となし、主人一家は二階以上に住居して居るのは、少しも珍らしくありません。

ポンペイの家には、二階が家の全部に有得ぬとは、ペリスチリウム及びアトリウムの天窓を要するに依り分ります。二階は多くの家に發見され、三階のある家さへ稀にありますが、此等は皆壞れて、唯階段に依り其存在を證するのでありますが、唯一軒だけ二階の良く保存されたのがありました。此家は種々の確證に依り最も卑む可き營業の家であることが知れて居ますが、

ローマの家の二階の構造を知るには面白くあります。二階の兩側には一階よりも外に突出した縁側がありまして、之は我國の縁側の如く全く開いては居ませんで、大部は壁にて隱され所所に窓がありて、之より外を見下す樣になつて居る。此風の縁側丈は、此家に遠からぬ一の家にも保存されてあります。此突出したる縁側を保存せるは、全く發掘長フィオレリ氏が發掘の際に非常に苦心して、燒けて灰となりたる材木の代りに、新材木を入れて漸く其位置を保つ樣にしたのであります。先づ之れで、私人の家の構造は、一通述べましたから、之より、專ら舊ポンペイ人の人事に關したる事を述べることと致しませう。

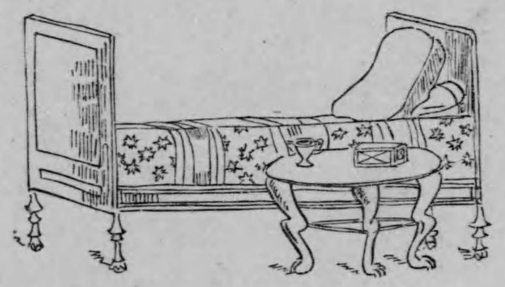
一〇

ポンペイの城壁、往來、水道、下水、家屋等に付き述べましたから、之よりポンペイ市民が如何なる生活をなして居つたかといふ事に付き、簡單に御話を致しませう。ローマ人は昔は極めて質朴なる風を守つて居りましたが、追々諸國を征伏し、ポンペイ市埋沒の頃は、既に西洋の大半を從へましたが、斯く盛大に爲るに從ひ漸々質素の風を失ひ、非常に奢侈に流れて來ました。夫故ポンペイにて掘出された富人の家に保存されて殘つた道具や、壁畫に見る可き物と、書

物にある事とを引較べて調べて見ると、當時の市民が中々立派な生活を致して居つた事が分ります。

第一に、室内の道具より初めませう。椅子の最も簡單なるは、方形或は長方形の板に低き四本足のあるもので、第二十五圖の人物が腰掛居るもので、夫れから少し進んだのは、腰を掛ける所に蒲團樣のものが附いて居る（第二十四圖）。之より進むと、彎曲したる背部のある椅子があり、其背部の所に同じく蒲團樣のものが附いて居り、且腰を掛ける所が深くあり、又兩手を置く部が左右に備つて居るから、甚だ心地好いものです。之は以前には婦人の外は用ひなかつたなれ共、後には男子も用ひる樣に成行きました。之は現今の安樂椅子の如く椅子と臥床との中間にあるもので御座ります。

第十九圖

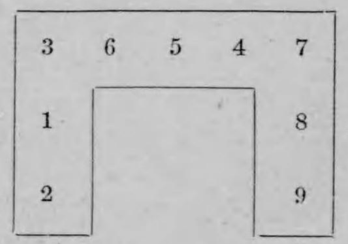


椅子

眞の臥床は第十九圖に示す如く現今ヨーロッパ諸國の上等臥床と同じ形であります。此圖は第十六圖に表面圖を示した家の壁畫の中にあるのですが、蒲團の色は白色にて、之に紫の線と金色の星があり、枕は紫色に彩色してあります。

又第二十圖にあるは、トリクリニウムとて饗應の時食卓を圍んで置く、コの字形の共同臥床的椅子でありまして、主客は之に半臥して食します。隨分贅澤な不行儀な話であります。之もローマが盛大になるに從つて起つて來たので、初から有つた風ではありません。圖中「1」は主人の座、「2」は主婦の座、「4」は上客の座、其他は外の客の座で、通常コの字形の各邊に三人宛都合九人坐する樣になつて居ます。

第二十圖



臥床

共同臥床

椅子は普通木製であるが、銅或は象牙のも間々あります、木材も隨分高價のものがあり、金銀等を嵌め又美麗なる彫刻を施してある。此外室内裝飾品には机、卓、置臺、釣燈、置燈、燭臺、飾瓶、繪畫、彫像、書物、卷物、其他數多くあります、飾瓶は、盃の如きあり、德利の如

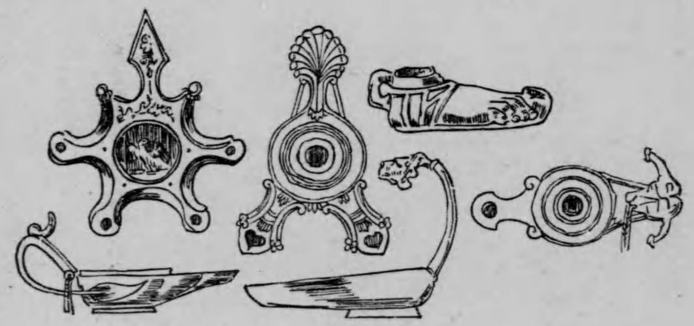
室内裝飾器

燈器

第二十一圖

きあり、種々の形を備へて居り、金屬製の瓶は、彫刻上特に見るべきもの少からず、陶製のものは、柿色地にて、眞黑の線と人物畫があつて、當に考古學上の參考となるのみならず、古雅掬すべしといふので、現今でも人が之れを珍重します。机卓は、貴き木材に金銀鼈甲象牙等を嵌込みたるあり、釣燈、臺燈、燭臺は大抵銅製にて、第二十一圖に示してあります。又手に持運ぶ燈は、銅製、或は土燒にて、第二十二圖に示してあります。ローマ人は燈火の事は進んで居りませんで、ホヤや其上の蓋笠を用ひず。從つて燈火の煤が、天井及壁抔に附著するので、日々掃除しなければなりません。而して油は、勿論植物性のものであり、之に麻にて作りたる燈心

第二十二圖



を入れたるなれば、其現今の石油ランプ抔に比して暗きこと勿論である。夫故置燈にも、數個の燈を附けたのがあります。手に持運ぶ燈は土製或は銅製にて、通常中部圓形にて、其中央に油を入れる口があり、燈心口及び柄が中部の前後に突出して居りますが、其外に色々の形もある。

一二

古代の彫刻の事は隨分ポンペイの外にも遺物があり、特にローマ人の師なるギリシャ人の彫刻に至つては、とても現今に於て企て及び難き技倆を有したること、人の良く知る所である故、今此所で彫刻の話をしたら限りが無い。唯繪畫の事に付き一言して置きます。繪畫は彫刻物と異なり、保存の困難なものであるから、ポンペイの

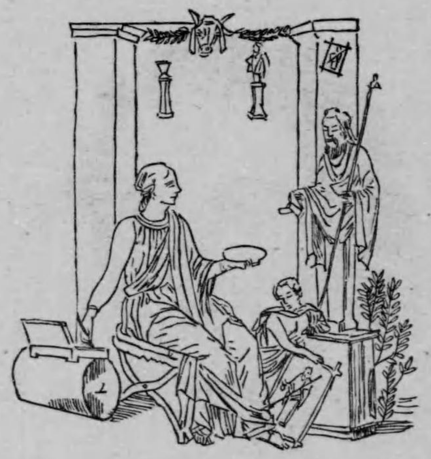
繪畫

壁畫は、古代の繪畫の唯一の遺物であります。而して之は室内裝飾の一種として、職工の手に成つたものであるから、立派な畫工の作と一には出來ぬ筈なれ共、之すら中には感服に堪へぬものがあります。譬へば、第二十三圖に出したのは前に說明した悲劇詩人の家の壁畫にて、トロイ征伐のギリシヤの勇士アッキレスが、己が擒にして愛し居たる美人ブリセイスを、大將アガメムノンの爲めに强ひて奪去らるゝ圖の中にあるアッキレスの頭部の寫です。勿論原圖の寫の不充分なる複寫なれば、到底之にて原圖の勝れた所を知ることは出來ないが、彼の無念の眼を以て睨み居る鋭き樣子が幾分か分れば私は滿足です。

第二十三圖

此所に注意して置きますは、當時彫刻の方が進歩が著しかつた爲め、繪畫も自ら彫刻の風に化せられたものと見え、此圖も何處となく堅い彫刻然たる所があります。尙第二十四圖、第二十五圖の壁畫に、實際當時の畫工が寫生の狀を示します。第二十四圖は一の若き婦人が慰に畫を稽古でもするといふ風で、老人の彫刻半身像を前に置き之を寫し了り、之より彩色する考にや、箱の中の繪具に筆を染め、左の手に持てる圓形の試色板にて、色合を試みんとして居る所です。

第二十四圖



夫から第二十五圖は、一の滑稽畫にて、小人國に於ける畫工の臨畫室と見え、中央に低き椅子に腰掛け尻を顯にした畫工は、己と對坐せる貴族らしき鼻高の依賴主の肖像を、現今の洋畫家の用ひると同樣なる臺に載せた紙の上に畫いて居ります。其傍に大きな繪具臺と筆を洗ふ壺があります。依賴者の後にある素裸の男は畫工の弟子でせう。依賴人か畫工自身かの像を私かに畫いて居る。右の隅にある二人の一人は繪具を大きな鍋に入れ攪交せて居る。左の隅に談話して居るのは依賴人の家來にて、畫を評するもの哉。此等の壁畫に依て考ふる時は、ローマ人の繪畫は、現今の所謂水彩畫とい

第二十五圖

嵌石細工

ふ類のもので、其道具も略相似て居るものと見えます。

一三

繪畫の序に彼の床に布つめたる嵌石細工の事を一寸申しませう。之は現今でもイタリヤの名物となり、ヴェニス、フローレンス等には盛んに行はれて居ます。即ち種々の色の石或は練物の小片を嵌合せて、一幅の繪畫或は美麗なる模樣を顯します。悲劇詩人の家の入口の犬などは、中々生けるが如く出來て居る。又或家の床にあつた有名なるイッス戰爭の嵌石細工は、現今ナポリの博物館に保存してありますが、長三間幅一間半にて、ポンペイの嵌石細工中最美麗なるものであります。即ちアレクサンドル大王がペルシヤの大軍を破り、敵王ダリウスを擒にせんと、自ら眞先に馬を躍らせ、方にダリウス王の戰車に近きたる時、一人のペルシヤ貴族は、主の大事と其間に立塞がるを、アレクサンドルは物々しやと槍にて唯一突に刺貫き、遁ぐる敵王をキット睨みたる所にて、アレクサンドルの意氣込、忠死せるペルシヤ貴族の苦痛、ダリウスの恐怖等の狀等を巧に寫出し、又人馬甲冑の微に至る迄、實に立派な油畫を見ると同樣であります。

書籍

文房具

一四

次に書物に付き御話しませう。古人は、出版の事を知りません。夫故凡て書物は寫したものである。從つて極めて高價でありました。然るにローマが盛大に至るに及んで、奴隷が殖えて參つて、奴隷に學問の有る者が多く出來、書物も之に寫させ、書店主人は多數の奴隷を養ひ、手廣く複寫を行ひ、之を賣捌きたる故、書物の價格大に下りました。

寫本はパピルスとて、エジプトに生ずる一種の蘆の皮より製したる紙（現今英語に紙をペーパー、獨語にパピエル抔いふは、之より來る）にて、インキは煤とゴムを以て造りたる墨汁にて、筆は蘆枝にて作り、一端を尖らせたものであります。夫から寫本は蘆枝の軸を中心とし卷物になつて居り、赤きインキにて書名卷數抔を書いた附札がありまして、數卷を一の圓筒に納めて持運に便にします。通常紙の一面のみに書きます故、修學兒童が稽古をするには、反古の

蠟引書板

炭と化せる書板

裏に書かせます。又重要なる事柄を記すにはペルガメントとて革製の紙を用ひます。

又パピルスの卷物と併行して廣く用ひられ、特に書狀には必ず用ひられるのは、タブルムというて、松板の一面は平に、一面には緣があつて、箱の蓋の如き形をなし、之に薄く蠟を引きたるもので御座ります。之にスチルスと名くる金屬或は象牙の筆にて字を彫付けます。スチルスの一端は尖りて書くに用ひ、一端は丸く或は篦の形になりて、誤字を消し或は全體を削つて、平らかにするに用ひる。然し此文事に用ふる道具も時としては武器となります。彼のローマ共和政治時代の末期、ブルッス、カッシウスの兩人が主謀となり、千古の英雄ケーザルを議事堂にて刺殺した時、事不意に出で、ケーザルは身に寸鐵を帶びざれば、暫くはスチルスを以て防禦したといふ事で御座ります。

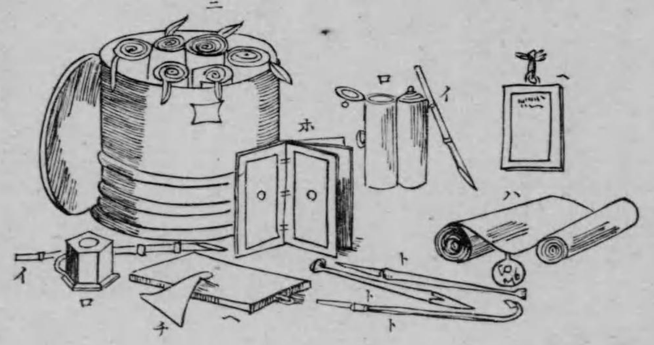
彼の蓋の如きタブルムは、幾個も絡合して書物の如くにして保存し、或は書狀として送ります。千八百七十五年に、ポンペイの或家にて、三百餘のタブルムの入つてある箱が發見されました。此箱はすつかり炭と變じて、しかも舊形を存して居り、其内にあつたタブルムの蠟は解けたれ共、筆の尖端が下の板面に跡を殘したので、書いてある事が讀得られます。而して之は銀行家に屬する家なりしと見え、證文、受取書、請負書の類であることが知れました。又ポンペ

炭と化せられた卷物

イと同時に埋沒せられたるヘラクラネウムに發見された一圖書館に、前へ述べたパピルスの卷物が千七百卷餘ありまして、炭となりて居れ共字の有つた所は少し色が變つて居るから讀めます。夫で此炭になつた卷物の卷込められたる部を順次に開き、少しづつ剝取る機械が發明されて卷中に有る文章も讀む事が出來る樣になりました。全體藏書といふ事は當時盛に行はれ、富人抔は唯名聞の爲め讀みもせぬ卷物を澤山に集めて、裝飾の一種としました故、當時の文章家セネカは之を嘲りて、『近頃の藏書家は數千部の書冊中に在りて欠伸す』と申しました。

第二圖

「イ」「イ」……蘆枝筆
「ロ」「ロ」……墨汁壺
「ハ」…パピルスの卷物
「ニ」同上を入れたる筒
「ヘ」「ヘ」……タブルム
「ホ」…同上を絡ちたる書物
「ト」「ト」「ト」…スチルス
「チ」…タブルムの上を削り平にする具



一五

室内裝飾の話を終る前に、一寸溫室法の事を申しませう。ポンペイの家々には、アトリウム及びペリスチリウムに大きな天窓がありますから、空氣の流通には宜いが、冬季はさぞ寒からうと思召すでせうが、ポンペイはイタリヤの中でも南部の方だから餘程暖かく、冬季とても、天氣の好き日なれば、室内よりは室外の方が溫い位である。夫故日當りさへ良ければ天窓があつても左程に寒くない。然し曇天或は雨降の時抔は、アトリウム、ペリスチリウムは不愉快に相違ない。其他の室でも隨分寒いであらう。斯う云ふ時用ひる爲めと見え、掘出された道具の中に煖爐の如きものが色々御座る。尤も煙突がないから、幾分か空氣を惡くするなれ共、現今の歐洲の家に比すれば空氣の流通が宜いから、之も大して不都合でない。且持運びが便利である。又稀には家の床下にて溫めたる空氣を、室内に通ずる工夫が出來て居ります。

前に申したトリクリニウムと云ふ臥床的コ字形長椅子は室内の溫き方角の所にある。之は冬季の便を計つてあるのであるが、夏は涼しき所に之を置くことがある。譬へば第十六圖の「チ」は、中庭の一隅に備附になつて居るトリクリニウムで、其處丈は上に屋根があつて、一方は開

いて居り、垣根がありて、饗應中外來人に見えぬ樣にしてある。

一六

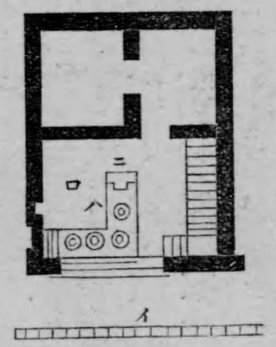
偖此饗應の食卓に登る食物は何かといふと、昔人民が質朴であつた頃は、蕎麥の類より製した粉の粥の如き物に、野菜菓物等が重なる常食となつて居つたが、ポンペイ埋沒の頃は奢侈の風が盛んにて、特に食物には餘程贅澤になつて居りました。

ローマ人の最も好んだ肉は猪肉にて、丸の儘食卓に上せます。食物通は、其味に依り猪の產地を判別することが出來たと申します。兎肉鹿肉之に次ぎ、牛羊豚等の肉も勿論用ひられました。鳥肉は孔雀を最上とし、山鷄、鳩之に次ぎ、鴨、家鴨、鷄等も食します。水產物の最上は鰈、牡蠣、蝦であり、其他の魚貝類も種々料理されます。ポンペイの壁畫には、種々の盛饌の併べたのがありますが、調理した物の上に、多くは何にて製したるか綠色の汁がかけてあります。此外料理したる或は生の儘の野菜、果物があり、又干したる果物もある。果物、種物はポンペイにて炭となりて掘出されましたが、其形が少しも原物と異なつて居らぬから、ローマ人が如何なる物を食したか、如何なる度まで培養の效を及ぼしたかが知れます。又麵麭やカステ

飲食店

ラ的菓子が、同じく炭となりて有りました。麵麭は（パンといふ語はローマ語パニスより來る）圓形にて可なり大きく、麵麭の燒印の跡がありく〳〵と顯れて居る。又カステラ的菓子を製するに用ひたらしき種々の形の金屬の模樣があります。

第二十七圖



此外食卓に上る物は數へ難けれ共種々の鳥卵、菌類、牛乳、乾酪、鹽家、腸詰等あり、特に腸詰は當時盛んに食したもので、往來を大聲で溫い腸詰を賣歩行く者さへあつたといふ事であります。而して之と似た事でポンペイには煮込屋と思はれる店がある。第二十七圖は、其平面圖にて第二十八圖は、其中に發見したる品物道具等より考へて、當時の樣を想像した圖であります。

即ち第二十七圖「イ」の所は歩道の端であるが、此所に穴がありて動物抔を繋り置くに用ひたらしく、「ロ」は店にて、「ハ」は、鈎の手に成りて居る高き賣買臺で、臺には四個の圓き穴があり、此内に品物が入れてある。其左手の線は段になりたる棚にて、道具を置く所なり。賣買臺の末端「ニ」に竈があり、此上に大鍋を置き常に或食物を溫めたるもの〻如し。夫で此店は生及び料理したる食物を賣り、行人は一寸立寄りて立食をしたのであります。

第二十八圖

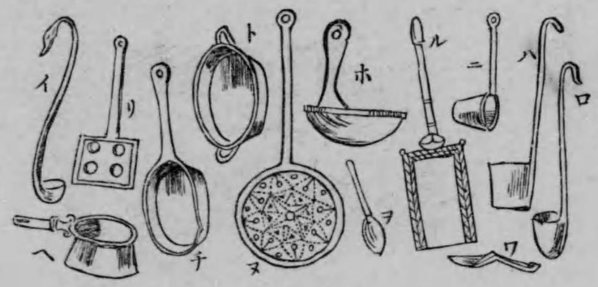
食物に奢りたるローマ人は、勿論酒にも中々奢つたもので、諸國から色々の銘酒を取寄せて飲みました。通常酒に水を割つて飲みます。水を割らずに飲むは下等として卑めて居りました。夫れで、ポンペイの市中には、酒店が少なからずありまして、酒は第八圖に示す如き革袋に盛りて、馬力にて輸送し、之を第十一圖に示す如き瓶に入れて貯へ置きます。酒屋は多く料理を兼ね、餘り上等なものはなく、隨分賭博其外不品行者の巣窟でありました。然し當時は上等社會でも、隨分長夜の宴をなし、主客共に醉仆れる樣な見ともなき事を致しました。「キケロ」がプレートル官ヴェレスの宴を記したるを讀むに、恰かも激戰後の有樣を見るが如し。曰く

『重手ヲ負ヒシガ如ク戰鬪力ヲ失ヒタル者ノ運去ラル、アレバ、前後モ知ラズ其場ニ仆臥スモアリ、實ニブレートルノ宴會ト云ハンヨリハ、カンネーノ戰爭（カルタゴノ大將ハンニバル大ニローマ軍ヲ破リシ激戰ナリ、）ト云ハン方穩當ナルガ如シ。』

と申して居ります。古今東西酒の爲めに正氣を失ふ狀は一であります。穴賢々々。

宴會でない常食には、ローマ人も勿論左程に飲食は致しません。朝食は、人々の目の醒むる時間に依り遲速がある。朝食はパンに鹽を附けて食し、牛乳、乾酪、干葡萄等を補食とします。中食は、ローマの六ッ時、卽ち正午頃にて、一二種の溫き食或は冷食を出します。夫から重なる食は、晩食にて九ッ時卽ち正午と日沒の正中の時に致しまして、最も御馳走を食します。

第二十九圖

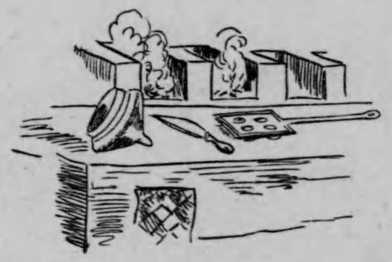


宴會の醜態

常食の時刻

偖食事を終れば、臺所に廻つて見ませう。第二十九圖は、臺所道具の圖であります。圖中「イ」「ロ」「ハ」は深き桶より酒、或は水を掬ふ柄杓で、「ニ」「ホ」は水或は汁を掬ふ杓子である。「ヘ」は柄の附きたる鍋、「ト」は日本の樣な鍋、「チ」はフライ抔を燒く鍋なるべし。「リ」は燒卵を作るもの、「ヌ」は漉篩、「ル」は火斗、「ヲ」「ワ」は匕にて、皆ポンペイより出でたるものです。ローマ人は手を以て食物を撮んで口に入れたと傳へてありますが、此「ワ」の尖端が肉叉の樣になつて居るを見れば、少くとも此時代には肉叉を用ひたと申しても宜いでありませう。夫からポンペイの竈を見ますと、（第三十圖）餘程面白い。チョード日本の舊來の土竈に能く似て居る。卽ち二ッ三ッ、或は其の以上の火口が前に併んで居て、而して烟突がない。夫故烟たい事は日本竈同樣である。一體ポンペイには、斯樣に現今の西洋諸國に無くて、反て日本と

第三十圖



庖廚

同じ物が少からずあるので、餘程面白く感じます。

一八

次に衣服に付いて申しませう。イタリヤは、數〻云ふ如く暖き所であり、且古代の人民は時候の變化に對し、皮膚を固める風があり、勞働者抔は、殆んど裸體にて働いた程なれば、餘り身體に密接した衣服は用ひられませんでした。

衣服

第三十一圖

男子の上衣

先づ男子の服は、之を上衣と下衣に區別が出來ます。上衣はトーガと名け、昔は之を一枚著た限でありましたが、後にはトーガは上衣となり、ローマ市民たる資格を顯す禮服の如くなり、市民權を得ざる者はトーガを著ることが出來ませんでした。トーガは、通常毛織の白き一枚の切にて、長さ一丈三尺餘、幅八尺餘にて、之を著るには、先其一端を左肩に引掛け、之より體の前面を斜に右の脇下を過ぎて、背後に廻し、再び左肩を越えて右脇の所に挿入れる。

男子の下衣

第三十二圖

故に右の手は、全く自由にて、左の手はトーガの下に隱れる。又胸の所に日本服の懷の如きものが出來、之へ物を挿んで置きます。後世奢侈の風行はるゝに及び、トーガに絹を用ひ、種々の美しき色に染めたこともあります。下衣はチユニカとて、長きシャツの如きものにて、裾は膝に達し、短き筒袖は臂の上にしか及びません。而して胴の所には帶を締めます。寒い時は、此チユニカを、幾枚も重ねること、我日本の衣服の如くで御座ります。此外ペヌラとて袖のな

き膝の邊まである廻合羽の樣なものもありました。此等男子の服裝に付きては、第三十一圖及び第二十四圖、二十五圖、二十八圖を參考し給へ。

女子の服裝はやはり上衣と下衣とに區別されます。下衣は男子のと同じくチユニカといひ、其形も同じで、唯筒袖がなく、手の出る所に穴があり、又體形を良く見せる爲め革製の甕が胸の所と胴の所に入れてあります。現今の西洋婦人のコルセットに相當するものですが、コルセットの樣に、體を締付けて、健康を害する樣なことはありません。夫から、上衣はストラと名け形はチユニカの長い樣なもので、殆んど足を掩ひ、筒袖はないこともあり、有つても臂の上にしか達せず。又ストラは襞が多く取つてありまして、仲々優美に見えます。外出の時は、此上にパラと名くる外套を著ます。パラは、トーガに似て、之を恰好に身體へ卷付けるのであります。第二十四圖、二十八圖、及第三十二圖、三十四圖を見れば、以上の話が明になりますでせう。

第三十三圖

前云ふ通り奢侈の風が盛んになつて來てから、絹も用ひる樣になりましたが、通常用ひる服は大抵毛織でありますから、絶えず洗濯を要すること勿論であります。夫れでポンペイにて例の「悲劇詩人の家」の隣に、大きな洗濯屋が發見されました。此家には廣きペリスチリウムがあつて、其奥の方に四個の大なる水槽が並んで、順次に低くなり、且つ互に通ずる穴があるので、水が上の槽より順次下の槽に流落る樣になつて居る。之に依て衣服を白くしたものでせう。ペリスチリウムの右方に大きな圓天井の室があり。此中に洗濯に用ひる大きな盥があり、又洗濯物を棒にて打く爲めに石卓があり、且洗粉が澤山に發見された所より考ふれば、重なる洗濯室であつた事が分ります。尙ほ第三十三圖及び三十四圖に示す壁畫に依り洗濯の仕方が明らかになります。卽ち第三十三圖には、一人

第三十四圖

の職人は、擂盆形の盥の中に立ち、兩手を柱に掛けて、盥中の洗濯物を踏んで居ると、他の二人の職人は一通踏終つて、洗濯物を絞つて居ります。

第三十四圖は一人が既に洗濯を終りたる衣服を竿に掛け、刷毛にて擦つて居り、一人は手籠を荷つて、片手にバケツの如き物を持つて急いで行く。此バケツの中にあるのは、多分衣服を白くする爲めの藥などでありませう。夫から二人の婦人は、既に出來上つた物を檢査して居るのでありませう。又此外一の壁畫に依れば、洗濯終つた物の皺を延す締板の如きものあり、螺釘にて締めるのであります。

二〇

被物

ローマ人は通常外出するに帽を被りませんでしたが、暖き日に遠足し、或は長く戸外に勞働する時抔は、烏帽子形の帽或は陣笠に似て顎の下にて結ぶ樣になりたる紐の付き居るもの、或は男の頭巾の形にて、尖つた所が高くなり居る被り物を被りました。女には別に帽の如きものはありませんでしたが、外套を我被衣の如く頭より被り、或は長き紗を頭より垂し、或は網或は布にて頭を包みました。（第三十四圖）

束髪の種類

髪飾具

男子は、頭髪を燒鏝の如き物にて、小波の集の樣な形に縮らせ、又毛を多く見せ、或は兀を隱す爲め、入毛を致しました。尤も兀頭に唯墨で毛を書いて置くこともありました。男子既に斯くの如くなれば、婦人が頭髪の事に心を用ひたことは察せられます。彼等は、髪を入れて色々の束髪を致しました。束髪の種類の枚擧するに暇あらざることは、詩人オヴィヂウスの語を借りて云へば、『尙ほ枝多き樫木の實、ヒブラの蜂、アルプス山中の野獸等の數へ難きが如し』と申します。第三十五圖に其三種丈を示します。又三十六圖には、頭の飾となる物の種類を出しました。圖中『ト』は櫛です。但し櫛は毛を櫛るに用ひて、飾に簪すことはなかつたと見えます。「イ」「ロ」「ハ」「ニ」「ホ」「ヘ」は象牙にて作つた簪にて、「チ」は鬢油壺、「リ」「ヌ」は鏡なり。此外佳人の裝飾品たる指環、腕環、頸環等は、數多くポンペイより掘出され、其形狀は仲々申し竭されませんから略して置きます。

第三十五圖

中には金銀珠玉等にて最も高價なもの、細工の極めて精巧なものも多くあります。

履物

履物は男女共普通革にて作りたる我國の草履の如きものを用ひます、第三十七圖の「イ」「ロ」「ハ」「ニ」「ホ」の如し。然し禮式の時は、「ヘ」「ト」の樣な靴を穿き、又獵なぞに行く時は、「チ」の長き長靴を用ひます。此所に面白い事は、ローマ人は食卓に就く時は必ず履物を脱ぎました。夫れで履物を脱ぐといふ事は、食事をするといふと、殆んど同意義になつて居ました。

二

浴場

さて之でポンペイ人の當時の衣食住の有樣は、一通追想が出來ましたらう。衣食住に次ぎて大切なるは、入浴の事の御座ります。ポンペイの家には浴室らしきもののあるものもありますが、多くの人は公の浴場に行きましたものと見える。一體ローマの浴場は仲々發達して居りまして、現今歐洲各國の贅澤な浴場は、卽ち之に倣つたもので、ローマ湯と申します。ローマの浴場は、初は男女入込でありましたが、之は風紀上に宜くないといふので、後には男湯、女湯と全く隔離して、唯火燒場丈が雙力に通じて居る樣に、法律で定められました。

浴場は冷浴室、溫浴室、蒸氣室等に分れ、鐵管を以て冷水、熱湯、若くは蒸氣を送り、又床及び壁の或部分は二重になり居りて、其開閉に依り室の溫度を加減する樣にしてあります。又脫衣室には衣服を脫いで引掛ける木釘があり、又壁に凹んだる棚の如き所が並んで居て、之へ衣服を入れるのもある、卽ち我市中の昔風の洗湯などにある樣な風である。浴客は富者なれば奴隸を伴ひ行きますが、浴場の方にも多の三助が居りて、客の垢を擦り、其體に油を塗り、香水を掛け、其外萬事世話をする。ローマ人は浴後油を體に塗りますが、之は大に健康を助くるものとして信じられて居りました。夫から公の浴場には、運動場、談話室、其外種々の娛樂が出來、殆んど倶樂部の如き性質を帶びて居りました。

第三十六圖

次にポンペイ人は如何なる娛樂をなしたかといふことを極めて簡單に御話しませう。彼等も音樂、舞踏、角力、擊劍、競走を致しましたが、角力、擊劍、競走の如き事は寧ろ少年の敎育に屬し、ポンペイ埋沒の頃は、人心柔弱に傾き、之を娛樂として自ら行ふより、見る方を樂としました。而して競馬、競走の如きも斯る觀物として盛んに行はれました。競車は二輪にて後の方開き、乘者は其內に立ちて數頭の馬を御するなり。又演劇は盛んに行は

れましたが、色々の假面を被り「セリフ」を謠ふのであるから、先づ能の樣なものです。ポンペイ壁畫には、演劇の圖竝に種々の假面の圖があります。第三十八圖には、卽ち四種の假面を示します。偖劇場は、半月形にて、後へ順々に高く並び居る觀客席と、之に對する長方形の舞臺と、其後の樂屋より成り、囃方の席は舞臺と觀客席の間の最も低き半月形の所にある。

此外手品師、輕業師等が驚くべき技術を知つて居つた。中にも女の足藝には、餘程面白いのがある。譬へば鯱立をしながら、足にて弓を引き矢を的に中て、或は一足に柄杓を持ち、深い酒瓶中の酒を酌んで、他の一足に持てる盃中に注入れる抔の曲藝を致しました。夫から此外道德上卑むべき觀物は、捕虜なぞをして、各武器を取りて互に搭闘せしめ、或は獅虎猪牛の如き猛獸と戰はしめ、或は猛獸と猛獸と戰はしめて、其搏擊、馳突、流血淋漓の活地獄を顯出するを見て悅ぶに至つては、ローマ人民の性質の如何に野蠻殘忍なりしかを知るに足ります。而して此等の技を行ふ所は、アンフィテアトルムとて、劇場を二つ合せたる如く、卽ち圓形の順次後の方へ高くなる觀客席を以て圍み、中央の圓き場所に於て搭闘を爲ます。此外娛樂の事は尙未だ竭きませんが、餘り長くなるから、他日題を變へて別に述ぶることと致します。

第三十八圖

演劇

手品、輕業

闘者格闘

二二

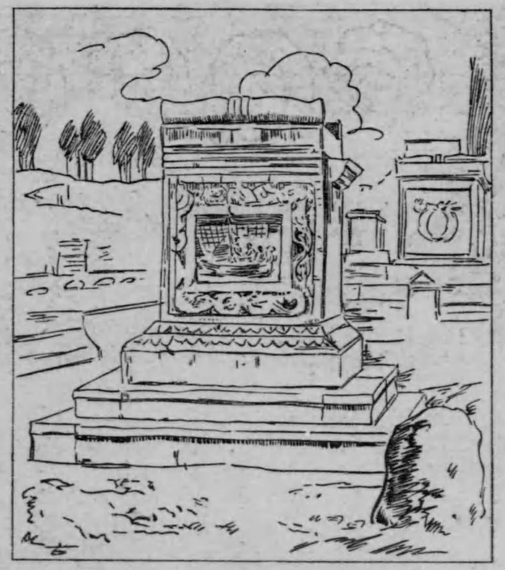
墓地

第三十八圖

最後に墓地に付いて、ザット御話します。ローマ人は土葬火葬共に用ひましたが、ポンペイ埋沒の頃は、火葬が專ら行はれて居ました。夫で墓地は市の城門外にあります。之はポンペイに限らず、凡てローマの諸市には、法律に依て定めたことであります。ローマ人は、家族制度が社會の根本に成つて居る故、家族間の關係が深くして、且祖先を尊ぶ風のあることは、現今の西洋よりは反つて日本に大に似て居る。又死者に關する考も大に我と似て居る。夫で逮夜、初七日、一週忌等に類したる祭があつて、親族朋友を會し饗應し、又家の內にも祖先の像を備へて之を祭り、戰爭の前に昔の勇者を祭り、又難船

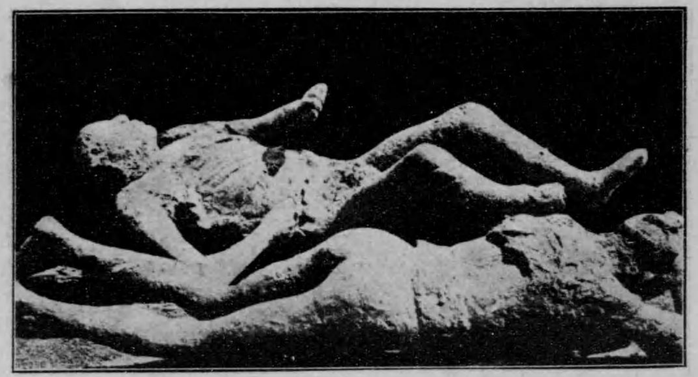
或は戰死したる人にて其屍を得ることの出來ぬ場合にても、其親族は墓を建て之を祭ります。畢竟彼等は死者は幽冥界に行き切りでなく、其魂魄は絶えず此世に往來し、其子孫の行爲を見て喜憂して居ると信じて居るのである。偖墓は通常尤も人目に掛るべき路傍にあります。故に碑文に『旅人止れ、之に眠れるは、云々』といふ樣な風に書いてある。現今西洋の碑文にも之に類したるものあるは、無暗にローマの眞似をして、墓地が昔の如く路傍になきこと抔に注意せぬからである。偖墓の極簡單なものは、本邦の墓の樣に、四角の臺石の上に方柱或は圓柱形の碑石が立つて居るのであり、之より込入りたるは、臺石に當る所が大きな室の樣になり、室の壁に凹んだ

第三十九圖



墳墓の構造

第四十圖



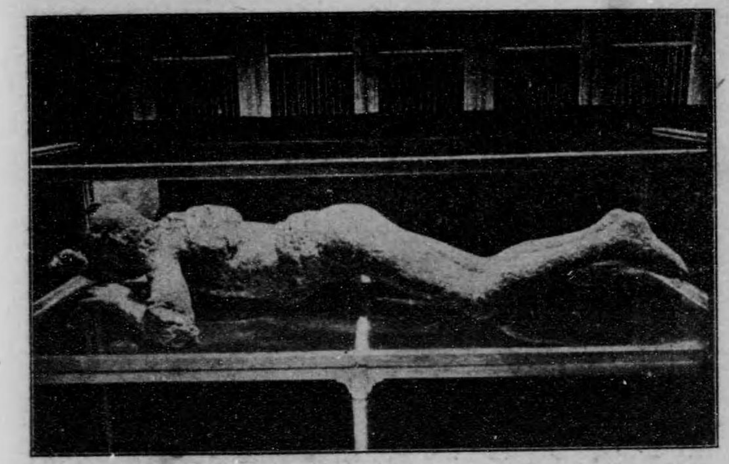
埋沒の際遭難せるポンペイ市民

所があつて、之に骨壺が入れてある。碑石には、死者の德行を記した碑文及び浮彫畫があり、其上に其人の像或は其他の彫刻がある。或は屋根及び柱ある小き神殿の如く作りたるもあります。而して墓には一基一人の遺骸丈を納むるもあり、或は其中に先祖より代々の骨壺が入れてあるのもあります。第三十九圖はポンペイの墓地の光景であります。

偖此等の墓の内に葬られたる人々は、皆其子孫より祭を受けて居たものですが、之と同じく血食する能はざりしは、ポンペイと共に灰の下に埋沒せられた人々である、彼の大災の時、人民の大半は逃出すことを得ましたが、火山に接近せる方に住し、逃るゝ暇なかりし人、金銀財寶を持出さうとして逃後れた人、不思議の天災に狼狽し當もなく唯物陰に這込んで居

石膏を以つて其形を作る

第四十一圖

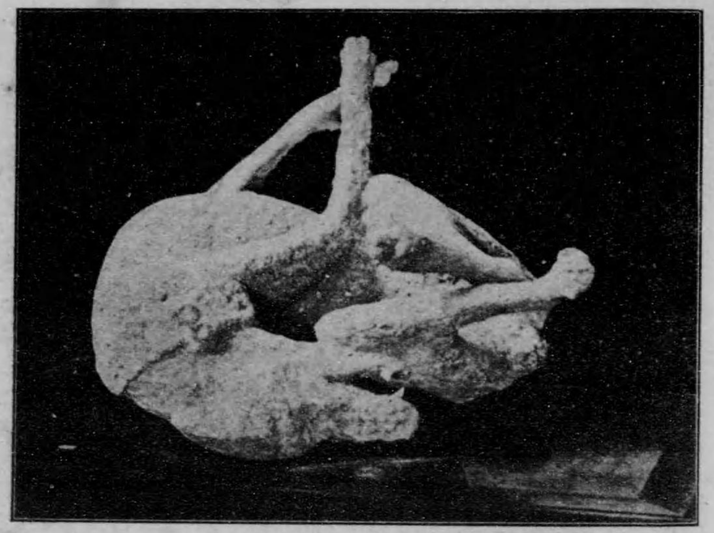


た人、病氣の爲め動けなかつた人、或は親族朋友の病人を見捨てるに忍びずして止つて居た人、此等の終に絶息して非命を遂げた人は、其數凡そ二千人前後なるべしとの事であります。

偖彼等の骸骨は殘つて居るが、肉質は追々分解して了ひ、周圍の灰が冷えて固りたる故、從つて皮肉のあつた所は空際となつても灰の上に其死せる體の形が印せられた。其所でポンペイ發掘長フィオレリ氏が工夫して、屍の有る所に至れば石膏を注込み、其固まるを待ち、徐々に灰を掘除けば、其人の最期の有樣があり〳〵と顯れます。第四十圖は斯くして作られた模形にて、片手に錢囊をしつかり

人畜最期の光景見るが如し

第四十二圖



抑へ、片手は虚空を掴んで居り、其容貌も如何にも苦痛を顯して居る。思ふに此の人は餘り慾に掛つて、終に死恥を數千年の後に流したのであらう。第四十一圖は婦人にて指に指環を嵌めて居る。之はもはや叶はぬ所と覺悟をして臥したものと見え、其容貌も優しく良き臨終を示します。又第四十二圖は犬の屍の模形にて、體を左右に捻り七顛八倒の苦を顯して居る。此外財寶及び多くの鍵を大切さうに持ちて倒れたる人あれば、窖内に逃込み絶息せる美人小兒あり、實に當時の有樣を想像すれば、寒からずして肌に粟を生じます。

此外ポンペイに關し、面白き事實は頗る多くあれども、此所には唯其一斑を述べしのみ。拙き筆に山鳥の尾の長々と竝立てたれば、讀者の退屈さぞかしと思はる。寛裕せられば幸甚で御座います。

大ケーザル

偉人とは何ぞ

ドイツの史家ランケは、その有名な世界歴史に、アレクサンドル大王のことを論じた中に、古來個人の傳記そのものが直ちに世界歴史の一部を形つてゐる人物がある、アレクサンドル大王のごときは正にその人であつて、その傳記を世界史から離すことはできぬ、と言つてゐる。かやうな人物は卽ち謂はゆる偉人である。偉人とは何んぞやといへば、凡そ一國、一國民、乃至國民の集團にしても、ある固定した生活狀態に馴れると、必らず內部に弊害が起つて、少し變つた外來の刺戟にも、もはやこれに抵抗する力がなくなる。早く大變革を行つて國民の生活を一新しなければ、その國民は亡ぶのである。かやうな際に、自ら進んで一大變革を斷行する明察と手腕とを持つてゐる人、卽ち偉人たるに外ならぬのである。而してひとり一國の運命のみではない、人類全體の發展の前途に横はる大問題を解決するのは偉人の使命である。かやうな偉人の中でも、殊に古今東西に亙つて最大なるものを擧ぐれば四人あり。卽ちアレクサンド

ル、ケーザル、ナポレオン一世、而して我明治天皇である。こゝにはケーザルの人物と事業の概括を説く。

ケーザルを生みたる時勢

ケーザルのことを論ずれば、必らず先づケーザルを生んだローマ當時の時勢を説かねばならぬ。

ローマの膨脹

抑もローマはイタリヤの一市より起り、その近隣には、多く勇猛なる種族あり、始めよりしてその存立のためには、隨分劇しい奮鬪をしなければならなかつた。

建國の始めは王政であつたが、それが廢せられて共和政となり、その中少數の家族が閥族を組織して高等官元老院議員等の位置を獨占した。この閥族も始めは剛健の氣象に富み、愛國奉公の念強く、近隣を克服してイタリヤ全國を一統し、なほ進んで地中海沿岸諸國を悉く包括する大版圖を作つた。卽ちローマは始め市府的で、次にイタリヤ的となり、最後に世界的となつたのである。併し乍ら市府的のローマからイタリヤ的のローマへ、イタリヤ的のローマから世界的のローマへと次第に境遇の變化するに從ひ、自らこれに伴ふ組織の變革が必要であつた。

内部の腐敗

然るに閥族は昔日の剛健の氣を失ひ、たゞ權勢利欲をのみ貪つて、内部には始終平民との爭絕えず、同時に外部にはローマ府以外のイタリヤ人が、首府の住民と權力の懸隔餘りに甚だしきに不平を起して、こゝにも紛爭が絕えなかつた。これはイタリヤ的に發展したローマに當然起るべき現象である。

グラックス兄弟

かくの如き時勢の變化に眼を著けて、まづ平民の爲めに權利を主張したのは、紀元前一三三年護民官となつたチベリウス・グラックスで、彼は閥族抑壓、平民權振張のために力を盡したが、時到らずして敗れた。次いでその弟カユス・グラックスも紀元前一二三年護民官となり、兄の志を繼いで、イタリヤ人全體に對し、首府の人民と同等の權利を與へんとしたが、やはりこれも志成らずして反對黨の毒刄に斃れた。

イタリヤ人皆市民權を獲得す

爰に於てイタリヤ人は不平に耐へず、紀元前九一年終にイタリヤ諸種族の大反亂となり、ローマ共和國は根柢から崩潰せられんとする形勢を呈したれば、今はローマ人も詮方なく、翌九〇年終にイタリヤ全國の人民に悉く首府の市民と同樣の權利を與へることにして、この問題は解決した。

併し乍らイタリヤ的ローマの問題はこれで解決したが、更に進んで世界的ローマとなつては、

もはやいかにしても閥族だけの力では背負ひきれぬ。のみならず閥族政治は既に腐敗の極に達して、内に平民を抑壓し、外は屬領諸國に對して惡政を行つてゐる。中央の政府は腐敗し、地方には反亂頻りに起つて、一旦從屬した國も追々獨立の氣勢を示し、世界的ローマ共和國は、未だ根基を固むる遑なくして土崩瓦解せんとする狀態ではつた。爰に於いて今やこの紛々たる形勢の中に生まれて、前途幾多の難問題を解決し、世界的大ローマ國の基礎の上に、統一的文明を弘め、統一的制度を布くには、少數閥族の寡頭政治より一歩を進めて、中央集權的君主制に轉ずる外はないと考へたのがケーザルであつた。當時ケーザルの爲殘した事業は、ローマの帝政時代に及んで益々發展し、其の影響の及ぶところ、中世を通じて更に近世にまで及んだ。ある意味に於いてケーザルは、ヨーロッパ文明の父であるといつても差支へはないのである。

世界的ローマ維持の困難

ケーザルの壯年時代

ケーザル生誕

カユス・ユリウス・ケーザルは、西暦紀元前一〇二年七月十二日に生る。（我開化天皇己卯五六年、漢武帝太初三年に當る）彼の家系は閥族中の名家、その高祖はローマ建國の王ロムルスの子、その又遠祖で昔のトロヤの勇士エネイヤスであると傳へられてゐる。それゆゑケーザルの一族は多く閥族黨であるが、彼の伯母の夫のマリウスが平民黨の首領たる緣で、彼は早くから平民黨に入つてゐた。マリウスもいたくケーザルの才を愛し、その盡力により、ケーザルは十五歳のとき、ユピテルの神祠の僧に選任せられ、十九歳のとき過激平民黨キンナの娘コルネリヤを娶つた。閥族黨の首領スラ平民黨を壓して權力を握るに及び、平民黨中より芟除すべき人物を物色して、表を作つた中にケーザルの名もあつたが、ケーザルは閥族中に近親が多いので彼等皆ケーザルのために助命をスラに乞うた。スラはその前ケーザルに迫つて、妻を離別すれば一名を釋さんと言つたのであるが、ケーザルは傲然として之れを斥けた。今またケーザルの近親等の哀願にあひ、スラは彼等に向つて、『卿等折角の乞ゆゑ彼をゆるさしても得させんが、しかしあの小僧の内には、マリウス以上のものが宿つてゐる』と評したといふ。然しこの時ケーザルはスラの手から宥免を受くるを屑とせず、紀元前八一年、自らイタリヤを去つて小アジヤに行た。これは當時ローマの法律として、市民權あるものは、刑の執行前本國を去れば咎めなしといふ定めであつたからである。

青年にして權勢に風せず

小アジヤに赴いて後、ケーザルは、ローマに反いたミレツス市を攻むる軍に加はつて功があり、紀元前七一年スラ死するに及び、ローマへ歸つて、東方で目睹したマケドニヤの知事ドラ

ベラの不法を彈劾した。更に紀元前七七年にケーザルは、ローヅス島に赴き、當時有名であつた辯論術の大家アポロニス・モロンを訪ねて、此術を學んだ。その途中海賊に囚へられて二十タレント（四萬二千圓）の償金を要求されたが、ケーザルは『自分の命はそれ計りの金で買はれるやうな安いものではない』と言つて、自分から進んで五十タレント（十一萬八千圓弱）を拂ふ約束をした。そして囚禁の中に在り乍ら、傲然として、恰も主人の如く、夜寢室の傍で海賊どものやかましい話ごゑなどがすると、『靜かにしろ』といつて叱り付けたといふ。それで海賊等に向つて、『余は償金を望どほり汝等にやつたあとでは、今度は俺が貴樣達をのこらず磔にしてやる』といつてゐたが、彼等は冗談な大言として聞き流してゐた。然るにケーザルは友人より償金を得て、無事に自由を得るや、直樣、また自費を以て有志の人を集め、船にのつて海賊の立籠つた島に赴き、彼等を片端から捕へて磔にしたのである。とにかくケーザルの東方旅行は、彼にローマの地方行政腐敗の實況を聞見する機會を與へて、後日の改革事業を實行せしむる機緣となつたのである。

海賊の手にありて之を叱責す

ケーザルの出世

平民黨の首領となる

ポンペイウスと結ぶ

紀元前七〇年、ケーザルはローマに歸り、寛宏の德と、大膽の勇氣とを以て大に人心を收め、平民黨の首領と仰がるゝに至つた。併し彼は未だ他の援助を求むる必要を感じて、ポンペイウスをその人に選んだ。當時ポンペイウスは、紀元前七二年イスパニヤに旗を擧げたマリウスの餘黨セルトリウスを征伐して勳功あり、聲望隆々たる有樣であつたのである。それでケーザルはその頃ちやうど妻のコルネリヤが死んで、無妻でゐたところであるから、ポンペイウスの一族の女ポンペイヤを納れて後妻とした。かくてケーザルは民主黨首領たる勢力を利用して、翌年はポンペイウスを推擧して、海賊征討の大將たらしめ、紀元前六六年にはポンッスの叛王ミトリダテス征伐軍の指揮官に選擧せしめた。一方には益々金錢を散じて盛んに人望を收攬することにつとめ、新たに土地分配法を定めて貧民を利せんと計つたが、これは閥族黨の反對に依つて成功しなかつた。紀元前六〇年にはケーザルはポンチフィクス・マクシムス（祭祀の大長老）の位置を爭つて、その運動のため千二百タレント（二百八十萬圓餘）の借金を背負ふに至つた。反對黨は金を贈つて、ケーザルに手を引かせようと試みたが、彼は拒絕した。しかし借金は益益殖えるばかりで、彼は二進も三進も行かぬ窮境に陷つた。かくて愈々選擧の當日には、ケーザルは涙をたたへて母に訣別し、『自分は今日、大長老となつて歸るか、それとも逃亡者となる

借債に苦む

か、二つに一つの道あるのみ』といつた。しかし彼は遂に首尾よく成功して大長老となつたのであつた。

翌年過激黨首領カチリナ政府顚覆の陰謀を運らしたことが露顯したとき、ケーザルも事に坐して嫌疑を蒙らんとしたが、危く免れた。紀元前六七年には、イスパニヤの知事に任ぜられた。しかし非常な負債のため、債主に迫められて任地に出發することができぬ。そこで彼は富豪クラッススに結び、クラッススは彼のために負債の三分の一を連帶として引負けたので、漸く出發することができた。

クラッススと結ぶ

閥族勢力を恢復す

第一・三頭政治

さてイスパニヤに於いて、ケーザルは未だ從はざる土人を征伐して大功があり。紀元前六〇年ローマに歸國した。ポンペイウスは、その前年アジヤ各地を平定して大功を樹てたが、その當時ローマは、彼のカチリナの謀反事件以來閥族の元老院が大に勢力を恢復したので、ポンペイウスの武力をも恐れず、彼がアジヤに於ける諸國の獨斷的處分に認定を與へなかつた。ケーザルはこの狀勢を見てポンペイウスと元來仲の惡かつたクラッススとポンペイウスとの間に立つて、二人を結ばしめ、三人聯合、閥族に當る計を立てゝ、爰に第一の三頭政治は成立した。この結果として、紀元前五九年ケーザルはコンスル（行政の長たる統領にて二人あり）に選任せられ、その同僚のコンスル・ビブルスを威嚇して、何事をも爲すを得ざらしめ、ポンペイウスの東方に於ける處置を悉く認め、又土地分配法を制定して、無產者に土地を分配して生產の道を講ぜしめ、一方富豪等と閥族との間を離間せしむるなど、よろづ心のまゝに振舞ふことができた。

三頭政治成る

翌年ケーザルはガリヤ・キスアルピナ（イタリヤの北部）及びイリリクム（今のオーストリヤのダルマチヤ）の知事となつたが、元老院は更に彼をガリヤ・トランスアルピナ（卽ち凡そ今日のフランス）の知事に兼任せしめた。これは彼をわざとこの方面に向け慓悍なガリヤ人と惡鬪させて苦しめようと考へたためである。しかしケーザルは少しもこれにひるまず、著々ガリヤ征討の事業を完成した。

ガリヤ知事となる

これより先きケーザルの妻ポンペイヤは、ケーザルの留守中クロヂウスといふ男と密通し、或祭日に、女服に人目を眩ました奸夫クロヂウスを家に引入れたところを、ケーザルの母アウレリヤに發見せられて、この事が評判になり、殊にクロヂウスは神聖なる神事の當日、さやうな不都合を働いたといふので、不敬罪にとはれて裁判事件となつた。ケーザルは直ちにポンペイヤ

ケーザルの妻は人に疑はる可からず

三頭政治復固定

を離別したが、法廷では妻の不義を否定した。それで裁判官がその離婚の理由を問ふに對して、彼は『ケーザルの妻は、人よりさやうな疑念を受く可からざる者でなくてはならぬ』と答へた。ケーザルのこの證言に依り、クロヂウスは許されたが、ケーザルはポンペイヤを離別し、ポンペイウスとの姻緣は切れたけれど、彼はなほこの緣を繫がんため、自分の前妻コルネリヤの娘ユリヤをポンペイウスに嫁せしめた。而してクロヂウスを護民官として自分の手下とし、事に託して閥族黨の首領カトー及びキケロを遠ざけしめた。

ケーザルは、紀元前五八年ガリヤ征伐に向つて後、紀元前五六年イタリヤ北部のルッカに於て、再びポンペイウス及びクラッスと會合して三頭政治を固定して勢力を揮ひ、ケーザルは今後五年間ガリヤ知事の任を續くることとし、五年間クラッススをシリヤ知事に、ポンペイウスをイスパニヤ知事に任ずると、而して紀元前四九年十二月ケーザル任期滿つるとき、不在のまゝコンスルとなる約束を定めて、再ひガリヤに歸任した。クラッススは紀元前五三年シリヤで大敗して戰死し、甚だしく東方に於けるローマの國威を落したが、ケーザルは前後八年ガリヤ征討の業に從つて、遂に首尾よくこれを平定した。爰に於いてケーザルの威名赫々として擧つた。閥族のキケロすらも『マリウスはガリヤ人のイタリヤ侵入を防ぎしのみ、未だ直ちに彼等の本土を衝くに至らなかつた。ケーザル出でて始めて彼等の巢窟を覆へし、アルプスより大洋(大西洋)に至るまで、またローマのため一の恐るべき敵を見ざるに至つた』と稱讃した。しかし吾人が今日の眼を以て見れば、ケーザルのガリヤ征討の事業は、たゞにローマ共和國を安んじたばかりではない。彼がガリヤ人を屈服せしめ、これを同化してローマの文明に浴せしめたのは、世界の文明を擴張促進する上に於いて、非常な功績であつたのである。

ケーザルはガリヤ人の巢窟を覆せり

ポンペイウス族んで閥族と結託す

ケーザルとポンペイウス

然るに一方ポンペイウスは、ケーザルの名聲が日に昂るに連れ、漸く嫉妬を起し始め、紀元前五四年妻ユリヤ死してケーザルと姻緣の絕ゆるに及び、閥族の元老院と結託して彼を倒さんと謀つた。しかしこのポンペイウス對ケーザルの爭は、ケーザルの方行動の巧なる爲め、いつもポンペイウスの方が非理に落ちるやうなはめになつた。例へば閥族及びポンペイウスは、ケーザルの任期が紀元前四九年十二月になつて始めて滿了するに拘はらず、その滿期以前にケーザルに召命を發して、速かに軍隊をすてゝ歸國せよ、應ぜざれば國敵と見做すべしといつたが、これは明かに法律を無視した事である。それゆゑケーザルの部下の護民官アントニウス等は、元老

院に對してその中止權を用ひようとしたが、ポンペイウスは部下の兵士をして白刃を以て彼等を脅迫した。それで護民官等は奴隷の服を被て、夜中ローマを脱し、ケーザルの許に逃げて行つて事情を訴へた。兵力を以つて人民の公安を保護する役目として、その身體は神聖不可犯と定つて居る護民官を威嚇するなどといふことは、益違憲の所爲である。これは偶ケーザルのために閥族に最後の打擊を加へる絶好口實を與へたにすぎぬ。

ポンペイウス敗北して殺さる

當時遠方から歸つて來たキケロは、この狀勢を目擊して、これはケーザル、ポンペイウスの何れをして勝たしむるも、閥族のための不利益であると考へて、兩人の間に調停を試みた。ケーザルは之れに對し『よし余は單身ローマに歸る可し。然しそれとともに、ポンペイウスも直ちにその任地イスパニヤに往かざるべからず』と答へた。ポンペイウスは、それでは自分の立脚地がなくなるので、これを拒絶し、こゝに調停に應ぜざるの責任を負はねばならぬ事となつた。その後彼はケーザル征討の軍を募つたがはか〳〵しく集まらぬ。その中にケーザルは、大擧南下してローマ府に逼つたので、準備のとゝのはぬポンペイウス及び閥族の元老院議官等は、倉皇逃れてギリシヤに走つた。ケーザルは進んでこれを追擊して、翌年ファルサルスの一戰、大にポンペイウスを破り、更に追うてエジプトに入つたが、エジプト人はポンペイウスを殺して、その首をケーザルの陣に獻じた。

三語の勝報

衆敵皆平ぎ總統となる

ケーザル天下を掌握す

今は天下にケーザルに敵するものは一人もない。彼は破竹の勢で、更に紀元前四七年、長驅して小アジヤ、シリヤに向ひ、ポンペイウスに與したミトリダーテスの子ファルナクスをゼラの會戰に破つた。この時の勝報を有名なる Vini, Vidi, Vici（我來り、我見、我勝てり）の三語に約して、本國に報じたのである。

同年末ケーザルはガリヤに赴き、翌四六年春、閥族黨の首領スキピオ及びカトーをタプススに破つて、ローマに歸り、十年間のデクタートル（總統）に任ぜられた。更に翌年、ケーザルはポンペイウスの二子、クネイウス及びセクスツスをムンダに破り、ローマに歸つて盛んなる凱旋式を擧げ、終身のデクタートルとなつた。今やケーザルの威望は極度に達した。しかし紀元前四四年マルクス・アントニウスが彼に王冠を捧げたが、ケーザルは受けなかつた。これは人民のこれを喜ばぬことを慮かつたからであるといふが、實際に於て彼は既に帝王の事を行つてゐたのである。そこで一部の誤解と嫉妬は次第に甚だしくなつて、彼に對する陰謀企てられ、ケー

ケーザル刺殺さる

ザルがパルチヤ征伐に赴く前に臨みて、彼を刺さんとする計畫成り、紀元前四四年三月十五日イデスの日を以て、ケーザルがパルチヤ征伐の事を議すべく議事堂にあつたところを、多勢集つて彼を暗殺したのである。時に歳五十八歳であつた。

ケーザルの功業

最近史家の斷案

さてケーザルに就いては、十八世紀の頃、ヨーロッパに民主主義の思想が極端であつた時代には、彼の人物事業の價は甚だしく見落され、人々彼の野心を責め自由の發達を阻害する敵であるやうに考へられてゐたが、近世の史論は、却つて彼の境遇と行爲の間に、必至の關係を認め益彼の偉大を證するに至つた。

今ケーザルの功業の特に大なるものを擧ぐれば、第一に、彼は人民の上下貧富の懸隔を除くことに盡力し、行政と財政の整理の上に心血を濺いだ。殊に地方行政に對しては、壯年より地方に在つて、深く弊害のある所を聞睹してゐたので、この方面の改革には最も心を苦しめ、いかにせば大ローマ國屬領内の人民が平等に平和幸福を享樂して、統一的文明の光に浴することを得べきかと考へた。その結果地方官及び各都市の官吏に對して嚴重な監督を試みて、彼等の惡

地方行政改善

其他諸種の改良

政を防いだ。彼は、又地方の繁榮發達を謀り、處々に植民市を造つて都市の人口過剰の弊を滅却する爲めに、無産者をこの植民市に移して有産者たらしむる道を啓いた。それがためには、嘗てローマ人が産業上の敵として破壞したコリント市やカルタゴ市をも再興した。ケーザルの時代には海陸軍は勿論警察事業等も、大に整頓して秩序を回復し、また奢侈の弊を憂ひては、法律を以てこれを禁制した。其他高利貸の跋扈を抑ふるため、貸借の利率を制限し、刑法の改正を行ひ、曆法を改定して、謂はゆるユリヤン曆を布いたが、これは今日もロシヤに行はれてゐる。

計畫中の大事業

ケーザルはまた文藝美術をも奬勵し、盛に大建築を起して、ローマ府の面目を一新した。尚ほ彼の計畫中には、ローマに二大圖書館及び博物館を起すこと、コリントの地峽を開鑿して、東西の交通に便にすること、チベルス河を改修して、ローマの衛生上實業上の便益を增進すること、及び最後に自らパルチヤを征伐して、東方にローマ文明を擴めんとしたこと等、何れも實に彼の大手腕を要する事業で、その完成に先ちて、刺客の毒刃に斃れたのは、惜みても惜む可きことであつた。

ケーザルが始めより、あれだけの地位を得んことを志してゐたか否か、それは分からぬ。彼

ケーザルの功業は發展的

が始終權力に渴してゐたのは事實であるが、果して史家モムゼンのいふやうに、始めから獨裁君主たらんとする志を抱いてゐたであらうか、或は騎虎の勢、次第に權力を得ると共に志も大きくなつて、遂にあれだけの事業を殘すに至つたのではないか。どちらかといへば、まづわが豐臣秀吉が、始め織田信長に依つて志をなさんとした時に、まだ天下を望むまでの野心はなかつた。これが次第に時勢の力で作り上げられて行つたと、同樣であると、見るべきである。若し夫れケーザルに實際名目まで王者たらんとする希望が、あつたかどうかに至つては、到底千古の疑問と云はねばならぬが、しかし事實に於いて彼の晩年はローマ帝國の皇帝であつて、彼が統一的ローマ建設の理想から言つても、到底いつまで共和政治の形式を守るにたへなかつたであらうと思はれる。

彼の寛洪

ケーザルの人物

ケーザルが本來寛大な德を備へた人物であつたことは、敵味方共に許すところである。彼に反抗したものと雖も大抵は宥した。たゞ政略上時に征伏の土人などに對して、殘酷な所爲を敢てするのは、やむを得ぬからである。彼が敵に對しても情の厚かつたことは、ポンペイウスの首を實檢に入れた時、涙にくれて面を背けたといふので分る。彼の統一的大ローマ建設の理想の上には、區々たる敵味方とか、ローマ人とか地方人といふやうな區別はない、一樣適材と信じたものを擧げて、適所に用ゐた。蕃族の酋長などにもずん〳〵市民權を與へた。

彼の大志

ケーザルの志の大きかつた例證は、彼がイスパニヤ征伐に赴く途中、ある寒村をすぎたとき、部下の者が『かやうな村では位置の上下を爭ふ必要もあるまい』と言つたのを聞いて『余はローマに於いて第二者たらんよりは、むしろこの村に於いて第一者たらん』と言つたといふ話や、それからイスパニヤの陣中に、アレクサンドル大王傳記を人に讀ませて聞き乍ら、はらはらと涙を落した。部下のものが怪しんで問ふと、『アレクサンドルは、余の年配には既に大帝國を作つてゐた。然るに余は今にして顧りみて何の爲すところもなかつたのを悲しむのである』といつたといふ。

部下を感化す

ケーザルは、將軍としてその部下の人心を收むる力の非常であつたばかりでなく、彼等の間に、義に依つて命を輕んずる立派な武士的精神を鼓吹した。その例は、彼の部下の一將が敵の捕虜となり、敵は彼の地位を重んじて釋さんとしたとき彼は昂然として、『ケーザルの部下は人をゆるすことはあつても、人にゆるされることはない』と言つて、立派に自殺したといふ話が

ある。ケーザルの感化力の偉大なるを見るべきである。彼はまた部下と難苦を共にした。あるとき進軍の際十分の宿舎を得ることができなくなつて、ひどい百姓家に假の宿營を求めた。このときケーザルは自分の爲めに設けられた上段の床を拒んで『名譽のことに於て上下はあれ。必要の前には上下はない』と言つて、傷病の兵士をそこに伏せしめ、自らは戸口の際の土間に寢たといふやうな話もある。

彼の孝心慈愛

家庭の人としてのケーザルは、母に孝行、妻に慈愛が深かつた。その當時のことゆゑ品行の方正如何は保證せぬが、特に惡かつたといふ證據もないのである。身體はあまり丈夫でなく、始終痩せて病ひ勝であつたが、いざ出陣となると元氣平日に百倍して、いかなる困難にも耐へた。

彼の文才

最後に彼は辯論にも仲々巧みであつて、文章も立派に書いた。彼の遺著『内亂記』『ガリヤ征討記』などを見ても、華美を避けた質實簡明の文章に一種の味ひがある。彼はまたラテン語の研究に興味を寄せて、これに關する著書もあつたが、惜いかな今は傳はらぬ。

彼の批評

生涯ケーザルの敵であつたキケロも、彼を評して『天才、頓智、文才、記憶、愼重、劃策、勉强、これ等の特質は、すべて彼の一身に集めたり』と言ひ、史家ドルーマンも『ケーザルは、將軍、政治家、立法家、法律家、辯論家、歷史家、詩人、文章家、數學家、建築技師として、その何れにも絶倫なり』と言つてゐる。彼が百般の武藝に熟し、戰術に於ては卓越した技倆のあつたことは、世既に定論あり、今更喋々する必要はない。實にケーザルは古來稀有の天才的偉傑である。

ローマの武士道

名將ピルスの寇

ローマが共和政時代に、まだイタリヤを悉く一統してゐなかつた頃、南イタリヤのギリシヤ植民地のタレンツム市を攻めたことがある。タレンツムでは到底敵はぬから、ギリシヤ本土の西北なるエピルスの王ピルスに救を求めた。ピルスは豫てより、イタリヤを征服せんとの野心を持つてゐたから、これ幸と騎兵二萬三千人、歩兵二萬二千人、投石兵五百人、象二十頭を以てタレンツムに入つた。ピルスの兵は傭兵ではあるが、多年の訓練を經て精悍無比と稱せられてゐる。殊にその部下は手々に長槍を携へ、隙間のない槍衾を作つて、ひたもの敵を突き立て、敵を塵殺せずんば已まずといふ精兵で、『長槍密集隊』の名は雷の如く轟いてゐた。而して之を率ゐるピルスは天下の名將である。その勇強なること推して知る可しである。此の強兵はヘラクレアといふ處で、ローマの軍勢と戰つたがローマ軍また無雙の強兵、死を賭して勇敢に戰ひはしたものの、長槍密集隊に逢つたのは始めてゞある。槍衾の中に突貫して奮鬪苦鬪をしたが、

エピルス王ピルス

ローマ人長槍隊と象の爲めに敗北す

忽ちに長槍に突き立てられてひるめいた。折しも巨象が息を切つて駈け出した。ローマ人は未だ曾て象を見たことがなく、之を大牛と名づけた位であるから、急に處するの策なくして散々に蹂躙せられ、一大敗北をせざるを得なかつた。

苦境に陷つて益々勇猛

ヘラクレアの大敗に、ローマの都も危いと云ふ有樣であつたが、眞の勇者は苦境に陷つて益益勇猛心を起す。勇敢なるローマ人は、常に大敗北の後に於いてその豪いところを現はすのである。卽ち更に新兵を徵發して、最後まで戰ふことに決したが、ピルスは、大將のキネアスといふ者をローマに遣はして、ローマと和議を講ぜしめた。キネアスは辯舌の爽やかな、外交の巧い大將である。ローマに來つて、『若しローマにして、他の民族に對する宗主權を棄てるならば、ピルスは總ての捕虜を歸還せしむるのみならず、ローマを友邦として取扱はう』と云ふ旨を述べた。此の時ローマは敗戰の後を受け、他のイタリヤ人の中には、款をピルスに通ずるものが續々あると云ふ有樣で、再戰は困難であるにも拘はらず、之に對する元老院の態度は實に立派なもので、後世の讀史家をして覺えず奮起して手に汗せしむる。

ローマ人の決心

國士クラウザウスの演說

悲壯沈痛なる老盲目の演說

元老院議員の一人に、アッピウス・クラウヂウスと云ふのがあつた。年既に老境に達し、加ふるに兩眼明を失してゐたので、平生は元老院へも出席しなかつたが、此の報を聞いて靜としては居られず、輿に乘つて議院に來り、入口の處で輿から下り、息子や婿やに扶けられて、漸くその席に著くことを得た。他の議員もいたく感動し、沈默して尊敬の意を表した。クラウヂウスは、席に著くや否や、直ちに起つて演說を始めた。

『わが國民よ、予は明を失ひしことを悲しむ。而かも予は、此度ローマの名譽を汚すべき恥辱極まる申し出を聞くに及んで、予の聾にあらざることをも悲しむ。吾等の祖先は常に云つた「若しアレキサンドル大王がイタリヤを攻めて來たならば、彼は決して世界に敵なしと豪語することを得なかつたであらう。その時、彼は吾等の祖先の前に敗走するか、或は戰場に討死をして、ローマの名譽の光を增したであらう」と。あゝ此の誇は、今何れの處にか在る。……卿等はピルスと和議を講せば、それで彼の毒手を免れることが出來ると思はれるか。若し卿等にして、ピルスが卿等に加へた無禮の罰を彼の上に加ふることなく、彼を歸らしめば、

堂々たる答

キネアスの激賞

ギリシヤの諸君主は卿等を輕蔑し、屢々卿等を襲來するであらう。』

此の演說は元老院を震撼し、議員は何れも感憤して再戰に決した。

怪物の如きローマ軍

乃でローマは、ピルスの使者キネアスに向つて答へた。

『若しピルス王にしてイタリヤを去らん乎、吾等或は王と同盟問題を議することもある可し。然れども武器を持つて此の國に留まる間は、吾等ローマ人は飽くまで反抗し、死に至るまで戰ふであらう。』

キネアスは此の答を聞き、ピルスに報じて曰はく、

『寔にローマの元老院は、堂々として王者の集會の如くである。而してその人民は、レルナのヒドラ（ヒドラとは多頭の怪物で、斬れば斬る程後から頭が出來ると云ひ傳へられてゐる。）の如くである。何となれば、現在のローマには以前に倍する兵數があり、しかも尙ほ武器を持つべき多數の兵が殘されてゐる。』と、此の報を聞いて、ピルスは何んなに感じたであらう。處がまた爰に、これに優る勇ましい話がある。

黄金巨象吾を奈何

ファブリキウス封金を返す

巨象に恐れず

此の後、ローマのカイウス・ファブリキウスといふ者は、捕虜交換の使者として、ピルスの陣中に赴いたが、その折、キネアスは其主ピルスに、

『此の男は、德義と勇敢とによつて、全ローマ人に尊敬せられ居れど、極めて貧乏なる人にて候。』

と告げた。で、ピルスはファブリキウスを招いで盛宴を張り、一封の金子を贈つて、

『これは足下に望むところあつて差出す賄賂ではない、足下を親愛する至情を表はす驗である。』

と云つた。ところがファブリキウスは、斷然それを拒絶した。翌日になつてピルスは又宴を開き、ファブリキウスを招いたが、後の幕の中には象を容れて置いた。宴闌にして合圖と共に幕は拂はれ、巨象は幕地にファブリキウスの頭上に鼻を出し、奇聲を發して呻り出した。けれども、彼は泰然として動かず、微笑を含みつゝピルスに向つて、

『王は昨日、黄金を以て予を動かさうとせられたが、今日もまた此の動物を以て予を動かさうとせられる。併しながら昨の不能なるが如く、今日も亦た不能である。』と云つた。

又温言を容れず

ピルスの侍醫密書を送る

王よりも予を好まん

ピルスは此の清廉と勇敢とに感じて、

『何うかローマと和睦の出來るやうに周旋して貰ひ度い。事成りし曉は、卿を招いて上將となし、寡人は卿に對して、賓客の禮を執らむ。』

と云つた。處がファブリキウスは、靜かに之に答へて、

『王よ、そは王の不利益とならむ。何となれば予にして王の下に來らば、王に從ふ人々は予と交を結ぶに及んで、王よりも予を好むに至るべければなり。』と。

ファブリキウスは、歸つて後統領に選ばれたが、その時ピルスの侍醫の一人が、特に密書をファブリキウスに送つて、若し相當の報酬を賜はるならば、予はピルス王を殺害しようと申し出た。彼は密書を見るや否や、これを同僚の統領（ローマの統領は二人あつた、行政の元首で毎年改選せられた）に示し、連署の書狀をピルスに送り、『ローマの統領カイウス・ファブリキウス及び、クインツス・エメリウスは、爰にピルス王に挨拶す。王は實に王の敵に對するが如く、

その友に對しても描なき審判者なり。王にして若し此の書を見られなば、王が善人と戰ひつゝあると同時に、惡人を信用しつゝあることを悟らん。吾等の此の事を王に報ずるは、王を愛するが爲めにあらずして、吾等が正當になし得ることを、卑怯なる手段によつて遂げんと云はるるを恐るゝが故なり。』と云ひ送つた。

兵士勇敢なる誇らず盾なを失ふを恥づ

殿戰功成つて號泣す

以上の話は、ローマ人の傳ふる所に據りしなれば、多少の誇張は有り得べしと雖も、ローマ人が概して立派な氣象を持つて居た事は疑ないと思ふ。それ故、兵士もまた甚だ强く、單に勇敢なるのみではなく、規律を守る事が頗る嚴重であつた。殊にケーザルの頃に至つて、その戰術は最上に達し、規律もまた甚だしく進んだ。ケーザルがブルタニヤ卽ち今のイギリスを攻めた時の事、土人が不意に前衞隊を襲うたので、前衞隊は沼地に陷つて非常に苦しんだが、その時一人の兵は敵軍の眞只中に跳り込み、死力を盡して殿戰をしたので、一隊は爲めに命を全うして退くことが出來た。然るにその兵は最後まで戰つてゐたので、深き泥水に苦しめられ、九死の中に一生を得て、漸く平地に上つたが、それが爲めに盾を泥中に失つた。ケーザル始め一軍の士卒は、彼を見てやんやゝと褒めはやしたが、彼は目に涙を湛へつゝ、恐るゝケーザルの膝下に跪づき、盾を泥中に委せし罪を許されんことを請うた。蓋し軍規には盾を失ふべからざるに、彼はこれを泥中に遺したからである。

命令を守りて灰中に慘死す

死する覺悟

恁くの如くローマの兵士は、勇敢で、規律が正しくて、假令死が背後から脅しても、決して命令に背くことをしなかつた。文中に掃んだ三色版（略す）は、紀元七十九年、ヴェスピウス山の噴火によつて、ヘラクラネウム、及びポンペイの二市が埋沒せられた時、灰の中に埋められた番兵を描いたもので、英人ボインタア・バートの筆である。千八百六十四年、ポンペイ市のヘラクラネウム門――ヘラクラネウムへ通ずる道にある城門――を發掘した時、その穹窿内に於いて此の番兵を發見した。思ふに天災の爲め混雜して、番兵に何等の命令を發する暇がなかつたので、番兵は命令通り飽くまでも城門の下に屹立つて動かず、遂に灰燼中に埋めらるゝに至つたものであらう。わが國では『大君の任のまに〳〵勤しまん』と云ひ、支那では『命を泰山の重きに比し、死を鴻毛の輕きに比す』などと云つて、昔から兵士は命令を二なきものに思ふ習

慣があつたが、此の番兵などは日本の軍人に比べても負を取らぬ程立派なものである。此の時はローマ帝政時代の極盛時で、ローマにも大分奢侈の風が入つて居つたが、兵士の間には矢張り恁くの如く、規律を重んずる精神が燻んであつたと見える。而かも此の後百五十餘年を過ぎては、國民次第に兵役に就くことを厭ひ、蠻民を傭兵として、漸く軍隊を充たすやうに成つたのである。

西洋に於ける封建制度と武士道との起源沿革

一

そも〳〵言語は、無意義に製造せられたるものに非ざれば、或は事物を研究するに當りて、之を現はす言語の根源を極むれば、事物の性質又は起源を、一層明晰に看取し得べき場合尠しとせず、茲に論究せむとする封建制度の如きは、其の好例と稱すべし。

封建てふ語の由來

封建制度は、イギリス語にて Feudal System と言ひ、ドイツ語にて Feudalwesen 又は Lehnswesen と言ふ。此の Feudal なる語は、Feudum より生じたり。Feudum はラテン語形なれど、實は純ラテンにあらずして、ドイツ語の Feo よりラテン語式に造られし語也。Feo とは元來家畜の義にして、轉じて財産の義となりぬ。これ昔日には家畜卽ち財産なりしが故なり。ラテン語にても、財産 Pecunia 卽ち Pecus より生じたる語なり。中世紀に於いて、財産と稱すべきは金錢に非ずして土地なりき。かく言語の起源を探究すれば、封建制度なるものは財産卽ち土地を基礎としたる一種の社會組織なるを推知し得べし。またドイツ語 Lehnswesen を解剖す

れば、Leihen 卽ち『貸す』と云ふ語より生じたり。卽ち土地の貸與より生ずる關係に基きたる制度なるを知るべし。而して一般の意義に從へば、封建制度とは、土地を貸與し、其の報酬として、借地人に兵役の義務を負はしむる關係、是れなり。

ヨーロッパに封建制度の起りたる原因は、之れを四項に區別して看るを得べし。

第一　古ゲルマニヤ人の習慣

第二　經濟上に於ける個人間相互信賴の關係

第三　混亂を極めし社會に秩序を作る必要

第四　兵制改造の必要

二

第一原因　古代に於けるゲルマニヤ人の各種族は、大半自由民にして、各人の權利は全く平等なりしが、其の種族内には、おのづから豪族ありき。これ決して法律上の特權を握る者にあらねど、家系舊く、財産多き者にて、四隣に聲望高く、ゲルマニヤ人の舊慣として、時々酋長以下の役員を選擧する際には、自然彼等の中より當選すること多かりき。かゝる豪族の家には

習慣上の原

附近の青年等、恒に出入し或は寄宿して、家長の愛顧を受け、其の恩惠に報いんため、戰時には其の人の傍を寸時も去らずして、大に勤むる所ありき。此の習慣は、後代にて言ふが如き主從の關係ならで、全く恩惠に報ゆるといふ意味なり。吾が國にて例を擧ぐれば、賭博者間に行はるゝ親分子分の關係に類似したり。此れ等の青年團體は身命を惜まず、恩人たる豪族の爲に奮戰し、其の人戰死すれば、彼れ等また枕を列べて討死するが如き誠實なる關係を保維したり。此の古ゲルマヤ人の習慣が、間接に封建制度の原因となり、殊に封建時代の忠といふ道德心を鞏固ならしめたる一因たるは爭ふべからず。

親分子分の關係

第二原因　經濟上に於ける個人的信賴の關係を看るに、フランク國にては、連年戰役ありしため、自由民中に貧者を生じ、彼れ等は其の土地を所有し得ざる程に生活難を感じたり。かゝる貧困者は已むなく近隣の豪族の下に行き、土地を借用して耕作し、以つて漸く貧苦を免れぬ。其の恩義に報いむがため、戰時に於いて己が依賴せし豪族のために盡瘁せしこと、前記せる青年等に異らざりき。而して豪族のみならず、王も斯る多數の依賴者を有したり。此の關係は亦後代の主從の關係となる初步にして、封建制度の重要なる原因の一なりとす。

經濟上の原因

第三原因　チャールス大帝死後混亂を極めし時代に、秩序ある社會組織を作る必要ありしこと

チャールス大帝の地方官

也。今少しく溯りて、チャールス大帝の事業を顧るに、大帝は大に中央集權の實を擧げ、地方官を各地方に派出して全領土を支配したり。全國は數多の（Gau（縣）に區劃せられたり。今日ドイツ又はスウィスに、ガウなる音を附したる地名の存するは、此の時代の名殘なり。例へばドイツのブライスガウ、ヘンネガウ、スウィスのアールガウ等の如し。此の一ガウを支配する知事を伯（イギリス語の Count、ドイツ語の（Graf）と稱し、大縣又は數縣の知事を公（イギリス語の Duke、ドイツ語の Herzog）と稱し、帝室財源地を管理する知事を帝室領伯（イギリス語の Count Palatine、ドイツ語の Pfalzgraf）と稱し、次に帝國の邊境を守備する知事を、ドイツ語に Markgraf、イギリス語に Margrave 又は Marquis と呼べり。即ち我國にて侯と譯するものなり。されば封建時代は勿論、今日まで西洋諸國にて用ゐられたる爵名は、本來地方官名なりしなり。

天下混亂より來る封建制度の原因

チャールス大帝は、斯くの如く郡縣制を定めて、其の完備を圖りたれど、其の歿後には、彼れに嗣ぐべき英邁の君主なく、諸公子互に位を爭ひ、各地方官等も野心を逞うして、各自諸公子に合力し、爲に天下は非常に混亂を極めたり。而して此れ等の地方官等は、合力の報酬として、己が支配する地方を自己の所有地と等しく支配せむとの條件を作り、後更に變じて其の領地を世襲的となすに至れり。これ實に土地に人を封するの濫觴たり。彼等地方官等は、また其地位を强固にする爲め、土地を貸して多くの人を養ひ、戰時依つて以て助としたり。之れと同時に、大僧官等皆な其の管轄地に封せらるゝに至り、亦其土地を貸し、多くの從僕を養ひ、以て其の住地を鞏固ならしめんことを勤めたり。

又自由民の地主等、其土地を一旦大身の人に獻じ、改めてこれを借り、以つて其保護の下に立つことあり。之を Recommendation（我國の勢に募るといふに當る）と名けたり。此等の事畢竟當時亂雜を極めたる時に於て、或る方法に依りて秩序を保つの必要より、君臣主從の關係を作り、社會に一種の整然たる組織を起さしめたるものにして、即ち封建制度の基礎となりたるなり。

兵制より來る原因

第四原因　次に重要なる原因は、兵制改造の必要なり。そも〳〵ギリシヤ、ローマの世には一軍の中堅たりしは步兵なりしが、中世の初期に入りては大に騎兵の利を認めたり。ギリシヤ、ローマ時代とても、騎兵の利を知らざりしに非ず、また敵軍の騎兵の爲めに苦戰したる例は少なきにあらず、ギリシヤ人はペルシヤ騎兵に惱まされ、ローマ人はギリシヤの象兵（これは騎兵に準ず可し）、カルタゴ騎兵、パルチヤ騎兵等に幾たびか惱まされたり。されど兩國人と

外寇の騎兵を防ぐの困難

もに戰術に長じたれば、初こそ騎兵の攻擊に苦みたれ、幾許もなくこれに對する防禦法を講じ依然歩兵を以つて軍の首腦に充てたり。轉じてゲルマニヤ民族を視るに、彼れ等は勇剛なりしかど、智力に於いては到底ギリシャ人又はローマ人に及ばざりしかば、其の戰術は遠く古代に及ばざりき。而も彼れ等は恐るべき騎兵に遭遇せり。第一はモンゴル種のフン人にしてこれ騎射を善くし、其の攻擊は頗る强烈なりき。第二はサラセン人なり。彼れ等は輕裝して馬に跨り長槍又は彈力ある刀劍を振ひ、進退出沒自由にして疾風の如く敏活なりしかば、此れに對抗せしゲルマニヤ民族の苦戰は非常なりき。サラセンのガリヤに侵入せるや、チャールス・マルテルは、之れをツールとボアチエールの間にて擊退したることありと雖も、そは戰術に長じたるよりも寧ろ地利の良かりしに由る。三流の合する地、乃ち敵騎兵が吾が側面を襲擊し能はざる地點に陣を敷きて奮鬪したればこそ、善く勝利を博し得たるなれ。

騎兵を養ふ必要

斯くの如く屢〻强勢なる騎兵に困められしかば、フランク人は大に騎兵の利を認めて、其の編制を圖りぬ。然るに騎兵の編制は、歩兵を養成するよりも遙かに多額の資金を要するが故に之れを强ふること頗る困難なりき。ギリシャ、ローマの時代には、騎兵たることは殆ど上流者の特權なりき。これ彼れ等が一切の經費を自辨したればなり。然るにゲルマニヤ民族は、自由民間に兵役の義務權利同等にて、且つ概して富裕ならざりしかば、騎兵隊を編制する際には、主權者が其の經費を支出せざるべからず。これが爲に、政府は嘗て寺院に寄進したる土地を回收し、これを財源となし、土地を貸與して、以て漸く多數の騎兵を備ふるを得たり。これ封建制度と武士道との起源なりしなり。

重騎兵養成と小堡砦建築に依り外寇を防ぐ

チャールス大帝の國土全く分裂し終りたる後、ホンガリヤに占據せるモンゴル種のマジャルがドイツに入寇するや。ドイツ人は亦もや非常なる艱難に遭遇せり。マジャル亦騎馬に長じ、疾風の如く突進して一齊に箭を放ち、また電光の如く退き去るが故に、應戰甚だ困難なりき。さればサクソニヤ家のドイツ王ヘンリー一世は、初めこれを防ぐ能はずして、マジャルに年金を與ふることを約して一たび和を結び、其の間荐りに防備策を講じたり。彼は先づ重き甲冑を著けたる騎兵を多く養成し、一方には要所々々に堡城を築けり。今日ドイツの諸市にて、此のマジャル防禦のために築造せられたる城を本として起りたるもの少からず。クエッドリンブルグの如き是れなり。なほ此外にも連りに小堡砦を築かしめて敵の襲擊に備へたり。當時の勅令の一に從るに、土地所有者九人を以つて一團を組織し、一堡砦を築き、中一人は常に堡内に在り、他の八人は戰時入城すべく、平常には堡内管理者の土地耕作を援くべし。而し

て此れ等九人の收穫の三分の一を砦中に蓄へて籠城に備ふべしと。かく準備怠りなく、愈よ整頓するや、再びマジャルと開戰して、九百三十三年大に之れを破りぬ。是より後長年月の間、ドイツ兵は列國最强の名を擅にしたるか、これはその城堡の多きと彼の重甲を著たる騎兵のあるとに依れり。去れば列國亦其の制に倣ひしが、この城堡建築及び重騎兵養成が封建制度及び武士道の根源となりしなり。

封建利度の完成

如上の諸原因より、封建制度は漸く發達して、第十世紀頃には完備の域に達し、帝王の下に諸侯あり、諸侯の下に武士あり、武士の下に家人ありて、社會の秩序洵に整然たりき。其の制度には弊害もありと雖も、而も時代の必要に應じて組織せられたるものにて、混沌亂雜の社會に兎も角も、一種の秩序を匡して平和を維持したる功績は沒すべからず。而して此の封建制度維持の必要より武士道といふ者は起れり。

三

武士といふ語は、ラテン語にて Equites、ドイツ語にて Ritter、フランス語にて Chevalier と云ひ、何れの語源を見るも、明かに騎馬武者を意味し、吾國にて騎士と譯したる人もあり。但しイギリス語の Knight はアングロサクソンの Cniht（從僕の義）より出でたる語なり。かく武士は騎兵隊組織の必要より生じたる者なれば、騎兵卽ち武士なること、猶ほ商人 Mercator と云へば、市内に住居する人と同一義なること、我國に於ける町人の稱の如し。既記の如く封建制度は十世紀の末に完成せるが、此制度維持の必要上より武士道なるもの起り、殊に十字軍時代に最も完備隆盛の域に達して、世の尊敬を受くるに至りぬ。

武士の語源

武士道

武士道の何物たるかを究めむには、其の生起したる理由より觀察するを便とす。元來兵役が根本なれば、第一に武士は忠誠にして勇敢なるべし。これは說明の必要なかる可し。次に忠君を要義とするが故に、其の德を守る誠實の心なからざる可らず。されば主從の約を結ぶや、先づ神に誓はざるべからず。神に誓ふには、信仰心深からざるべからず。乃ち敬虔の念を必要とする所以なり。さて勇敢なるも無法の蠻勇なれば、却つて秩序を破壞するが故に、之れを防ぐため任俠を尙びて、强を挫き弱を助くるの精神なかるべからず。而して弱者中、殊に纖弱なる婦女なれば、之れを保護せざるべからず、此の婦人保護の氣風は、一轉して婦人崇拜となりぬ。

忠誠敬虔任俠

元來ゲルマニヤ民族は、ローマ人に比すれば、古より婦人を優遇したり。これは一時彼等の

間に婦人の數少かりし樣の事情に依りて起りたるものか。其の原因は兎に角も、婦人を敬愛したるはローマ人の認めたる事實なり。而して一方にはキリスト教輸入せられ、漸次に信仰の對者が、神又はキリストよりも、寧ろ其れ等と人類との間に立てる媒介者、例へば使徒等に移るや、イエスを生みし女聖マリヤを尊敬するに至り、其の氣風は漸次に旺盛となり、援助を請ふ時の如き、キリストの名よりも、寧ろマリヤの名を呼べり。されば當時の感嘆詞には、普通にマリヤの名を用ひたり。今にてもヨーロッパ諸國には、此類の感嘆詞多く存せり。此のマリヤ崇拜とゲルマニヤ民族の一性質たる女子尊敬とが、相結びて婦人崇拜となり、更に武士道の誠實と混和して、婦人に對しては誠實なるべしと言ふが、武士の理想とする所となりぬ。而して武士は一人の女性を定めて崇拜し、其の爲には殆ど奴隷の如きことをすら厭はず靈瘁し、後には結婚するを普通の例とせり。若し其の婦人を棄つるが如きことあらば、彼れは武士道に背きたる者として大に擯斥せられたり。今日歐洲にて婦人を尊敬するは、此の時代の遺風に外ならず。既記の如く主君には忠、婦人には誠實ならむには、必ずや禮儀なかるべからず。これやがて同輩及び下輩に對しても行はれ、各人互に名譽を重んじて之れを傷くるを恐るゝが故に、何時しか作法禮儀上の不文律生じて、武士の行動を規定したり。

女子崇拜の由來

禮儀作法

四

武士階級の成立

武士は騎兵の必要より生じたるものなれば、當初には決して階級ならざりしかど、漸次に階級となりて、凡そ武士たる者は武士の子にして規定の修養教育を受けたる者ならざる可からずと云ふ習慣生ずるに至りぬ。以下簡略に武士養成の制を述べむ。

武士の初等教育

武士たらむとする者は、七歳にして父母の膝下を離れて、國王、諸侯、或は武士の家に入り小姓となりて其の家族に仕ふ。元より家僕にあらざれど、其の爲す所は、或は婦人の裾を持ち或は給仕人となり、或は來客を送迎して、禮儀作法を學び、また武士道の物語を聽くを常とせり。當時の格言に、人に從ふは人を使役する初なりとあるが如く、少年は先づ第一に服從せざるべからず。而して此の間、城中の僧侶より宗教上の教訓を聞き、或は音樂を學べり。されど當時は、國王にして署名し得る者は學者なりと稱せられし程なれば、一般に文事を等閑視して武術に重きを置けり。從つて少年の學ぶ所も亦武事を第一とし、また時々遠足を試むることなどありき。

十四歳に達すれば、或る一人の武士に仕へて、從士（イギリス語の Squire、ドイツ語 Knap-

従士

ヘラルド

武士と爲る儀式

ne）となり、是より劍術、槍術、乘馬等總ての武藝を習ひ、また力量を養ひ、疾走に熟練し、或は重き鎧を著け、重槍を持ちたるまゝ宙返りを試み、或は疾走して馬上の人を逐ひ、其の後鞍に飛び乘る等、種々の方法によりて體力を強壯にし、又主人の馬を洗ひ、其の甲冑を磨き、或は其の槍を持ち、主人に隨うて演武會及び戰場に出でて後援となり、槍折るれば副槍を與へ、主人落馬すれば彼れを負ふ等、出來得る限り忠誠を勵む。今日の從卒は此の從士の遺風に外ならず。又時には主人に隨うて旅行し、或は特に主人の許可を得て、單獨に旅行して、各地の武士の姓名、武術、氣風、或は演武會の景況を視察し、還りて後之れをヘラルドに報告す。ヘラルドとは武士道の副產物にて、武家の作法典故に精通し、時には貴族の使節となり、禮式場裏の指揮者となり、演武會には審判者を勸むる者也。

從士はかく修業を積み、二十三歲に達すれば、嚴肅なる儀式によりて武士の列に入るを例とす。儀式の日定まるや、候補者は數日前より斷食祈禱し、當日は婦人の手を借りて鎧を著、神壇前に出でて祈禱す。祈禱終れば證人として左右に立てる二人の武士は、此者の家系正しく、キリスト信者にして、從來卑劣の行爲なかりし事等を證明す。次いで候補者は當日の重なる武士の前に跪く。此時件の武士は候補者に向ひ、神に誓つて勇敢、柔和、誠實なれと言ひながら、

武士に二言なし

主從の義務

劍を以つてその左右の肩を一回づつ、頸の邊を一回打つ。之れを武士の打（獨 Ritterschlag）といふ。終れば左右の證人たる武士は神壇へ供へられたる甲、劍楯及び黃金の拍車を取りて之れを帶ばしむ。此の際種々敎訓の格言を語るは例也。かくて式終り、彼れは一個の武士となる。さて一旦武士と成りし者よりは、彼れが武士道に背かざる限りは、其の甲冑、槍、劍、楯、乘馬等を奪ふこと能はず、また捕虜となるも彼れを縛すること能はず、彼れ若し捕虜となるや、償金若干を拂ふべしと誓言すれば、其の一言は最も有力なる證書にして、別に擔保もなく其の儘放たる。以つて武士が如何に誠實を重んじたるかを推知すべきなり。

武士が忠誠を誓うて主取りする迄は全く獨立なり。また一朝主取りするも、納稅の負擔を免せらる。されど以下記する四種の金錢は之れを負擔するの義務あり。（一）十字軍に關する獻金（二）己が主人の敵に捕はれし時の償金、（三）自己の長子が武士となる場合の納金、（四）己が女子の結婚する場合の納金、此の四種に關しては出金せざるべからず。而して自ら其の領內より租稅を徵收し、夫役を課するは自由なりき。

武士には、亦自己一人の意見にて、他人を武士とするの權利を有し、王公と雖も武士たらんと欲する者は、他の武士に依りて其式を經ざるべからず。武士は概して小城廓に住居し、平常は

演武會

單調なる生活をなせども、時には演武會を開會す。此の時には諸方より夥多の武士來會し、武を競ひ技を戰はし、其際各其の崇拜する婦女の徽章をハンケチ又は楯に附して、其の婦女の名譽を發揚せむとせり。又フランス或はイスパニヤに特に盛んに行はれたるは武士が所謂武者修業のために諸方に遍歷し、冒險任俠の行爲に出でて武士道を磨けること也。其の旅行中、他の武士と邂逅するあれば、互に禮法を重んじ、各自其の崇拜する婦人の名譽を稱揚し、時には之れが爲に試合を演じ、負けたる者は、はる〳〵勝者の崇拜する婦女の下に赴きて、試合の顚末を語るが如き奇なる習慣ありき。武士の社會に於ける位地、又婦人に對する態度斯くの如くなりしかば、中世紀の文學にも其の趣を現はして、任俠戀愛等に關するミンネ・ゲザング(Minnegesang)を生せり。所謂武士道文學之なり。

武者修行

武士道文學

武士の罰

武士は一方に於いて大に信用尊敬せられしかど、一たび武士道に背馳することあれば、極めて苛酷なる屈辱を被れり。若し斯道を汚す者あれば、彼れを公會場に引き出し、先づ其の馬を奪ひて木馬に乘せしめ、次いで甲冑、楯、拍車等を剝奪して、前記せるヘラルドは公衆に向ひて。『玆に武士あるや否やを問ふ。』勿論これに答ふる者なく、輙ちヘラルド更に『玆に武士居らずと認む』といひて、馬の尾を截り拍車を糞塊中に投じて、彼れより武士たる資格を褫奪するなり。

五

武士道の利

封建制度と武士道とは共に時代の要求に應じて生起したるものにして、慥かに效力を有したり。武士道の理想の如き、中々に高潔にして、國家社會の維持上、萬世に傳ふべき獻身的精神の含まるゝものあり。これ歷史に徵しても知るべし。今日大國民として存立する國家は、概して一たび封建制度の時代を經過し、國力微弱なるものは、完全なる此の制度を有せざりき。これ國力發展に力ある健全なる精神が、封建制度に依りて一種の秩序ある時代を經過せると、武士道の養成せられたると否とに基因すれば也。

武士道の弊

轉じて武士道の缺點を觀るに、こは人心を束縛し、識量を狹隘にし、階級的精神を強め、平民を壓迫し、經濟上の發展を甚だしく妨ぐ。中世紀に於いて精神界及び經濟界が極めて不振の狀態に在りしは、全く此の制度の弊害と謂はざるべからず。されば此の精神界と經濟界とが發展せんとする氣運の起れる時に、封建制度がその障碍物となりしは自然の勢なり。

十字軍の結果として、人智大に進歩し、又經濟上に資本の增加を來せり。これより商業進み、

冒險探檢の事業興りて、或はアメリカ大陸の發見となり、或はインド航路の發見となりて、益す經濟上の發展を大ならしめたり。此の資本の增進と人智の進歩とは、封建制度と全然正反對の傾向を有し、封建制度は總ての活動及び交通上に、妨害を爲すこと尠からざれば、一般に其の破壞を望むの氣風を生じ、諸方の君主等は此の風潮に乘じて、大に中央收權の實を擧げむことを企て、殊は新にヨーロッパに入寇せるトルコの君權强きが爲め、其勢の旺盛なるに刺戟せられ、其の念更に强烈となり、苟しくも乘ずべき機會あれば、部下の領土を沒收せむと謀りぬ。之れが爲には武士道を無視して、極めて狡獪なるマキャベリズムとて卑劣なる方法を利用して益々成功し、輿論も復た之を援助する所多かりき。

君主權增大封建制度崩潰

次に兵制の變化も、亦封建制度及び武士の制を衰退せしむる原因となりぬ。中世の戰爭は、騎兵の突貫を以つて勝敗を決したり。從つて變化少く、其の戰術は、ギリシヤ、ローマ時代に比すれば、遙かに劣れり。されど中世の末期に至り、漸次に步兵を以つて騎兵を破るの方法研究せられたり。例へば、イギリスと、フランスと戰ふや、イギリス兵は弓の速射法を練習し、エドワールド三世王は射手の前面に柵を造りて敵騎兵の突貫を妨げたり。又スウィス國人は山嶽の間に成長したるが故に、善く地理を利用して騎兵を苦めたり。其の軍の組織は、長槍隊とハレバルド隊との二種に分れたり。ハレバルドとは斧と槍と鉤とを兼備したる武器、譬へば支那の青龍刀と方天戟とを兼ねたるが如き武器也。其の長槍隊、前面に隙間なき槍衾を作り、以て例の騎兵の突貫の勢を挫き、騎兵の逡巡するを見るや、後方よりハレバルド隊突進して猛烈なる攻擊を加へて、大に騎兵隊を困めたり。またボヘミヤの宗教改革家フスがコンスタンツに於て、異端者として焚殺さるゝや、彼の信徒大に憤り、干戈を取りて帝軍に對抗したり。此の時騎兵の突貫を防がむため、彼等は多くの車輛を聯ねてこれを車城（Wagenburg）と名づけ、前方に列ねて進退意の如く活動し、大に敵軍を惱ましめたり。此れ等の實例ありしかば、步兵の利と戰術研究の必要とは漸く一般の認むる所となり、終に再び步兵を以て軍の主部となす風行はれ、爲に武士の必要無くなり、從つて武士を本位とする封建制度の衰微を來せり。

イギリスの弓兵

兵制の變化

スウイスのハンボルド隊

フス信徒の車城

傭兵制度

火器の使用

かく一方には、步兵戰術の利知らるゝと共に、各國に傭兵なる者組織せらしたり。これ君主が一定の賃銀を拂ひて雇ひたる兵卒にして、此の常備軍にて諸侯を掣肘し得たり。又サラセンより傳來したる火器の漸く用ひらるゝや、大砲は瞬間に堅固なる城堡を壞ち、小銃は遠距離にて武士を倒したれば、今や城堡の堅固も個人的勇氣も何等の效なきに至れり。これ封建制度と武士道との衰退には有力なる原因となりしなり。